

鹿児島工業高等専門学校				電気情報システム工学専攻				開講年度		平成30年度 (2018年度)					
学科到達目標															
科目区分		授業科目	科目番号	単位種別	単位数	学年別週当授業時数								担当教員	履修上の区分
						専1年				専2年					
						前		後		前		後			
						1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q		
一般	必修	総合英語	0025	学修単位	2	2								塚崎 香織	
一般	選択	科学技術英語	0026	学修単位	2			2						坂元 真理子	
一般	選択	現代企業法論	0027	学修単位	2			2						松田 忠大	
一般	選択	国際関係論	0028	学修単位	2	2								藤内 哲也	
専門	必修	特別研究Ⅰ	0001	履修単位	4	6		6						逆瀬川 栄一	
専門	必修	特別セミナー	0002	学修単位	2	2		2						逆瀬川 栄一	
専門	選択	電磁気学特論	0003	学修単位	2	2								玉利 陽三	
専門	選択	応用電子物性	0004	学修単位	2			2						濱川 恭央	
専門	選択	電力システム解析	0005	学修単位	2	2								中村 格	
専門	選択	電子回路解析	0006	学修単位	2			2						寺師 裕人	
専門	選択	ニューラルネットワーク	0007	学修単位	2	2								濱川 恭央	
専門	選択	画像処理基礎	0008	学修単位	2			2						前園 正宜	
専門	選択	電気電子工学特別演習	0009	学修単位	1	2								今村 成明	
専門	選択	情報工学特別演習	0010	学修単位	1			2						幸田 晃 新徳 原崇	
専門	選択	特別実習A(4週間)	0011	履修単位	4	集中講義								逆瀬川 栄一	
専門	選択	特別実習B(2週間)	0012	履修単位	2	集中講義								逆瀬川 栄一	
専門	選択	電気情報システム工学特別講義Ⅰ	0013	学修単位	1			1						逆瀬川 栄一	
専門	必修	環境プロセス工学	0014	学修単位	2			2						大竹 孝明	
専門	必修	環境科学	0015	学修単位	2	2								山田 真義	
専門	必修	環境創造工学プロジェクト	0016	学修単位	2	2		2						入江 智和 徳永 仁夫 櫻根 健史 吉満 真一 川添 敦也	
専門	選択	微分方程式	0017	学修単位	2	2								熊谷 博	
専門	選択	ベクトル解析	0018	学修単位	2			2						松浦 將國	
専門	選択	線形代数学	0019	学修単位	2	2								嶋根 紀仁	
専門	選択	地球物理学概論	0020	学修単位	2			2						池田 昭大	
専門	選択	デジタル信号概論	0021	学修単位	2			2						河野 良弘	
専門	選択	応用電子計測	0022	学修単位	2			2						寺師 裕人	
専門	選択	技術と社会のかかわり	0023	学修単位	2	2								須田 隆夫 坂 直之 坂元 真理子 戸 健一 玉利 陽三	

専門	選択	環境創造工学特別講義	0024	学修単位	1	1	逆瀬川 栄一, 吉満 眞一, 山田 真義	
一般	必修	技術倫理	0045	学修単位	2	2	町 泰樹	
一般	選択	論理的英語コミュニケーション	0046	学修単位	2	2	坂元 真理子	
専門	必修	特別研究Ⅱ	0029	履修単位	10	15 15	須田 隆夫, 逆瀬川 栄一, 榎 健史, 中村 格, 前田 正宜, 井手 輝二, 玉利 三陽, 三平 隆之, 武田 和, 大原 崇	
専門	選択	集積回路製造技術	0030	学修単位	2	2	須田 隆夫	
専門	選択	音響システム工学	0031	学修単位	2	2	幸田 晃	
専門	選択	回路工学特論	0032	学修単位	2	2	芝 浩二郎	
専門	選択	ネットワークアーキテクチャ	0033	学修単位	2	2	入江 智和	
専門	選択	電気情報システム工学特別講義Ⅱ	0034	学修単位	1	1	逆瀬川 栄一	
専門	必修	環境電磁気学	0035	学修単位	2	2	鎌田 清孝	
専門	必修	環境人間工学	0036	学修単位	2	2	山田 真義	
専門	選択	応用代数学	0037	学修単位	2	2	白坂 繁	
専門	選択	解析力学	0038	学修単位	2	2	篠原 学	
専門	選択	量子力学	0039	学修単位	2	2	野澤 宏大	
専門	選択	知的生産システム	0040	学修単位	2	2	塚本 公秀	
専門	選択	安全衛生工学	0042	学修単位	2	2	寄村 和広	
専門	選択	超伝導工学	0043	学修単位	2	2	奥 高洋	
専門	選択	ヒューマンインターフェース	0044	学修単位	2	2	新徳 健	
専門	選択	溶接・接合工学	0047	学修単位	2	2	東 雄一	

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	総合英語	
科目基礎情報							
科目番号	0025			科目区分	一般 / 必修		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	新TOEIC TEST英文法出るとこだけ！・新TOEIC TESTリスニング出るとこだけ！						
担当教員	塚崎 香織						
到達目標							
1. 毎分120語程度の速度で物語文や説明文などを読み、その内容を要約できる。 2. 相手が明瞭に毎分120語程度の速度で、自分や身近なこと及び自分の専門に関する簡単な情報や考えを話す場合、その内容を聞いて要約できる。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1		読んだ内容について、その情報や考えを、過不足なく全て要約できる。		読んだ内容について、その情報や考えを、概ね要約できる。		読んだ内容について、その情報や考えを、要約できない。	
評価項目2		聞いた内容について、その情報や考えを、過不足なく全て要約できる。		聞いた内容について、その情報や考えを、概ね要約できる。		聞いた内容について、その情報や考えを、要約できない。	
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	実用英語能力の向上を目指し、一例としてTOEIC400点を突破できる英語学力を総合的に養う。TOEIC関連のリスニング、および語彙力、構文、読解等の学習強化をはかる。TOEIC400点以上相当の英語力を養うための総合学習コース。本科で習得した英語（語彙・文法・読解・リスニング等）の復習および発展・強化を主軸とする。						
授業の進め方・方法	毎回、語彙や文法の小テストを行う。常に積極的な態度で自学し、課題に取り組むこと。その他、各自の必要性に応じて、語彙力・文法力・読解力・リスニング力強化のため、日々英語学習に励むこと。						
注意点	〔外部試験(30%)＋定期試験成績(60%)＋小テスト(10%)〕－平常点(上限10%)。 なお、外部試験はTOEIC試験400点、TOEIC IP試験400点、実用英検準2級以上あるいは工業英検3級以上の取得者のみ評価の対象とする。（注：TOEIC試験またはTOEIC IP試験400点未満は0点とする。又、実用英検準2級以上あるいは工業英検3級以上を取得していなければ、0点とする。）ただし、TOEIC試験またはTOEIC IP試験の有効期限については、本科目受講期間、受講前年度および前々年度である。実用英検または工業英検については有効期限はないものとする。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	語彙（単語・熟語・慣用表現）		国際的なコミュニケーションの場面で用いられる単語・熟語・慣用表現を身につける。		
		2週	語彙（単語・熟語・慣用表現）		国際的なコミュニケーションの場面で用いられる単語・熟語・慣用表現を身につける。		
		3週	語法（品詞）		品詞を理解し、正しい品詞を選択することができる。		
		4週	語法（冠詞）		冠詞を理解し、正しい冠詞を選択することができる。		
		5週	語法（代名詞）		代名詞を理解し、代名詞を選択することができる。		
		6週	語法（動詞の形）		主語と動詞の対応（数の一致など）を理解し、動詞を正しい形にできる。また、現在分詞と過去分詞の用法を理解し、使い分けることができる。		
		7週	語法（動詞の形）		主語と動詞の対応（数の一致など）を理解し、動詞を正しい形にできる。また、現在分詞と過去分詞の用法を理解し、使い分けることができる。		
		8週	語法（時制）		時制を理解し、正しい時制を選択することができる。		
	2ndQ	9週	語法（仮定法）		仮定法の用法や慣用表現を理解し、文を作ることができる。		
		10週	語法（接続詞）		各接続詞の特徴を理解し、正しい接続詞を選択することができる。		
		11週	語法（関係詞）		関係代名詞、関係副詞の種類や用法を理解し、正しい関係詞を選択することができる。		
		12週	語法（比較級）		比較の用法や慣用表現を理解し、文を作ることができる。		
		13週	読むこと・聞くこと		毎分120語程度の速度で物語文や説明文などを読み、その内容を要約できる。		
		14週	読むこと・聞くこと		毎分120語程度の速度で物語文や説明文などを読み、その内容を要約できる。		
		15週	定期試験		達成度を確認する。		
		16週					
評価割合							
	定期試験	外部試験	小テスト	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	60	30	10	0	0	0	100
基礎的能力	60	30	10	0	0	0	100
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	科学技術英語	
科目基礎情報							
科目番号	0026		科目区分	一般 / 選択			
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2			
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専1			
開設期	後期		週時間数	2			
教科書/教材	「Which side are you on?」 佐野泰孝, 成美堂 英和・和英辞書は既に購入しているものでよい						
担当教員	坂元 真理子						
到達目標							
英語の文章の特徴や論理的な文章・考え方について理解することができる。英語を使った学習活動を通して社会や自分のことに目を向け、物事を論理的に考え英語で発表することができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
談話分析について	談話について理解したことを、発表や議論の中で実践することができる。		談話について理解したことを、与えられた課題や題材の中で実践することができる。		談話の概念について理解することができていない。		
英語の論理構成について	英語のパラグラフの論理構成について理解し、講義で扱う教材の内容と論点を把握したうえでそれについての自分の意見を英語でまとめ、発表したり議論したりすることができる。		英語のパラグラフの論理構成について理解し、講義で扱う教材の内容と論点を把握したうえでそれについての自分の意見を英語でまとめることができる。		英語のパラグラフの論理構成について理解し、講義で扱う教材の内容と論点を把握することができていない。		
プレゼンテーションの技法について	プレゼンテーションの技法について理解し、発表や議論の中で英語で実践することができる。		プレゼンテーションの技法について理解し、与えられた課題や題材を応用して英語で実践することができる。		プレゼンテーションの技法について理解し、与えられた課題や題材に従って英語で実践することができていない。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	英語で論理的にコミュニケーションを行うための基礎的な内容を学ぶレベル。本科目を履修し、2年次前期の「論理的英語コミュニケーション」につなげる。						
授業の進め方・方法	授業では講義のほか、個人、ペア、グループでの活動を行う。また決められたテーマに対し個人およびグループでプレゼンテーションや簡単なプロジェクトを行う。						
注意点	入学時に、英文法全般について理解し、その知識を用いて英文を読んだり書いたりできる程度の語学力を有していること。与えられた題材に対し、自分の考えをまとめて書いたり発表したりする活動を行う。そのため十分なやる気と、人前で自分の意見を英語で発表することを厭わない姿勢が必要とされる。授業は殆どを英語で行う。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	談話の概念		談話の概念について理解することができる。		
		2週	結束性と一貫性		結束性と一貫性について理解することができる。		
		3週	論理構成		論理構成について理解することができる。		
		4週	論理構成		論理構成について、与えられた題材を基に個人またはグループで実践活動を行ない、成果を発表することができる。		
		5週	英語の論理構成を形成する要素		英語の論理構成を形成する要素について理解することができる。		
		6週	英語の論理構成を形成する要素		英語の論理構成を形成する要素について、与えられた題材を基に個人またはグループで実践活動を行ない、成果を発表することができる。		
		7週	英語の論理パターンに基づいた自己表現		英語の論理パターンに基づいた自己表現について理解することができる。		
		8週	英語の論理パターンに基づいた自己表現		英語の論理パターンに基づいた自己表現について、与えられた題材を基に個人またはグループで実践活動を行ない、成果を発表することができる。		
	4thQ	9週	論理的思考		論理的思考について理解することができる。		
		10週	論理的思考		論理的思考について、与えられた題材を基に個人またはグループで実践活動を行ない、成果を発表することができる。		
		11週	論理展開と自己表現		論理展開と自己表現について理解することができる。		
		12週	論理展開と自己表現		論理展開と自己表現について、与えられた題材を基に個人またはグループで実践活動を行ない、成果を発表することができる。		
		13週	プレゼンテーションの技法		について、与えられた題材を基に個人またはグループで実践活動を行ない、成果を発表することができる。		
		14週	プレゼンテーションの技法		これまでに学んだ内容をプレゼンテーションの技法を活かして実践し、英語コミュニケーション能力の一部として身につけることができる。		
		15週	期末試験		上記授業項目について達成度を評価する。		
		16週	試験答案の返却・解説		試験において間違えた部分を自分の課題として把握する。 (非評価項目)		
評価割合							
	試験		レポート等		態度	合計	

総合評価割合	70	30	0	100
目標達成度	70	30	0	100
	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	現代企業法論	
科目基礎情報							
科目番号	0027		科目区分		一般 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数		学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年		専1		
開設期	後期		週時間数		2		
教科書/教材	特に指定しないが、会社法の基本書（授業中に紹介する）を各自購入することが望ましい。/六法、会社判例百選						
担当教員	松田 忠大						
到達目標							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
評価項目1	会社の営利性、社団性、法人性を踏まえて、それぞれの性質から生じる諸法律問題について自分で答えを出すことができる。		会社の営利性、社団性、法人性の意義が理解できるとともに、会社の権利能力の範囲、法人性の限界について説明することができる。		会社の営利性、社団性、法人性といった基本的な性質を理解できていない。		
評価項目2	株式会社の設立手続の概要を説明でき、かつ、設立手続から生じる法的問題について、自分で考え答えを導くことができる。		株式会社の設立手続をおおむね説明でき、かつ、これに関連する法的問題を説明することができる。		株式会社の設立手続の概要を十分に説明することができない。		
評価項目3	株式の意義、法的性質を理解したうえで、有限責任原則との関係で株式が果たす役割、株式を巡る法的問題を1以上採り上げて、これを自ら考え、その答えを導くことができる。		株式の意義・法的性質を理解し、株主有限責任原則、株式の果たす役割を説明することができる。		株式会社における株式の意義を理解できていない。		
評価項目4	株式会社の基本的な機関である株主総会、取締役（会）、監査役について、それぞれの法的位置づけを理解したうえで、機関に関する法的課題を1つ以上採り上げてこれを自ら考え、その答えを導くことができる。		株式会社の基本的な機関である株主総会、取締役（会）、監査役の意義およびその果たす機能を説明することができる。				
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	資本主義社会の高度化に伴い、私たちの生活を企業活動と切り離して考えることは困難になった。わたしたちは自らの生活に必要な物資を企業から調達し、その生活物資を購入するのに必要な財貨を企業から得る。前者においては消費者と企業、後者の関係においては、労働者と企業として関わることになる。また、企業間においても、取引先、下請け、親子会社などのように相互に連結した関係が形成されている。さらに、将来、自ら会社を起こし、企業経営を行う人もいられるかもしれない。このように考えると、現代社会における企業は重大な存在意義を有していることがわかる。この講義では、この企業社会において、企業生活関係に特有な法規の総体である商法、とりわけ会社法を学習することにより、企業社会で生きるための知識を身に付けることを主な目標とする。						
授業の進め方・方法	この授業は講義を中心として行うが、必要に応じて、演習問題やレポートを課す。レポート課題については、期限内に必ず提出すること。						
注意点	教科書は特に指定しないが、価格の安いものでよいので会社法のテキスト（出版社のシリーズもの、例えば、有斐閣双書など）を一冊は購入することが望ましい。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	Ⅰ 近代市民法と商法（総則・商行為）概説 1. 近代市民法原理		□ 近代市民法の枠組みを理解することができる。		
		2週	2. 商行為と商人		□ 商行為の意義と商人概念を理解することができる。		
		3週	Ⅱ 会社法総説 1. 会社の概念と種類		□ 会社の営利性、社団性、法人性、会社の形態を理解することができる。 □ 法人たる会社の権利能力の範囲について理解することができる。		
		4週	2. 会社の性質と能力		□ 法人たる会社の権利能力の範囲について理解することができる。		
		5週	2. 会社の性質と能力 Ⅲ 株式会社の設立 1. 株式会社の設立手続		□ 法人たる会社の権利能力の範囲について理解することができる。 □ 定款の作成、出資の履行等、株式会社の設立手続の概要を理解することができる。		
		6週	1. 株式会社の設立手続 2. 設立手続における法律問題		□ 定款の作成、出資の履行等、株式会社の設立手続の概要を理解することができる。 □ 株式会社設立に際しての法律問題を通して、発起人の権限、責任を理解することができる。		
		7週	2. 設立手続における法律問題 Ⅳ 株式会社における株式と株主の概念 1. 株主の意義と有限責任		□ 株式会社設立に際しての法律問題を通して、発起人の権限、責任を理解することができる。		
		8週	2. 株式と株主名簿		□ 株式の意義、株式の機能と種類、株式併合と分割、法律問題を通して、株式の自由譲渡性、自己株取得、株主名簿の意義について基本的事項を理解することができる。		
	4thQ	9週	3. 募集株式の発行と新株予約権		□ 株式会社の資金調達方法（募集株式の発行、社債の発行など）と新株予約権についての基礎的事項を理解することができる。		

		10週	V 株式会社の機関 1. 株主総会	☐ 会社法における株式会社の機関設計を概観した後、株主総会の招集・決議に関する法律問題を通して、株主総会の意義を理解することができる。
		11週	2. 取締役及び取締役会	☐ 法律問題を通して、取締役の職務、義務、会社に対する責任を理解することができる。
		12週	2. 取締役及び取締役会 3. 会計参与、監査役、監査役会、会計監査人	☐ 法律問題を通して、取締役の職務、義務、会社に対する責任を理解することができる。 ☐ 株式会社の会計参与の意義、監査制度の基礎を理解することができる。
		13週	4. 委員会設置会社 5. 役員等の損害賠償責任	☐ 委員会制度の概要を理解することができる。 ☐ 役員等の負う法的責任を理解することができる。
		14週	VI 会社の計算 1. 企業会計原則と計算に関する法的規制 VII 株式会社の解散と清算 1. 解散と清算	☐ 株式会社の計算書類に関する基本的事項を理解することができる。 ☐ 会社の解散原因と清算のしくみについて理解することができる。
		15週	試験答案の返却・解説	試験において間違えた部分を自分の課題として把握する
		16週		

評価割合

	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	70	0	0	0	0	30	100
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	国際関係論		
科目基礎情報								
科目番号	0028			科目区分	一般 / 選択			
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2			
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1			
開設期	前期			週時間数	2			
教科書/教材	授業中に適宜指示します							
担当教員	藤内 哲也							
到達目標								
1. 国際関係の成立と発展の歴史的過程について説明できる。 2. 現代の国際関係における諸問題について説明できる。 3. 現代の国際関係における日本の位置づけについて説明できる。								
ルーブリック								
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
評価項目1	国際関係の成立と発展の過程に関する高度な事項について理解し、説明することができる。			国際関係の成立と発展の過程に関する基本的な事項について理解し、説明することができる。		国際関係の成立と発展の過程に関する基本的な事項について理解していない。		
評価項目2	現代の国際関係における諸問題に関する高度な事項について理解し、説明することができる。			現代の国際関係における諸問題に関する基本的な事項について理解し、説明することができる。		現代の国際関係における諸問題に関する基本的な事項について理解していない。		
評価項目3	現代の国際関係における日本の位置づけに関する高度な事項について理解し、説明することができる。			現代の国際関係における日本の位置づけに関する基本的な事項について理解し、説明することができる。		現代の国際関係における日本の位置づけに関する基本的な事項について理解していない。		
学科の到達目標項目との関係								
教育方法等								
概要	国際関係をめぐる基礎的な知識を身につけ、現実世界の諸問題について多角的に考察できるようにする。							
授業の進め方・方法	①国際関係の成立と発展の過程、②現代の国際関係における諸問題に関する基本的な事項を理解していることを重視する。授業では多くの発問によって関心を引き出すとともに、重要なキーワードの定着・理解を図る。また、国際関係に関する諸課題について、自分に関わる身近な問題として考えることを促す。							
注意点	現実世界で起こっていることについて興味を持ち、自ら考えて行動する習慣を身につけること。							
授業計画								
前期	1stQ	週	授業内容			週ごとの到達目標		
		1週	(1) 国際関係へのまなざし			☐ 国際関係を学ぶ意義や視座について説明できる。		
		2週	(2) 歴史のなかの国際関係			☐ 歴史世界のさまざまな国際関係のあり方について説明できる。		
		3週	(3) 宗教・民族・国家			☐ 国家の基盤や国際紛争の要因となる宗教や民族について説明できる。		
		4週	(4) 国際社会の成立			☐ ルネサンスからウェストファリア条約に至る国際社会の成立過程について説明できる。		
		5週	(5) 国民国家とナショナリズム			☐ 国民国家とナショナリズムについて説明できる。		
		6週	(6) 帝国主義と世界大戦			☐ 帝国主義時代の国際関係と二度の世界大戦について説明できる。		
		7週	(7) 冷戦体制			☐ 冷戦体制下の国際関係について説明できる。		
	2ndQ	8週	(8) 21世紀の国際関係			☐ 9. 11後の国際関係について説明できる。		
		9週	(9) 先進国と途上国			☐ 先進国と途上国の関係について説明できる。		
		10週	(10) 国家と地域			☐ 国家を超えた広域的な枠組みについて説明できる。		
		11週	(11) 自立する地域			☐ 国家を構成する地域と、その自立化傾向について説明できる。		
		12週	(12) 地域紛争			☐ 現在の国際紛争について説明できる。		
		13週	(13) グローバル化の進展			☐ モノ・ヒト・カネの世界的な移動について議論できるようにする。		
		14週	(14) まとめと展望			☐ 国際関係や国際紛争について、さまざまな立場や考え方に立って説明できる。		
		15週	試験答案の返却・解説			試験において間違えた部分を自分の課題として把握する。 (非評価項目)		
16週								
評価割合								
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計	
総合評価割合	100	0	0	0	0	0	100	
基礎的能力	100	0	0	(-20)	0	0	100	
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0	
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0	

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	特別研究 I
科目基礎情報						
科目番号	0001		科目区分	専門 / 必修		
授業形態	実験・実習		単位の種別と単位数	履修単位: 4		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専1		
開設期	通年		週時間数	前期:6 後期:6		
教科書/教材						
担当教員	逆瀬川 栄一					
到達目標						
1. 技術者としての社会への貢献と責任について説明できる。 2. 自主的に計画・立案し継続的に学習することができる。 3. 文献等(外国語文献を含む)を調査・読解することができる。 4. 論文内容を要約して報告・発表することができる。 5. 研究成果を論文としてまとめ記述することができる。 6. 研究に必要な情報機器を利用できる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	研究内容に関する社会の動向やニーズを把握し、自らの研究内容を社会へ発信する必要があることを理解の上、研究活動に活かしており、研究記録や引用した参考文献が正しく管理されている。		研究内容に関する社会の動向やニーズを把握し、自らの研究内容を社会へ発信する必要があることを理解の上、研究活動に活かすことができる。		研究内容に関する社会の動向やニーズを把握し、自らの研究内容を社会へ発信する必要があることを理解していない。	
評価項目2	問題解決に必要なことを自ら調べ、さらに、指導教員などと議論しながら、自らの意見も踏まえ研究計画を検討し、継続的に研究を遂行できる。		研究計画について、指導教員などと議論しながら、自らの意見も踏まえ検討し、研究を遂行できる。		研究計画について、指導教員からの指示がなければ立てられず、自主的に研究を遂行できない。	
評価項目3	対象とする研究課題に関する文献等について外国語文献を含め広く探索・抽出し、その内容を十分に理解した上で、自らの研究に活かすことができる。		対象とする研究課題に関する文献等を探索・抽出し、その内容を理解した上で、自らの研究に活かすことができる。		対象とする研究課題に関する文献等を十分に探索・抽出できず、自らの研究に活かすことができない。	
評価項目4	研究内容が論理的な整合性を保ちつつ要約され、口頭発表等において、他者の認知度に合わせて分かり易く伝えることで十分な理解を得られ、質問にも的確に答えることができる。		研究内容を要約し、口頭発表等において、他者に分かり易く伝えることで理解を得られ、質問にも答えることができる。		研究内容を十分に要約できず、口頭発表等において、他者への十分な理解を得られず、質問にも的確に答えることができない。	
評価項目5	研究内容を論文として体裁を守り、適切な参考文献を引用しつつまとめられ、その内容に論理的整合性があり、的確な表現で記述することができる。		研究内容を論文として体裁を守りつつ論理的にまとめ、正しい表現で記述することができる。		研究内容を論文として論理的にまとめて記述することができない。	
評価項目6	必要な情報機器について、その利用方法を熟知しつつ適切に使用し、研究活動に十分に活かすことができる。		必要な情報機器を適切に使用し、研究活動に活かすことができる。		必要な情報機器を十分に利用できず、研究活動に活かすことができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	電気電子工学・情報工学に関する研究題目について実験・研究を行い、その成果を学協会で発表するとともに、特別研究発表会で発表し、特別研究論文にまとめる。一連の研究過程を実際に経験し、諸問題を解決する能力や電気電子工学及び情報工学に関する技術者となるための能力を養う。これらを通じて以下の項目を習得する。					
授業の進め方・方法	特別研究に関連する内容について学習する。学習題目により重点的に必要となる科目は異なるが、本科および専攻科の全授業科目が関連する。					
注意点	各研究題目の割り振りは年度開始時に決定する。担当教員の指示を待つのではなく、各自積極的に取り組み、特別研究を計画的に進める事。正課の時間外に行う事もあるので、実施報告書の作成が必要である。専攻科1年の年度末には中間発表を行う。学協会での発表等のスケジュールは各自確認しておく事。 評価基準の詳細は別途定める。ただし、中間発表の前刷原稿の提出がなかった場合は成績評価を60点未満とする。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週				
		2週				
		3週				
		4週				
		5週				
		6週				
		7週				
		8週				
	2ndQ	9週				
		10週				
		11週				
		12週				
		13週				
		14週				

		15週		
		16週		
後期	3rdQ	1週		
		2週		
		3週		
		4週		
		5週		
		6週		
		7週		
		8週		
	4thQ	9週		
		10週		
		11週		
		12週		
		13週		
		14週		
		15週		
		16週		
評価割合				
	指導教員評価	発表	合計	
総合評価割合	50	50	100	
専門的能力	50	50	100	

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	特別セミナー
科目基礎情報						
科目番号	0002		科目区分	専門 / 必修		
授業形態	演習		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専1		
開設期	通年		週時間数	前期:2 後期:2		
教科書/教材	適宜配布					
担当教員	逆瀬川 栄一					
到達目標						
主として、電気電子工学および情報工学の分野における文献・書籍（英語で執筆された文献も含む）を読み、それらの内容に関する考察結果の発表と討論をゼミナール形式で行い、専門分野の新しい学識を得るとともに工学研究の手法について実践的に学習する。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
電気工学および情報工学の分野における文献・書籍を検索、調査することができる。	和文および英文で書かれた電気工学および情報工学の分野における文献・書籍を自発的に検索、調査し、専門分野の見識を広げることができる。		与えられた課題について、電気工学および情報工学の分野における文献・書籍を検索、調査することができる。		電気工学および情報工学の分野における文献・書籍を検索、調査することができない。	
選択した文献または書籍について、要点を整理し考察を行うことができる。	選択した文献または書籍について、要点を整理し、考察するとともに、課題の抽出や関連論文等の調査を通じて、理解を深めることができる。		選択した文献または書籍について、要点を整理し、自身で考察を行うことができる。		選択した文献または書籍について、要点を整理し、自身で考察を行うことができない。	
整理、考察した内容について、発表および検討を行うことができる。	調査、整理、考察した文献の内容について、ゼミナール形式で説明および検討を行うとともに、活発なディスカッションを行うことができる。		調査、整理、考察した文献の内容について、発表資料を作成し、ゼミナール形式で説明および検討を行うことができる。		調査、整理、考察した文献の内容について、発表資料を作成し、ゼミナール形式で説明および検討を行うことができない。	
調査、考察、検討した内容を整理して、レポートとしてまとめることができる。	調査、考察、検討した内容を整理し、レポートとしてまとめ、対象課題の問題点や今後の発展などについて、自身の考察を述べることができる。		調査、考察、検討した内容を整理して、レポートとしてまとめることができる。		調査、考察、検討した内容を整理して、レポートとしてまとめることができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	主として、電気電子工学および情報工学の分野における文献・書籍（英語で執筆された文献も含む）を読み、それらの内容に関する考察結果の発表と討論をゼミナール形式で行い、専門分野の新しい学識を得るとともに工学研究の手法について実践的に学習する。					
授業の進め方・方法	特別研究に関連する内容について学習する。学習題目により重点的に必要となる科目は異なるが、本科および専攻科の全授業科目が関連する。					
注意点	特別研究の題目が1年次の年度開始時に通知され、その担当教員の下で特別セミナーを受講する。与えられた課題のみを行うのではなく、自発的に課題を設定し、調べる事。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週				
		2週				
		3週				
		4週				
		5週				
		6週				
		7週				
		8週				
	2ndQ	9週				
		10週				
		11週				
		12週				
		13週				
		14週				
		15週				
		16週				
後期	3rdQ	1週				
		2週				
		3週				
		4週				
		5週				
		6週				
		7週				
		8週				
	4thQ	9週				
		10週				

		11週		
		12週		
		13週		
		14週		
		15週		
		16週		

評価割合

	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	50	50	0	0	0	0	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	50	50	0	0	0	0	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	電磁気学特論	
科目基礎情報							
科目番号	0003			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	なし						
担当教員	玉利 陽三						
到達目標							
本科での電磁気学やベクトルの発散や回転などのベクトル解析を復習する。さらに、ベクトルを用いて電磁気学の問題を解き、電磁気学を再理解する。最後に、身近な電磁気学の応用や生体与える影響等について紹介する。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
電磁気学の諸法則についてベクトルを使って説明できる。		電磁気学で重要な諸法則をベクトルを使って説明でき、それを応用できる。		電磁気学で重要な諸法則をベクトルを使って説明できる。		電磁気学で重要な諸法則をベクトルを使って説明できない。	
身の回りの電磁気学の応用について説明できる。		身の回りにある電磁気学の応用されているものについて説明でき、さらに新たなものを提案できる。		身の回りにある電磁気学が応用されているものについて説明できる。		身の回りにある電磁気学が応用されているものについて説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		これまで学習してきた電気磁気学を再理解していく。					
授業の進め方・方法		講義形式で進めていくが、最後に自らの研究と電気磁気学の関わりについて発表する。					
注意点		講義内容をよく理解するために、毎回、これまで使ってきた教科書等を参考に2時間程度の予習をし、授業時間での質問等に対応できるようにしておくこと。また、講義終了後は、復習として2時間程度の演習問題等の課題に取り組むこと。疑問点があれば、その都度質問すること。					
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	ベクトル解析		勾配、発散、回転の物理的意味が説明でき、計算できる。		
		2週	ベクトル解析		ストークスの定理が説明できる。		
		3週	電磁界の基本的な法則		電磁気学の歴史を認知し、説明できる。		
		4週	電磁界の基本的な法則		電磁気学の歴史を認知し、説明できる。		
		5週	電磁界の基本的な法則		電磁気学の歴史を認知し、説明できる。		
		6週	電磁界の基本的な法則		ガウスの法則を説明できる。		
		7週	電磁界の基本的な法則		アンペールの法則を説明できる。		
		8週	電磁界の基本的な法則		電磁誘導の法則を理解して説明できる。		
	2ndQ	9週	電磁界の基本的な法則		マクスウェルの方程式の微分形の導出ができる。		
		10週	生体に及ぼす電磁界の効果		電界が生体与える影響を認知し、説明できる。		
		11週	生体に及ぼす電磁界の効果		磁界が生体与える影響を認知し、説明できる。		
		12週	生体に及ぼす電磁界の効果		電磁波が生体与える影響を認知し、説明できる。		
		13週	電磁界の応用		身近に電磁界が応用されているものを調べ、動作原理を説明できる。		
		14週	電磁界の応用		自分の研究と電磁界との関係をまとめて報告できる。		
		15週	定期試験		これまで学習した内容の理解を深める。		
		16週	試験答案の返却・解説		試験において間違えた部分を自分の課題として把握できる。		
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	70	0	0	0	0	30	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	応用電子物性	
科目基礎情報							
科目番号	0004			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	電子デバイス物性 宇佐美 晶著 日本理工出版会						
担当教員	濱川 恭央						
到達目標							
1. 光電効果, コンプトン効果, ド・ブローイ波について必要な式と計算, その結果を人に説明できる. 2. シュレーディンガーの波動方程式, 波動関数, 量子数について必要な式と計算, その結果を人に説明できる. 3. 固体内の結晶構造, 電気伝導, エネルギーバンド理論をもちいて必要な式と計算, その結果を人に説明できる. 4. 半導体の構造、特徴、バンド構造, キャリア濃度について必要な式と計算, その結果を人に説明できる.							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	光電効果, コンプトン効果, ド・ブローイ波について必要な式と計算, その結果から粒子性と波動性について人に説明できる.			光電効果, コンプトン効果, ド・ブローイ波について必要な式と計算し, 概要を説明できる.		光電効果, コンプトン効果, ド・ブローイ波の実験について解っていない.	
評価項目2	シュレーディンガーの波動方程式, 波動関数, 量子数について必要な式と計算, その結果を人に説明できる.			シュレーディンガーの波動方程式, 波動関数, 量子数について必要な式と計算し, 概要を説明できる.		シュレーディンガーの波動方程式, 波動関数, 量子数について必要な式を立てることができない.	
評価項目3	固体内の結晶構造, 電気伝導, エネルギーバンド理論をもちいて必要な式と計算, その結果を人に説明できる.			固体内の結晶構造, 電気伝導, エネルギーバンド理論をもちいて必要な式と計算し, 概要を説明できる.		固体内の結晶構造, 電気伝導, エネルギーバンド理論をもちいて必要な式を立てることができない.	
評価項目4	半導体の構造、特徴、バンド構造, キャリア濃度について必要な式と計算, その結果を人に説明できる.			半導体の構造、特徴、バンド構造, キャリア濃度について必要な式と計算し, 概要を説明できる.		半導体の構造、特徴、バンド構造, キャリア濃度について必要な式をたてられず, 概要がわかっていない.	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	固体物理の基本的な理解を通して, エレクトロニクス・情報関連デバイスの動作原理を把握する. エネルギーバンド構造の基本を理解し, 基本的半導体デバイスの特性を理解し, システムの用途に合わせてデバイス選択できる力を習得し, 素子特性に関する基礎知識を修得する. それによりデバイス応用において, 課題となる部分が抽出できる問題解決能力を養う.						
授業の進め方・方法	初等的な量子力学と電磁気学の知見を駆使し, 結晶中の電子の挙動についてやや複雑な数式の展開を行うので, 自分で式を追いつながら数式及び現象の物理的解釈を深めることが必要である. 講義は各自説明範囲を担当, 講義までにレポート(報告書)とパワーポイントでの資料を作成してくること. 講義は順番に担当箇所の説明を行う輪講形式とし, 担当箇所の説明及び質問に対応する.						
注意点	本科で修得した半導体物性・電子物性の理解を更に深め, 電子物性についての基礎的な知識とそれらの統一的な理解により, 電子計算機をはじめとする情報演算処理機器・技術の急速な発展に対応できる能力を獲得する. そのため, 疑問があればその都度説明者に質問し解決すること.						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	電子物性の基礎		概要説明及びミクロの世界、物質粒子について説明できる		
		2週	電子物性の基礎		光電効果について理解し, 物質の粒子性を説明できる		
		3週	電子物性の基礎		コンプトン効果について理解し, 物質の粒子性を説明できる		
		4週	電子物性の基礎		ド・ブローイ波について理解し, 物質の波動性を説明できる		
		5週	電子物性の基礎		物質の粒子性と波動性について説明できる		
		6週	量子力学の基礎		シュレーディンガーの波動方程式, 波動関数について説明できる.		
		7週	量子力学の基礎		量子数について説明できる.		
		8週	量子力学の基礎		シュレーディンガーの波動方程式, 波動関数, 量子数について説明できる.		
	4thQ	9週	量子力学の基礎		フェルミ・ディラック分布関数について説明できる.		
		10週	固体内電子		固体内電子の結晶構造, について説明できる.		
		11週	固体内電子		固体内電子の電気伝導について説明できる.		
		12週	固体内電子		固体内電子のエネルギーバンド, エネルギーギャップについて説明できる		
		13週	半導体物性		半導体の基本的な構造、半導体の特徴、バンド構造について説明できる.		
		14週	半導体物性		半導体の基本的な構造、半導体のキャリア濃度について説明できる.		
		15週	試験答案の返却・解説		試験において間違えた部分を自分の課題として把握する		
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計

総合評価割合	70	30	0	0	0	0	100
基礎的能力	70	30	0	0	0	0	100
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校	開講年度	平成30年度 (2018年度)	授業科目	電力システム解析
科目基礎情報				
科目番号	0005	科目区分	専門 / 選択	
授業形態	講義	単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	電気情報システム工学専攻	対象学年	専1	
開設期	前期	週時間数	2	
教科書/教材	Energy Flow and Power Factor in Nonsinusoidal Circuits Shepherd & Zand著 (Cambridge University Press)			
担当教員	中村 格			
到達目標				
電力システムの機器に生じる高調波障害の事例を説明でき、ひずみ波の発生と挙動について説明できる。また、高調波への対策をひずみ波電流による力率低下の補償として捉え、その方法を説明できる。				
ルーブリック				
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安	
1. フェーザ、インピーダンスを説明できる。	フェーザ、インピーダンスを問題なく明確に説明できる。	フェーザ、インピーダンスについて不明確な部分があるが、比較的明確に説明できる。	フェーザ、インピーダンスの説明が不明確である。	
2. 電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を説明できる。	電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を問題なく明確にできる。	電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償について不明確な部分があるが、比較的明確にできる。	電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償の説明が不明確である。	
3. ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を説明できる。	ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を問題なく明確に説明できる。	ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策について不明確な部分があるが、比較的明確に説明できる。	ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策の説明が不明確である。	
4. 高調波障害の実態を説明できる。	高調波障害の実態を問題なく明確に説明できる。	高調波障害の実態について不明確な部分があるが、比較的明確に説明できる。	高調波障害の実態の説明が不明確である。	
学科の到達目標項目との関係				
教育方法等				
概要	電気回路、送配電工学の知識を必要とし、また、ひずみ波を扱うことから、フーリエ級数の知識も必要である。			
授業の進め方・方法	本科目はゼミ形式で行うことから、課題を指示された部分については、教材を和訳して内容に関して調べ、資料の準備を行い、説明できるようにしておく事。			
注意点	毎回、補助教材等を参考に105分以上の予習を行い、授業時間に討論できるようにしておく事。授業終了後は105分以上の復習を行い、内容は勿論の事、英文での表現法等も自分のものとしてゆく事。疑問点があれば、その都度質問する事。			
授業計画				
		週	授業内容	週ごとの到達目標
前期	1stQ	1週	1. 基礎理論	(1) フェーザ、インピーダンスを説明できる。
		2週	2. 正弦波電圧を供給した線形負荷	(1) 電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を説明できる。
		3週	2. 正弦波電圧を供給した線形負荷	(1) 電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を説明できる。
		4週	2. 正弦波電圧を供給した線形負荷	(1) 電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を説明できる。
		5週	2. 正弦波電圧を供給した線形負荷	(1) 電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を説明できる。
		6週	2. 正弦波電圧を供給した線形負荷	(1) 電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を説明できる。
		7週	2. 正弦波電圧を供給した線形負荷	(1) 電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を説明できる。
		8週	3. 正弦波電圧を供給した非線形負荷	(1) ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を説明できる。
	2ndQ	9週	3. 正弦波電圧を供給した非線形負荷	(1) ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を説明できる。
		10週	3. 正弦波電圧を供給した非線形負荷	(1) ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を説明できる。
		11週	3. 正弦波電圧を供給した非線形負荷	(1) ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を説明できる。
		12週	3. 正弦波電圧を供給した非線形負荷	(1) ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を説明できる。
		13週	3. 正弦波電圧を供給した非線形負荷	(1) ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を説明できる。
		14週	4. 高調波障害の実態	(1) 高調波障害の実態を説明できる。
		15週	--- 定期試験 ---	授業内容1~4について達成度を確認する。
		16週		
評価割合				

	発表・討論	レポート	試験	受講態度	合計
総合評価割合	40	20	40	0	100
基礎的能力	0	0	0	0	0
専門的能力	40	20	40	上限-20	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	電子回路解析	
科目基礎情報							
科目番号	0006			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	スイッチングコンバータの基礎 原田耕介 二宮保 顧文建 共著 コロナ社/パワーエレクトロニクス回路 電気学会・半導体電力変換システム調査専門委員会編 オーム社/授業時配布プリント						
担当教員	寺師 裕人						
到達目標							
1. 2つ以上の動作モードを持つスイッチング回路 2. 各動作モードにおける状態方程式とその平均化法 3. 平均化方程式の特性解析 4. アプリケーションソフトによる動作の確認							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	インダクタとキャパシタが各1ケであるスイッチングモード基本回路、各2ケである基本回路を理解できる。			インダクタとキャパシタが各1ケであるスイッチング基本回路の動作を説明できる。		インダクタとキャパシタが各1ケであるスイッチング基本回路の動作を説明できない。	
評価項目2	インダクタ、キャパシタ、スイッチの3種の基本トポロジ回路の状態方程式を各モード別に作成でき、平均化できる。			インダクタ、キャパシタ、スイッチを用いたトポロジ回路の2つのモードの状態方程式を作成できる。その2つのモードの平均化できる。		インダクタ、キャパシタ、スイッチを用いたトポロジ回路の2つのモードの状態方程式を作成できない。	
評価項目3	状態平均化方程式を用いて固有値を求めて安定性の確認や動特性、静特性等の周波数特性図を作成できる。			状態平均化方程式を用いて動特性、静特性等の周波数特性図を作成できる。		状態平均化方程式を用いて動特性、静特性等の周波数特性図を作成できない。	
評価項目4	アプリケーションソフトを用いて動作波形を確認しトポロジ回路の動作原理を理解でき設計仕様に応じた定数を決定できる。			アプリケーションソフトを用いて動作波形を確認しトポロジ回路の動作原理を理解できる。		アプリケーションソフトを用いて動作波形を確認しトポロジ回路の動作原理を理解できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	半導体スイッチング素子とR,L,C素子で構成される電子回路において、素子のスイッチング状態が定まるとその動作モードから状態方程式が導出される。これを基に、回路の種々の動作モードにおける各状態方程式を平均化した方程式を用いた解析手法を学び、非線形電子回路の解析について習熟する。						
授業の進め方・方法	2つの動作モードを持つスイッチングモード非線形電子回路において各々の動作モードを平均化合成することで線形化して解析する方法を学ぶ。アプリケーションソフトでシミュレーションし、必要な波形を描画して動作を確認しながら授業をおこなう。						
注意点	電子回路のモデリングとスイッチング特性を理解し、修得するためには、多くの回路解析を行うことが大事である。このため課せられたレポートは必ず理解して提出すること。また、解らない点があればその都度質問をし、積極的に理解を深めるようにすること。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	1. 半導体スイッチの基礎		□半導体デバイスのスイッチング損失, スwitchング特性が説明できる。		
		2週	2. スwitchング回路と動作状態		□簡単なスイッチング回路 (PWM回路) の動作状態を説明できる。		
		3週	3. 状態方程式		□電子回路の動作状態の方程式を説明できる。		
		4週	3. 状態方程式		□電子回路の動作状態の方程式を説明できる。		
		5週	4. 状態平均化法		□状態平均化方程式による非線形回路の線形的な取り扱いができる。		
		6週	4. 状態平均化法		□状態平均化方程式による非線形回路の線形的な取り扱いができる。		
		7週	5. 状態方程式に基づく回路解析		□状態変数, 状態方程式, 出力方程式によるR,L,C素子の回路解析ができる。		
		8週	5. 状態方程式に基づく回路解析		□状態変数, 状態方程式, 出力方程式によるR,L,C素子の回路解析ができる。		
	4thQ	9週	6. 状態平均化法による電子回路解析		□状態平均化法を用いた静特性解析, 動特性の解析ができる。		
		10週	6. 状態平均化法による電子回路解析		□状態平均化法を用いた静特性解析, 動特性の解析ができる。		
		11週	7. 数値計算による電子回路解析		□アプリケーションソフトによる電子回路の数値計算と動作解析ができる。		
		12週	7. 数値計算による電子回路解析		□アプリケーションソフトによる電子回路の数値計算と動作解析ができる。		
		13週	7. 数値計算による電子回路解析		□アプリケーションソフトによる電子回路の数値計算と動作解析ができる。		
		14週	7. 数値計算による電子回路解析		□アプリケーションソフトによる電子回路の数値計算と動作解析ができる。		
		15週	試験答案の返却・解説		試験において間違った部分を自分の課題として把握する。(非評価項目)		
		16週					

評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	70	0	0	0	0	30	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	ニューラルネットワーク	
科目基礎情報							
科目番号	0007			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	ニューロコンピューティング入門 田中雅博・坂和正敏共著 森北出版						
担当教員	濱川 恭央						
到達目標							
1. ニューロンモデルについて説明できる 2. ネットワーク構造の違いについてその特徴と概要を説明できる 3. 単純パーセプトロンについて概要を説明できる 4. デルタ則について概要を説明できる 5. 誤差逆伝搬法について説明できる 6. ボルツマンマシン、ガウシアンマシンについて説明できる 7. リカレントネットワークや連想記憶について説明できる							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1				ニューロンモデルについて説明できる		ニューロンモデルについて説明できない	
評価項目2	階層型ネットワークと相互結合型ネットワークの特性を理解し、シミュレーションにどちらのモデルが適しているか説明できる			ネットワーク構造の違いについてその特徴と概要を説明できる		ネットワーク構造の違いについてその特徴と概要を説明できない	
評価項目3	単純パーセプトロンについて、ネットワーク構成、ニューロンモデル、その特徴や概要を説明できる			単純パーセプトロンについて概要を説明できる		単純パーセプトロンについて概要を説明できない	
評価項目4	デルタ則について、ネットワーク構成、ニューロンモデル、その特徴や概要を説明できる			デルタ則について概要を説明できる		デルタ則について概要を説明できない	
評価項目5	誤差逆伝搬法について、ネットワーク構成、ニューロンモデル、その特徴や概要を説明できる			誤差逆伝搬法について概要を説明できる		誤差逆伝搬法について概要を説明できない	
評価項目6	ボルツマンマシン、ガウシアンマシンについて、ネットワーク構成、ニューロンモデル、その特徴や概要を説明できる			ボルツマンマシン、ガウシアンマシンについて説明できる		ボルツマンマシン、ガウシアンマシンについて説明できない	
評価項目7	リカレントネットワークや連想記憶についてネットワーク構成、ニューロンモデル、その特徴や概要を説明できる			リカレントネットワークや連想記憶について説明できる		リカレントネットワークや連想記憶について説明できない	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	人間の脳の構造をヒントとした新たな情報処理システムである神経回路網（ニューラルネットワーク）の研究、ニューラルネットワークのメカニズムを用いた情報処理の研究は広く行われている。このニューラルネットワークの基礎的な知識や理論を習得し説明できることを目標とする。						
授業の進め方・方法	本科目はニューラルネットワークのニューロンモデルの基礎概念、それらが結合したネットワークの構造、結合荷重の基本的な学習方法を習得する。本科目は、電気・情報系の学生がはじめてニューラルネットワークを学習する基本的な原理、基礎的な理論を習得する科目のため、理解度に合わせて授業を進める。						
注意点	講義の内容は必ず各自十分に復習を行なっておくこと。授業で修得する内容とそれを確かなものにする演習も予定する。従ってレポート等は確実に提出すること						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	1. ニューロン 人間の脳とニューロン		人の脳とその構成要素であるニューロンの仕組みが理解できる。		
		2週	1. ニューロン ニューロンモデル		ニューロンの情報処理機能にモデル化したニューロンモデルを説明できる。		
		3週	2. ニューラルネットワーク 2.ニューラルネットワークの構造		階層型ネットワークの構造について理解し、説明できる。		
		4週	2. ニューラルネットワーク 2.ニューラルネットワークの構造		相互結合型ネットワークの構造について理解し、説明できる。		
		5週	3. パーセプトロン 単純パーセプトロンと学習メカニズム		単純パーセプトロンについて説明できる。		
		6週	3. パーセプトロン 単純パーセプトロンと学習メカニズム		線形分離について説明でき、パーセプトロンの限界を説明できる。		
		7週	3. パーセプトロン デルタ則と学習メカニズム		標準デルタ則と最急降下法についてそれぞれ理解し、説明できる。		
		8週	4. 誤差逆伝搬法		誤差逆伝搬法の特徴について説明できる。		
	2ndQ	9週	4. 誤差逆伝搬法		誤差逆伝搬法について理解し、説明できる。		
		10週	5. ホップフィールドモデル ホップフィールドモデル		2 値ホップフィールドモデルについて理解し説明できる。		
		11週	5. ホップフィールドモデル ホップフィールドモデル		連続値ホップフィールドモデルについて理解し説明できる。		

		12週	5. ホップフィールドモデル ボルツマンマシン	ホップフィールドモデルを確率的拡張したボルツマン マシンについて理解し説明できる.
		13週	6. リカレントニューラル ネットワーク	リカレントニューラルネットワークについて理解し , 説明できる.
		14週	7. 連想記憶	連想記憶に関し, 理解し説明できる.
		15週	試験答案の返却・解説	試験において間違えた部分を自分の課題として把握す る
		16週		

評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	30	0	100
基礎的能力	70	0	0	0	30	0	100
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	画像処理基礎
科目基礎情報						
科目番号	0008			科目区分	専門 / 選択	
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1	
開設期	後期			週時間数	2	
教科書/教材	画像情報処理 安居院猛・中嶋正之 森北出版					
担当教員	前園 正宜					
到達目標						
1. デジタル画像の基礎的なデータ形式について説明できる. 2. デジタル画像の基礎的なフィルタリング処理の原理について説明できる 3. デジタル画像の基礎的な表示, 拡大縮小の原理について説明できる. 4. デジタル画像の基礎的な符号化の原理を説明できる. 5. デジタル画像の基礎的な解析手法について説明できる.						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	アナログ画像からデジタル画像への変換, デジタル画像のデータ量, 1次元データへの変換について実際の画像を想定した手法の説明ができる.		アナログ画像からデジタル画像への変換, デジタル画像のデータ量, 1次元データへの変換について基礎的な原理を説明できる.		アナログ画像からデジタル画像への変換, デジタル画像のデータ量, 1次元データへの変換について基礎的な原理を説明できない.	
評価項目2	空間フィルタによる平滑化や特徴抽出処理や, 直交変換後のフィルタリング処理について実際の画像を想定した手法の説明ができる.		空間フィルタによる平滑化や特徴抽出の原理や, 直交変換の原理, 直交変換後のフィルタリング処理の原理について説明できる.		空間フィルタによる平滑化や特徴抽出の原理や, 直交変換の原理, 直交変換後のフィルタリング処理の原理について説明できない.	
評価項目3	階調画像の表示, 画像の拡大・縮小、画像の擬似表現について実際の画像を想定した手法の説明ができる.		階調画像の表示, 画像の拡大・縮小、画像の擬似表現について基礎的な原理を説明できる.		階調画像の表示, 画像の拡大・縮小、画像の擬似表現について基礎的な原理を説明できない.	
評価項目4	2値および階調値をもつ画像の可逆・非可逆符号化における基礎的な各手法について実際の画像を想定した符号化の説明ができる.		2値および階調値をもつ画像の可逆・非可逆符号化における基礎的な各手法の原理について説明できる.		2値および階調値をもつ画像の可逆・非可逆符号化における基礎的な各手法の原理について説明できない.	
評価項目5	画像における線の解析や濃度ヒストグラム, テクスチャ等を対象とする解析について実際の画像を想定した手法の説明ができる.		画像における線の解析や濃度ヒストグラム, テクスチャ等を対象とする解析の基礎的な原理について説明できる.		画像における線の解析や濃度ヒストグラム, テクスチャ等を対象とする解析の基礎的な原理について説明できない.	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	静止画像処理の基礎事項について習得する。 電気電子工学科卒および情報工学科卒の学生が対象であるため、画像処理の基礎事項の修得に重点を置く。					
授業の進め方・方法	教科書に沿った講義, および各画像処理アルゴリズムの演習を中心に行う。					
注意点	授業中は画像処理アルゴリズム等の理解に努めること。講義の内容をよく理解するために、毎回、予習や演習問題等の課題を含む復習として、200分以上の自学自習が必要である。					
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	画像情報処理の基礎	画像情報処理について、およびデジタル画像について説明できる。		
		2週	画像情報処理の基礎	データ量、1次元データへの変換について説明できる。		
		3週	画像の空間フィルタリング	平滑化フィルタ、微分フィルタ、特徴抽出フィルタについて説明できる。		
		4週	画像の直交変換とフィルタリング	フーリエ変換、離散的コサイン変換、その他の直交変換、フィルタリング操作について説明できる。		
		5週	画像の表示	階調画像の表示、画像の縮小表示、画像の拡大表示、画像の擬似表現について説明できる。		
		6週	ファクシミリ信号処理	ファクシミリ信号の符号化、ランレングス符号化について説明できる。		
		7週	ファクシミリ信号処理	2次元ランレングス符号化、Elias符号、算術符号について説明できる。		
		8週	画像の可逆符号化法	画像のデータ圧縮符号化における可逆画像符号化、前処理、mod処理について説明できる。		
	4thQ	9週	画像の可逆符号化法	ビットプレーン符号化、濃度データ利用方式について説明できる。		
		10週	画像の非可逆符号化法	非可逆符号化、符号化の評価方法について説明できる。		
		11週	画像の非可逆符号化法	非可逆符号化における予測方式、直交変換方式について説明できる。		
		12週	画像の解析	画像の解析について、線図形の解析・表現、線成分の抽出・追跡、ラスタベクタ変換について説明できる。		
		13週	階調画像の解析処理	濃度ヒストグラム解析、テキストチャ解析について説明できる。		
		14週	階調画像の解析処理	ピラミッド画像解析、ピラミッドデータの応用について説明できる。		
		15週	定期試験	14週目までの授業項目に対して達成度を確認する。		

		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	100	0	0	0	0	0	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	100	0	0	0	0	0	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	電気電子工学特別演習	
科目基礎情報							
科目番号	0009		科目区分		専門 / 選択		
授業形態	演習		単位の種別と単位数		学修単位: 1		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年		専1		
開設期	前期		週時間数		前期:2		
教科書/教材							
担当教員	今村 成明						
到達目標							
電気回路学、電磁気学の基礎的事項を基に、種々の応用問題を解くことにより更に理解を深め、大学で取り扱われる電気回路学、電磁気学の問題を十分に解けるレベルまで応用力を高めていく。以下に具体的な目標を示す。 1. 網目法、枝電流法、重ねの理、テブナンの定理、ノートンの定理などの回路網解析手法を理解し、各種回路の電圧、電流、電力を計算できる。 2. 過渡現象、時定数の意味を理解し、微分方程式の解法とラプラス変換を用いて、各種回路の過渡現象における一般解を算出できる。 3. クーロンの法則、電界と電位、ガウスの法則の概念を理解し、各種条件における静電気力、電界、電位、静電容量、静電エネルギーを計算できる。 4. ビオ・サバルの法則、アンペアの法則の概念を理解し、各種条件における磁界の強さ、磁束密度、磁界中の電流に働く力、ローレンツ力を計算できる。 5. レンツの法則、ファラデーの電磁誘導の法則の概念を理解し、起電力、インダクタンス、磁界のエネルギーを計算できる。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1		各種回路網解析手法を用いて、直流・交流各種回路の電圧、電流、電力を計算できる。		各種回路網解析手法のどれか一つを用いて、直流・交流各種回路の電圧、電流、電力を計算できる。		回路網解析手法が理解できず、直流・交流各種回路の電圧、電流、電力を計算できない。	
評価項目2		過渡現象、時定数の意味を理解し、微分方程式の解法およびラプラス変換を用いて、各種回路の過渡現象における一般解を算出できる。		過渡現象、時定数の意味を理解し、微分方程式の解法、ラプラス変換のどちらかを用いて、各種回路の過渡現象における一般解を算出できる。		過渡現象、時定数の意味が理解できず、微分方程式の解法、ラプラス変換のどちらかの方法を用いても、各種回路の過渡現象における一般解を算出できない。	
評価項目3		クーロンの法則、電界と電位、ガウスの法則の概念を理解し、各種条件における静電気力、電界、電位、静電容量、静電エネルギーを計算できる。		クーロンの法則、電界と電位、ガウスの法則の概念を理解し、ある特定の条件における静電気力、電界、電位、静電容量、静電エネルギーを計算できる。		クーロンの法則、電界と電位、ガウスの法則の概念が理解できず、静電気力、電界、電位、静電容量、静電エネルギーを計算できない。	
評価項目4		ビオ・サバルの法則、アンペアの法則の概念を理解し、各種条件における磁界の強さ、磁束密度、磁界中の電流に働く力、ローレンツ力を計算できる。		ビオ・サバルの法則、アンペアの法則の概念を理解できず、ある特定の条件における磁界の強さ、磁束密度、磁界中の電流に働く力、ローレンツ力を計算できる。		ビオ・サバルの法則、アンペアの法則の概念を理解できず、磁界の強さ、磁束密度、磁界中の電流に働く力、ローレンツ力を計算できない。	
評価項目5		レンツの法則、ファラデーの電磁誘導の法則の概念を理解し、各種条件における起電力、インダクタンス、磁界のエネルギーを計算できる。		レンツの法則、ファラデーの電磁誘導の法則の概念を理解できず、ある特定の条件における起電力、インダクタンス、磁界のエネルギーを計算できる。		レンツの法則、ファラデーの電磁誘導の法則の概念を理解できず、起電力、インダクタンス、磁界のエネルギーを計算できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	電気電子工学科卒および情報工学科卒の学生が対象である。本校専攻科入学時まで履修した電気回路、電磁気学に関する知識を総結集し、復習あるいは新たな学習により、電気回路、電磁気学の基本事項を確実に把握し、応用問題を解くことのできる実力を身につける。						
授業の進め方・方法	講義内容をよく理解するために、毎回、事前に渡された演習問題（宿題）は解いておき、授業時間での質問等に対応できるようにしておくこと。						
注意点	講義終了後は、復習として演習問題等の課題に取り組むこと。疑問点があれば、その都度質問すること。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	直流回路, 対称回路		網目法、枝電流法、重ねの理、テブナンの定理、ノートンの定理を理解し、各種回路の回路電圧、回路電流、電力を計算できる。 ブリッジ回路の平衡条件を理解し、未知の抵抗値などを計算できる。		
		2週	交流回路		正弦波交流、ベクトル記号法、インピーダンスとアドミタンス、交流電力、電力のベクトル表示、直列共振、並列共振、多相交流、多相交流の電力を理解し、各種回路の計算ができる。		
		3週	交流回路		正弦波交流、ベクトル記号法、インピーダンスとアドミタンス、交流電力、電力のベクトル表示、直列共振、並列共振、多相交流、多相交流の電力を理解し、各種回路の計算ができる。		
		4週	過渡現象		過渡現象、時定数の意味を理解し、微分方程式の解法とラプラス変換を用いて、各種回路の過渡現象における一般解を算出できる。		
		5週	過渡現象		過渡現象、時定数の意味を理解し、微分方程式の解法とラプラス変換を用いて、各種回路の過渡現象における一般解を算出できる。		
		6週	真空中の静電界、導体系		クーロンの法則、電界と電位、ガウスの法則、電気双極子、静電容量、静電エネルギーと静電気力の概念を理解し、各種条件における計算ができる。		
		7週	真空中の静電界、導体系		クーロンの法則、電界と電位、ガウスの法則、電気双極子、静電容量、静電エネルギーと静電気力の概念を理解し、各種条件における計算ができる。		

2ndQ	8週	真空中の静電界，導体系	クーロンの法則，電界と電位，ガウスの法則，電気双極子，静電容量，静電エネルギーと静電気力の概念を理解し，各種条件における計算ができる。
	9週	誘電体中の静電界	誘電分極，誘電体中の電界について理解し，各種条件における計算ができる。 誘電体界面での電界Eと電束密度Dの境界条件を理解し，各種条件における計算ができる。 誘電体に蓄えられるエネルギー，誘電体境界面に働く力について各種条件における計算ができる。
	10週	誘電体中の静電界	誘電分極，誘電体中の電界について理解し，各種条件における計算ができる。 誘電体界面での電界Eと電束密度Dの境界条件を理解し，各種条件における計算ができる。 誘電体に蓄えられるエネルギー，誘電体境界面に働く力について各種条件における計算ができる。
	11週	定常電流と磁界，磁性体	ビオ・サバールの法則，アンペアの法則の概念を理解し，各種条件における計算ができる。 磁位，ベクトルポテンシャルの概念を用いて計算ができる。 磁界中の電流に働く力，磁性体中の磁界の強さについて計算ができる。 磁性体界面での磁界の強さHと磁束密度Bの境界条件を理解し，各種条件における計算ができる。 各種磁気回路の計算ができる。
	12週	定常電流と磁界，磁性体	ビオ・サバールの法則，アンペアの法則の概念を理解し，各種条件における計算ができる。 磁位，ベクトルポテンシャルの概念を用いて計算ができる。 磁界中の電流に働く力，磁性体中の磁界の強さについて計算ができる。 磁性体界面での磁界の強さHと磁束密度Bの境界条件を理解し，各種条件における計算ができる。 各種磁気回路の計算ができる。
	13週	電磁誘導	レンツの法則，ファラデーの電磁誘導の法則の概念を理解し，各種条件における計算ができる。 変圧器起電力と速度起電力の概念を理解し，各種条件における計算ができる。 インダクタンス，磁界のエネルギーについて各種条件における計算ができる。
	14週	電磁誘導	レンツの法則，ファラデーの電磁誘導の法則の概念を理解し，各種条件における計算ができる。 変圧器起電力と速度起電力の概念を理解し，各種条件における計算ができる。 インダクタンス，磁界のエネルギーについて各種条件における計算ができる。
	15週	定期試験	これまでに学習した内容に対し達成度を確認する。
	16週	試験答案の返却・解説	試験において間違った部分を自分の課題として把握する（非評価項目）。

評価割合

	試験	レポート	その他	合計
総合評価割合	60	40	0	100
基礎的能力	0	0	0	0
専門的能力	60	40	0	100
分野横断的能力	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	情報工学特別演習	
科目基礎情報							
科目番号	0010			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	演習			単位の種別と単位数	学修単位: 1		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1		
開設期	後期			週時間数	後期:2		
教科書/教材	業時配布プリント（演習問題、大学院入試問題等）、本科、専攻科の計算機ソフトウェアに関する授業で使った教科書、パソコンで学ぶ言語聴覚士と高専学生のための音響・音声工学入門、幸田晃、斯文堂						
担当教員	幸田 晃,新徳 健,原 崇						
到達目標							
計算機ソフトウェア（情報数学、アルゴリズム、プログラミング等）と計算機ハードウェア（論理回路、計算機工学、情報ネットワーク）の基本事項を基に種々の応用演習問題を解くことにより、さらに計算機ソフトウェアと計算機ハードウェアに関する理解を深める。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	FFTを理解し、プログラミングできる。			FFTを理解し、2の3乗まで手計算できる。		FFTを理解しているが、2の3乗を手計算できない。	
評価項目2	数値解析プログラミングに関する問題を解くことができ、関連する項目について説明ができる。			数値解析プログラミングに関する問題を解くことができる。		数値解析プログラミングに関する問題を解くことができない。	
評価項目3	計算機工学に関する問題を解くことができ、関連する項目について説明ができる。			計算機工学に関する問題を解くことができる。		計算機工学に関する問題を解くことができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	電気電子工学科卒および情報工学科卒の学生が対象である。本科で履修した計算機ソフトウェアと計算機ハードウェアに関する知識を総結集し、復習あるいは新たな学習により計算機ソフトウェアと計算機ハードウェアの基本事項を確実に把握し、応用問題（大学院入試問題）を解くことのできる実をつける。						
授業の進め方・方法	与えられた課題は予習とする。授業では学生が予習した内容について解説、質疑応答を行う。						
注意点	事前に渡された演習問題（宿題）は解いて授業にのぞむこと。当番の学生は問題の説明と板書した解法の説明を行う。講義の内容をよく理解するために、毎回、予習や演習問題等の課題を含む復習として、自学自習が必要である。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	FFTプログラミング		FFTアルゴリズムを手計算できる。FFTの基礎的なプログラムを組み、応用する事ができる。		
		2週	FFTプログラミング		FFTアルゴリズムを手計算できる。FFTの基礎的なプログラムを組み、応用する事ができる。		
		3週	FFTプログラミング		FFTアルゴリズムを手計算できる。FFTの基礎的なプログラムを組み、応用する事ができる。		
		4週	FFTプログラミング		FFTアルゴリズムを手計算できる。FFTの基礎的なプログラムを組み、応用する事ができる。		
		5週	FFTプログラミング		FFTアルゴリズムを手計算できる。FFTの基礎的なプログラムを組み、応用する事ができる。		
		6週	数値解析プログラミング		数値解析の基礎的なアルゴリズム、プログラム等に関する問題を解くことができ、誤差の種類や性質について生じる問題を解決できる。		
		7週	数値解析プログラミング		数値解析の基礎的なアルゴリズム、プログラム等に関する問題を解くことができ、誤差の種類や性質について生じる問題を解決できる。		
		8週	数値解析プログラミング		数値解析の基礎的なアルゴリズム、プログラム等に関する問題を解くことができ、誤差の種類や性質について生じる問題を解決できる。		
	4thQ	9週	数値解析プログラミング		数値解析の基礎的なアルゴリズム、プログラム等に関する問題を解くことができ、誤差の種類や性質について生じる問題を解決できる。		
		10週	数値解析プログラミング		数値解析の基礎的なアルゴリズム、プログラム等に関する問題を解くことができ、誤差の種類や性質について生じる問題を解決できる。		
		11週	計算機工学		ノイマン型コンピュータ、CPU構成とマイクロプログラム、メモリ構成、アドレス変換、高速化技術（パイプライン、キャッシュ、ヒット率、置換え）、仮想記憶（ページング、TLB、置換え）、機械語命令とプログラムなどについて理解し、応用できる。		
		12週	計算機工学		ノイマン型コンピュータ、CPU構成とマイクロプログラム、メモリ構成、アドレス変換、高速化技術（パイプライン、キャッシュ、ヒット率、置換え）、仮想記憶（ページング、TLB、置換え）、機械語命令とプログラムなどについて理解し、応用できる。		
		13週	計算機工学		ノイマン型コンピュータ、CPU構成とマイクロプログラム、メモリ構成、アドレス変換、高速化技術（パイプライン、キャッシュ、ヒット率、置換え）、仮想記憶（ページング、TLB、置換え）、機械語命令とプログラムなどについて理解し、応用できる。		

		14週	計算機工学	ノイマン型コンピュータ、CPU構成とマイクロプログラム、メモリ構成、アドレス変換、高速化技術（パイプライン、キャッシュ、ヒット率、置換え）、仮想記憶（ページング、TLB、置換え）、機械語命令とプログラムなどについて理解し、応用できる。
		15週	計算機工学	ノイマン型コンピュータ、CPU構成とマイクロプログラム、メモリ構成、アドレス変換、高速化技術（パイプライン、キャッシュ、ヒット率、置換え）、仮想記憶（ページング、TLB、置換え）、機械語命令とプログラムなどについて理解し、応用できる。
		16週		

評価割合				
	試験	演習	態度	合計
総合評価割合	60	40	0	100
基礎的能力	0	0	0	0
専門的能力	60	40	0	100
分野横断的能力	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	特別実習A(4週間)
科目基礎情報						
科目番号	0011		科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	履修単位: 4		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専1		
開設期	集中		週時間数			
教科書/教材	出向企業での各種パンフレット、カタログ、資料等					
担当教員	逆瀬川 栄一					
到達目標						
1. 技術者としての社会的責任を自覚し、職業意識の向上を図る事ができる。 2. 与えられた実習テーマに対し、専門的知識や現場での学習をもとに課題を解決する事ができる。 3. 技術者が直面する産業社会での問題点や課題を理解する事ができる。 4. 特別実習において取り組んだ内容について報告書としてまとめ、成果を発表することができる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	技術者としての社会的責任を自覚し、職業意識の向上を図るとともに、社会人としてのマナーを体得し、実践することができる。		実社会における技術者としての社会的責任を自覚し、職業意識の向上を図る事ができる。		実社会における技術者としての社会的責任を自覚し、職業意識の向上を図る事ができない。	
評価項目2	与えられた実習テーマに対し、課題の解決に取り組むとともに、より発展的な意見や提案を行う事ができる。		与えられた実習テーマに対し、専門的知識や現場での学習をもとに課題を解決する事ができる。		与えられた実習テーマに対し、専門的知識や現場での学習をもとに課題を解決する事ができない。	
評価項目3	実習を通じて、技術者が直面する産業社会での問題点や課題を理解し、自身の見解に基づく問題点の発掘を行うことができる。		技術者が直面する産業社会での問題点や課題を理解する事ができる。		技術者が直面する産業社会での問題点や課題を理解する事ができない。	
評価項目4	特別実習において取り組んだ内容を報告書としてまとめ、成果を発表するとともに、実学の経験をどのように生かしていくか自身の言葉で述べる事ができる。		特別実習において取り組んだ内容について報告書としてまとめ、成果を発表することができる。		特別実習において取り組んだ内容について報告書としてまとめ、成果を発表する事ができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	約4週間の期間を持って企業に出向き、会社での業務に触れて実社会での活動を体験し、また実学的な経験を会得する。					
授業の進め方・方法	これまで、主として、座学によって学んだ理論あるいは工学実験で学んだ事柄が、実際の企業でどのように応用されているかを理解する。また、実社会における技術者としての心構えを体得する。					
注意点	企業では、学生のために時間と労力を割いて下さるので、その事を念頭に、礼儀に失する事なく社会人としてのマナーを考えながら行動する事。また、実習中は積極的に質問する事に努める。実習内容に関して、事前に調査し、準備しておくこと。 企業での実習評価、成果発表及び報告書の全てが実施された場合に限り、下記割合で評価し合否判定を行う。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週				
		2週				
		3週				
		4週				
		5週				
		6週				
		7週				
		8週				
	2ndQ	9週				
		10週				
		11週				
		12週				
		13週				
		14週				
		15週				
		16週				
後期	3rdQ	1週				
		2週				
		3週				
		4週				
		5週				
		6週				
		7週				
		8週				
	4thQ	9週				
		10週				

		11週		
		12週		
		13週		
		14週		
		15週		
		16週		
評価割合				
	企業の評価	報告書	発表	合計
総合評価割合	60	20	20	100
専門的能力	60	20	20	100

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	特別実習B(2週間)
科目基礎情報						
科目番号	0012		科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	履修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専1		
開設期	集中		週時間数			
教科書/教材						
担当教員	逆瀬川 栄一					
到達目標						
1. 技術者としての社会的責任を自覚し、職業意識の向上を図る事ができる。 2. 与えられた実習テーマに対し、専門的知識や現場での学習をもとに課題を解決する事ができる。 3. 技術者が直面する産業社会での問題点や課題を理解する事ができる。 4. 特別実習において取り組んだ内容について報告書としてまとめ、成果を発表することができる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	技術者としての社会的責任を自覚し、職業意識の向上を図るとともに、社会人としてのマナーを体得し、実践することができる。		実社会における技術者としての社会的責任を自覚し、職業意識の向上を図る事ができる。		実社会における技術者としての社会的責任を自覚し、職業意識の向上を図る事ができない。	
評価項目2	与えられた実習テーマに対し、課題の解決に取り組むとともに、より発展的な意見や提案を行う事ができる。		与えられた実習テーマに対し、専門的知識や現場での学習をもとに課題を解決する事ができる。		与えられた実習テーマに対し、専門的知識や現場での学習をもとに課題を解決する事ができない。	
評価項目3	実習を通じて、技術者が直面する産業社会での問題点や課題を理解し、自身の見解に基づく問題点の発掘を行うことができる。		技術者が直面する産業社会での問題点や課題を理解する事ができる。		技術者が直面する産業社会での問題点や課題を理解する事ができない。	
評価項目4	特別実習において取り組んだ内容を報告書としてまとめ、成果を発表するとともに、実学の経験をどのように生かしていくか自身の言葉で述べる事ができる。		特別実習において取り組んだ内容について報告書としてまとめ、成果を発表することができる。		特別実習において取り組んだ内容について報告書としてまとめ、成果を発表する事ができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	約2週間の期間を持って企業に出向き、会社での業務に触れて実社会での活動を体験し、また実学的な経験を会得する。					
授業の進め方・方法	これまで、主として、座学によって学んだ理論あるいは工学実験で学んだ事柄が、実際の企業でどのように応用されているかを理解する。また、実社会における技術者としての心構えを体得する。					
注意点	企業では、学生のために時間と労力を割いて下さるので、その事を念頭に、礼儀に失する事なく社会人としてのマナーを考えながら行動する事。また、実習中は積極的に質問する事に努める。実習内容に関して、事前に調査し、準備をしておくこと。 企業での実習評価、成果発表及び報告書の全てが実施された場合に限り、下記割合で評価し可否判定を行う。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	原則として、協力企業に約2週間程度出向き、受入企業から提供される実習テーマに基づいて実習を行う。		技術者としての社会的責任を自覚し、職業意識の向上を図る事ができる。	
		2週	原則として、協力企業に約2週間程度出向き、受入企業から提供される実習テーマに基づいて実習を行う。		与えられた実習テーマに対し、これまでに学んだ専門的知識や現場での学習をもとに課題を解決し、まとめる能力を養う事ができる。	
		3週	原則として、協力企業に約2週間程度出向き、受入企業から提供される実習テーマに基づいて実習を行う。		技術者が直面する産業社会での問題点や課題を説明する事ができる。	
		4週				
		5週				
		6週				
		7週				
		8週				
	2ndQ	9週				
		10週				
		11週				
		12週				
		13週				
		14週				
		15週				
		16週				
後期	3rdQ	1週				
		2週				
		3週				
		4週				
		5週				
		6週				

		7週		
		8週		
	4thQ	9週		
		10週		
		11週		
		12週		
		13週		
		14週		
		15週		
		16週		

評価割合				
	企業の評価	報告書	発表	合計
総合評価割合	60	20	20	100
専門的能力	60	20	20	100

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	電気情報システム工学特別講義Ⅰ
科目基礎情報						
科目番号	0013		科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 1		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専1		
開設期	後期		週時間数	1		
教科書/教材	非常勤講師により指定					
担当教員	逆瀬川 栄一					
到達目標						
1. 電気情報システム工学関連の諸問題に応用できる知識及び能力を理解し説明できる 2. 指定された課題を作成し、講義内容について理解し説明できる						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	講義では取り扱わなかった電気情報システム工学関連の情報なども収集し、電気情報システム工学の諸問題に応用できる知識及び能力を理解し説明できる。		電気情報システム工学関連の諸問題に応用できる知識及び能力を理解し説明できる。		電気情報システム工学関連の諸問題に応用できる知識及び能力を理解及び説明できない。	
評価項目2	指定された課題を講義以外の内容も加えて作成し、講義内容に加えた知識について理解し説明できる。		指定された課題を作成し、講義内容について理解し説明できる。		指定された課題を作成しているが、講義内容について理解できておらず説明できない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	最新の技術動向等、電気情報システム工学専攻の学生にタイムリーなトピックを含めた最新の知識を教授できる非常勤講師が任用できた場合、夏季休業期間等を利用して集中講義を行う事によって、電気情報システム工学関連の諸問題に応用できる知識及び能力を養う。					
授業の進め方・方法	現在、企業において活躍されている技術者に非常勤講師として講義して貰う事により、企業現場の立場から見た最先端の技術動向を修得させ、専攻科の教育目標にある開発型技術者を育成するための講義である。					
注意点	集中講義によって実施される講義であるため、非常勤講師による講義計画に従って受講する事。 授業項目の他、時間数及び授業項目に対する達成目標等の詳細については、正式に非常勤講師が任用され、授業日程が決定した後にシラバスを作成して配付する。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	最新の技術動向等、電気情報システム工学専攻の学生にタイムリーなトピックスを含めた講義を行うため、招聘する非常勤講師により授業項目は決定される。			
		2週				
		3週				
		4週				
		5週				
		6週				
		7週				
		8週				
	4thQ	9週				
		10週				
		11週				
		12週				
		13週				
		14週				
		15週				
		16週				
評価割合						
	試験		レポート		合計	
総合評価割合	0		0		0	
基礎的能力	0		0		0	
専門的能力	0		0		0	
分野横断的能力	0		0		0	

	試験	レポート	合計
総合評価割合	80	20	100
基礎的能力	0	0	0
専門的能力	80	20	100
分野横断的能力	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	環境創造工学プロジェクト	
科目基礎情報							
科目番号	0016			科目区分	専門 / 必修		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1		
開設期	通年			週時間数	前期:2 後期:2		
教科書/教材	なし						
担当教員	入江 智和,徳永 仁夫,樫根 健史,吉満 真一,川添 敦也						
到達目標							
1. 問題点を自ら見いだすことができる。 2. 問題点の解決手段を見出すことができる。 3. チーム作業において、自己のなすべき行動を的確に判断し実行できる。 4. チーム作業において、他者のとるべき行動を判断し、適切に働きかけることができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	与えられたテーマに基づいて問題点を明らかにし、それをまとめて他にわかりやすく説明でき、さらにその背景等を調査するなど、当初の指示以上の取組みができる。			与えられたテーマに基づいて問題点を見だし、それをまとめて他に説明できる。		与えられたテーマに基づいて問題点を自ら見いだせない。	
評価項目2	与えられたテーマに基づいて問題点の解決へのアイデアを考案し、それを試作等のものづくりで実現できる。これに加え、実現できたアイデアの改善を試みる等の当初の指示以上の取組みができる。			与えられたテーマに基づいて問題点の解決に向けたアイデアを考案し、それを試作等のものづくりで実現できるか、実現できなかった場合にはその理由を論理的に説明できる。		与えられたテーマに基づいて問題点の解決へのアイデアを考案できない。	
評価項目3	チームの中で自分が担当する役割について、期待されている以上の作業を実施しできる。			チームの中で自分が担当する役割について、期待されているレベルの作業を概ね実施でき、実施できなかった場合にはその理由を論理的に説明できる。		チームの中で自分が担当する役割について、期待されているレベルの作業を実施できない。	
	チームのメンバに働きかけて、そのメンバに期待したレベル以上の作業を実施させることができる。			チームのメンバに働きかけて、そのメンバに期待したレベルの作業を実施させることができ、実施させることができなかった場合にはその理由を論理的に説明できる。		チームのメンバに働きかけたが、そのメンバに期待したレベルの作業を実施させられない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	機械・電子システム工学専攻、電気情報システム工学専攻および建設工学専攻の異分野の学生が横断して複数のグループを作り、互いの専門知識を素地にPBL (Project Based Learning) 手法を用いて提示された課題のものづくりに挑み、(1) 問題点を自ら見いだせること (2) 問題点の解決手段を見出すことができること (3) 問題点を解決できること等の能力の自己開発を目標とする。						
授業の進め方・方法	本PBL手法による環境創造工学プロジェクトは、機械・電子システム工学専攻、電気情報システム工学専攻および建設工学専攻の学生が将来個々に立ち向かうであろう異分野の事例に対し、臆することなく知恵を駆使して問題解決にあたることを可能とする「総合教育プログラム」である。なお、エンジニアリングデザイン教育の観点から、PBL課題として、公衆の衛生と安全、文化、社会及び環境に係る問題を包含した内容について検討する。						
注意点	学習上の留意点は、① 環境に配慮する能力を身につけるため、環境に関する共通科目を履修すること。② 自らの関心または必要性に応じて専攻分野以外の科目を履修すること。③ 各自の専門分野の知識と①と②の知識を結びつけて、問題を解決することが肝要である。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	オリエンテーション		趣旨と進め方を理解し、説明できる。		
		2週	発想法と問題発掘 (1)		ブレインストーミングによる問題点の発掘ができる。		
		3週	発想法と問題発掘 (2)		KJ法による問題点の発掘ができる。		
		4週	問題発掘に関するプレゼンテーション (1)		情報収集により、与えられたテーマに関する問題発掘ができる。		
		5週	問題発掘に関するプレゼンテーション (2)		発掘した問題を発表し、質疑応答ができる。		
		6週	課題解決アイデアプレゼンテーション (1)		情報収集を行い、発掘した課題を解決するアイデアを提案できる。		
		7週	課題解決アイデアプレゼンテーション (2)		アイデアについて発表し、質疑応答ができる。		
		8週	グループ課題の発掘・調査・検討		与えられたテーマに、グループとして取り組むことができる。		
	2ndQ	9週	グループ作業 (1)		与えられたテーマに、グループとして取り組むことができる。問題解決の手段を見出すことができる。		
		10週	グループ作業 (2)		与えられたテーマに、グループとして取り組むことができる。問題解決のためのアイデアを具現化できる。		
		11週	グループ作業 (3)		与えられたテーマに、グループとして取り組むことができる。問題解決のためのアイデアを具現化できる。		
		12週	グループ作業 (4)		与えられたテーマに、グループとして取り組むことができる。問題解決のためのアイデアを具現化できる。		
		13週	グループ作業 (5)		与えられたテーマに、グループとして取り組むことができる。問題解決のためのアイデアを具現化できる。		

後期		14週	グループ作業（6）	与えられたテーマに，グループとして取り組むことができる．問題解決のためのアイデアを具現化できる．与えられたテーマに，グループとして取り組むことができる．問題解決のためのアイデアを具現化できる．	
		15週	グループ作業（7）	進捗状況を報告書にまとめることができる．適宜計画の修正を行うことができる．	
		16週	中間報告		
	3rdQ	1週	グループ作業（8）	与えられたテーマに，グループとして取り組むことができる．問題解決のためのアイデアを具現化できる．	
		2週	グループ作業（9）	与えられたテーマに，グループとして取り組むことができる．問題解決のためのアイデアを具現化できる．	
		3週	グループ作業（10）	与えられたテーマに，グループとして取り組むことができる．問題解決のためのアイデアを具現化できる．	
		4週	グループ作業（11）	与えられたテーマに，グループとして取り組むことができる．問題解決のためのアイデアを具現化できる．	
		5週	グループ作業（12）	与えられたテーマに，グループとして取り組むことができる．問題解決のためのアイデアを具現化できる．	
		6週	中間報告		
		7週	グループ作業（13）	与えられたテーマに，グループとして取り組むことができる．問題解決のためのアイデアを具現化できる．	
		8週	グループ作業（14）	与えられたテーマに，グループとして取り組むことができる．問題解決のためのアイデアを具現化できる．	
		4thQ	9週	グループ作業（15）	与えられたテーマに，グループとして取り組むことができる．問題解決のためのアイデアを具現化できる．
			10週	グループ作業（16）	与えられたテーマに，グループとして取り組むことができる．問題解決のためのアイデアを具現化できる．
			11週	グループ作業（17）	与えられたテーマに，グループとして取り組むことができる．問題解決のためのアイデアを具現化できる．
			12週	グループ作業（18）	与えられたテーマに，グループとして取り組むことができる．問題解決のためのアイデアを具現化できる．
			13週	グループ作業（19）	与えられたテーマに，グループとして取り組むことができる．問題解決のためのアイデアを具現化できる．
			14週	グループ作業（20）	進捗状況を報告書にまとめることができる．
			15週	成果発表会	グループとしての取り組みの成果を報告できる．
			16週		

評価割合							
	試験	発表	報告書	態度	ポートフォリオ	受講態度	合計
総合評価割合	0	30	40	30	0	0	100
基礎的能力	0	0	10	10	0	0	20
専門的能力	0	15	20	10	0	0	45
分野横断的能力	0	15	10	10	0	0～-30	35

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	微分方程式
科目基礎情報						
科目番号	0017		科目区分		専門 / 選択	
授業形態	講義		単位の種別と単位数		学修単位: 2	
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年		専1	
開設期	前期		週時間数		2	
教科書/教材	「工学基礎 微分方程式」及川正行、永井敦、矢嶋徹 著 サイエンス社					
担当教員	熊谷 博					
到達目標						
微分方程式を工学に応用できることを目標とする。そのために必要とする知識を習得する。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
微分方程式の例や微分方程式の解が理解でき、微分方程式の用語の説明ができる。	様々な問題から微分方程式を導出できる。微分方程式の解の状態を理解でき、微分方程式の用語の説明ができる。		基本的な問題から微分方程式を導出できる。微分方程式の解の状態を理解でき、微分方程式の用語の説明ができる。		基本的な問題から微分方程式を導出できず、微分方程式の解の状態を理解できない。また、微分方程式の用語の説明ができない。	
変数分離形、同次形の微分方程式が解ける。	様々な変数分離形や同次形の微分方程式が解ける。		標準的な変数分離形や同次形の微分方程式が解ける。適当な変数変換によって、基本的な変数分離形や同次形の微分方程式が解ける。		基本的な変数分離形や同次形の微分方程式が解ける。	
1階線形微分方程式、ベルヌイの微分方程式、リッカチの微分方程式が解ける。	様々な1階線形微分方程式が解ける。また、標準的なベルヌイの微分方程式やリッカチの微分方程式が解ける。		標準的な1階線形微分方程式が解ける。また、基本的なベルヌイの微分方程式やリッカチの微分方程式が解ける。		基本的な1階線形微分方程式が解ける。また、基本的なベルヌイの微分方程式やリッカチの微分方程式が解けない。	
完全微分方程式が解ける。	多少複雑な完全微分方程式が解ける。		基本的な完全微分方程式が解ける。		基本的な完全微分方程式が解けない。	
クレローの微分方程式、ラグランジュの微分方程式が解ける。	多少複雑なクレローの微分方程式やラグランジュの微分方程式が解ける。		基本的なクレローの微分方程式やラグランジュの微分方程式が解ける。		基本的なクレローの微分方程式やラグランジュの微分方程式が解けない。	
定数係数2階線形微分方程式が解ける。	ラプラス変換を用いて、様々な定数係数2階線形微分方程式の初期値問題が解ける。		ラプラス変換を用いて、標準的な定数係数2階線形微分方程式の初期値問題が解ける。		ラプラス変換を用いて、基本的な定数係数2階線形微分方程式の初期値問題が解ける。	
整級数を用いて2階線形微分方程式を解くことができる。また、オイラーの微分方程式も解くことができる。	整級数を用いて、様々な2階線形微分方程式をとくことができる。また、様々なオイラーの微分方程式を解くことができる。		整級数を用いて、基本的な2階線形微分方程式をとくことができる。また、基本的なオイラーの微分方程式を解くことができる。		整級数を用いて、基本的な2階線形微分方程式をとくことができない。また、基本的なオイラーの微分方程式を解くことができない。	
簡単な連立微分方程式が解ける。	様々な連立微分方程式が解ける。		基本的な連立微分方程式が解ける。		基本的な連立微分方程式が解けない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	微分方程式は自然科学や工学などでよく取り扱われている。					
授業の進め方・方法	工学で用いられる1階微分方程式の解法、2階微分方程式の解法、連立微分方程式の解法を講義形式で行う。					
注意点	(1)受講後は問題集などで問題を解き、具体的な問題の解法を習得すること。 (2)解けない問題やわからない項目などは担当教員に質問を行うこと。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	準備		微分方程式の例、微分方程式の解、微分方程式の用語の説明ができる。	
		2週	求積法(1)		変数分離形、同次形の微分方程式が解ける。	
		3週	求積法(2)		1階線形微分方程式、ベルヌイの微分方程式、リッカチの微分方程式が解ける。	
		4週	求積法(3)		完全微分方程式が解ける。	
		5週	求積法(4)		クレローの微分方程式、ラグランジュの微分方程式が解ける。	
		6週	線形微分方程式(1)		定数係数2階斉次線形微分方程式が解ける。	
		7週	線形微分方程式(2)		定数係数2階非斉次線形微分方程式が解ける。	
		8週	線形微分方程式(3)		オイラーの微分方程式が解ける。	
	2ndQ	9週	線形微分方程式(4)		整級数を用いて2階線形微分方程式が解ける。	
		10週	線形微分方程式(5)		整級数を用いて2階線形微分方程式が解ける。	
		11週	線形微分方程式(6)		整級数を用いて2階線形微分方程式が解ける。	
		12週	線形微分方程式(7)		整級数を用いて2階線形微分方程式が解ける。	
		13週	連立微分方程式(1)		簡単な連立微分方程式が解ける。	
		14週	連立微分方程式(2)		簡単な連立微分方程式が解ける。	
		15週	定期試験		授業項目に対して到達度を確認する。	
		16週	試験答案の返却・解説		試験において、間違えた部分を自分の課題として把握する。	
評価割合						
		試験	レポート		合計	
総合評価割合		80	20		100	
基礎的能力		80	20		100	

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	ベクトル解析	
科目基礎情報							
科目番号	0018		科目区分		専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数		学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年		専1		
開設期	後期		週時間数		2		
教科書/教材	教科書：「新応用数学」高遠節夫ほか著，大日本図書。参考書・補助教材：「新応用数学 問題集」高遠節夫ほか著，大日本図書。						
担当教員	松浦 将國						
到達目標							
1. ベクトルの和，差，スカラー倍，位置ベクトル，ベクトルの成分，内積，外積の定義を式で説明できる（復習）。 2. ベクトルの微分が説明できる。 3. 接線ベクトルを用いて空間上の曲線の長さが計算できる。 4. 法線ベクトルを用いて空間上の曲面の面積が計算できる。 5. スカラー場の定義が説明でき，勾配を求めることができる。 6. 発散，回転を求めることができる。 7. スカラー場とベクトル場に対してそれぞれ線積分を計算できる。 8. グリーンの定理を説明できる。 9. スカラー場とベクトル場に対してそれぞれ面積分を計算できる。 10. ガウスの発散定理とストークスの定理が説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
ベクトルの和，差，スカラー倍，位置ベクトル，ベクトルの成分，内積，外積（復習）	ベクトルの和，差，スカラー倍，内積，外積などの計算問題をほとんど解くことができ，これらに関連した公式の導出も概ね自力でできる。		ベクトルの和，差，スカラー倍，内積，外積などの計算問題を概ね解くことができ，これらに関連した公式の意味も説明できる。		ベクトルの和，差，スカラー倍，内積，外積などの計算問題をほとんど解くことができない。		
ベクトルの微分	ベクトルの微分に関する計算問題をほとんど解くことができ，内積や外積を組み合わせた種々の公式の導出もできる。		ベクトルの微分の定義を概ね正しく答えられて，ベクトルの微分に関する計算問題を概ね解くことができる。		ベクトルの微分の定義をあまり答えられず，ベクトルの微分に関する計算問題をほとんど解くことができない。		
接線ベクトル	曲線の長さの公式に関する計算問題をほとんど解くことができ，曲線の長さの公式の導出もできる。		曲線の長さの公式を利用して，空間上の具体的な曲線の長さを求める問題を概ね正しく計算できる。		曲線の公式の意味を説明できず，それを利用して空間上の曲線の長さを計算することもほとんどできない。		
法線ベクトル	単位法線ベクトルを用いた曲面の面積公式を証明し，様々なアプローチにより具体的曲面の面積計算ができる。		単位法線ベクトルを用いた曲面の面積公式を利用して，具体的曲面の面積計算ができる。		曲面の面積公式をほとんど説明できず，具体的曲面の面積計算もほとんどできない。		
スカラー場の定義，勾配	ナブラの線形性に関する公式の証明ができ，具体的なスカラー場に対して勾配を計算することができる。		ナブラの線形性をおおむね説明できて，具体的なスカラー場に対して勾配を計算することができる。		ナブラの線形性をほとんど説明できず，具体的スカラー場に対する勾配の計算もほとんどできない。		
発散，回転	具体的なベクトル場に対して発散と回転を計算できて，発散と回転に関する公式を概ね自力で証明できる。		ベクトル場の発散と回転の違いをナブラにより説明できて，具体的なベクトル場に対して発散と回転を計算できる。		ベクトル場の発散と回転の違いを説明できず，具体的なベクトル場に対して発散と回転を計算することができない。		
線積分の計算	スカラー場やベクトル場の具体的な計算ができ，それらの線積分の定義も概ね正しく説明できる。		具体的なスカラー場やベクトル場に対し，与えられた具体的閉曲線について線積分を概ね正しく計算することができる。		与えられたスカラー場やベクトル場の線積分の定義を説明できず，これらの具体的計算もほとんどできない。		
グリーンの定理	グリーンの定理を応用した計算問題を解くことができ，グリーンの定理の証明もできる。		グリーンの定理を応用して具体的な線積分の計算問題を解くことができる。		グリーンの定理の内容をまったく説明できず，線積分の計算問題に應用することもできない。		
面積分の計算	具体的なスカラー場やベクトル場に対して面積分の計算ができ，面積分の公式の証明の概要も説明できる。		面積分の公式を応用して，具体的なスカラー場やベクトル場に対して面積分を計算することができる。		面積分の公式の内容をまったく説明できず，具体的なスカラー場やベクトル場に対して面積分を計算することができない。		
ガウスの発散定理，ストークスの定理	ガウスの発散定理やストークスの定理の概要を説明できて，様々な数理的モデルに應用できる。		ガウスの発散定理やストークスの定理の概要を具体的なモデルに即して説明できる。		ガウスの発散定理やストークスの定理の概要をまったく説明できない。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	ベクトルに関する微積分を具体的な計算問題に即して習得し，物理学や工学等に應用することを目標とする。本科目は物理学や工学等でよく取り扱われる重要な科目である。						
授業の進め方・方法	おもにベクトルの微分，勾配・発散・回転の計算法，ベクトル場／スカラー場での線積分や面積分を学習する。本科目は学生の予習を前提に行われる。						
注意点	各回授業前に予習を済ませ，教科書内の用語の意味や具体例を把握し，例題も解いておくこと。教科書や問題集などで問題を解き，具体的な問題の解法を習得すること。不明な点は必ず担当教員に質問すること						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	ベクトルと内積・外積		ベクトルの和，差，スカラー倍，位置ベクトル，ベクトルの成分，内積，外積の定義を式で説明できる（復習）。		
		2週	ベクトルの微分		ベクトルの微分が説明できる。		
		3週	曲線と曲面		接線ベクトルを用いて空間上の曲線の長さが計算できる。		

		4週	曲線と曲面	法線ベクトルを用いて空間上の曲面の面積が計算できる.
		5週	スカラー場とベクトル場	スカラー場の定義が説明でき、勾配を求めることができる.
		6週	スカラー場とベクトル場	発散、回転を求めることができる.
		7週	スカラー場とベクトル場	発散、回転を求めることができる.
		8週	線積分	スカラー場とベクトル場に対してそれぞれ線積分を計算できる.
	4thQ	9週	線積分	スカラー場とベクトル場に対してそれぞれ線積分を計算できる.
		10週	線積分	グリーンの定理を説明できる.
		11週	線積分	スカラー場とベクトル場に対してそれぞれ面積分を計算できる.
		12週	線積分	スカラー場とベクトル場に対してそれぞれ面積分を計算できる.
		13週	線積分	ガウスの発散定理とストークスの定理が説明できる.
		14週	線積分	ガウスの発散定理とストークスの定理が説明できる.
		15週	期末試験	上記項目に対して到達度を確認する.
		16週	試験答案の返却・解説	試験において間違えた部分を自分の課題として把握する（非評価項目）.
評価割合				
	試験	平常点	合計	
総合評価割合	75	25	100	
能力	75	25	100	

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	線形代数学
科目基礎情報						
科目番号	0019		科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専1		
開設期	前期		週時間数	2		
教科書/教材	テキスト 線形代数 小寺平治著 共立出版／大学編入のための数学問題集 碓氷久他著 大日本図書					
担当教員	嶋根 紀仁					
到達目標						
(1) ベクトル空間と線形写像への理解を深める (2) 固有値・固有ベクトルへの理解を深め、行列の対角化・三角化とその応用を行う						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
行列の対角化	行列の対角化を問題解決に利用できる。		行列の対角化とその簡単な応用ができる。 エルミート行列をユニタリー行列によって対角化できる。		行列の固有値・固有ベクトルを求めることができない。 複素ベクトルの内積を求めることができない。	
行列の三角化	行列の三角化を問題解決に利用できる。		行列の三角化ができる。 2次行列のジョルダン標準形を求めることができる。 指数行列を用いて、簡単な線形微分方程式を解くことができる。		行列の対角化や三角化ができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	(1) 鹿児島高専準学士課程で履修した線形代数の知識を前提とする (2) 線形代数の概念と演算は理工系学問の基礎として多くの分野で利用されている					
授業の進め方・方法	ベクトル空間と線形写像において複素計量ベクトル空間とユニタリー変換の導入、固有値問題において行列の対角化と三角化およびその基本的な応用を講義形式で行う					
注意点	(1) 予習として既習内容を確認しておくこと (2) 復習により要点をつかみ基礎概念、演算方法を理解すること (3) 自学自習として各自のレベルにあった問題を解くことにより、基礎概念の理解だけでなく、演算方法の定着をはかること					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	ベクトル空間と線形写像		ベクトル空間の意味が理解できる	
		2週	同上		ベクトル空間の基底や次元が理解できる	
		3週	同上		線形写像の意味が理解できる	
		4週	同上		線形写像の表現行列が理解できる	
		5週	同上		内積空間の意味が理解でき、複素ベクトルの自然内積を求めることができる 正規直交規定の意味が理解できる	
		6週	同上		ユニタリー変換の意味が理解できる	
		7週	固有値問題		行列の固有値・固有ベクトルを求めることができる	
		8週	同上		行列の対角化とその簡単な応用ができる	
	2ndQ	9週	同上		行列の三角化ができる	
		10週	同上		正規行列の対角化ができる	
		11週	同上		エルミート行列をユニタリー行列によって対角化できる	
		12週	同上		2次行列のジョルダン標準形を求めることができる	
		13週	同上		指数行列の意味が理解できる	
		14週	同上		簡単な線形微分方程式を解くことができる	
		15週	期末試験		固有値問題について達成度を確認する	
		16週	答案返却		試験において、間違えた部分を自分の課題として把握する	
評価割合						
		試験		合計		
総合評価割合		100		100		
期末試験		100		100		

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	地球物理学概論	
科目基礎情報							
科目番号	0020			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材							
担当教員	池田 昭大						
到達目標							
1. 地球の質量、体積、重力等、地球の概要を表す物理量を算出できる。 2. 地球の内部構造、放射性年代測定の仕組み、地磁気の成因について説明できる。 3. 太陽放射のエネルギーについて理解し、太陽定数を用いた太陽放射の計算ができる。 4. 地球磁気圏、電離圏の成因、構造について説明できる。 5. 地球の熱圏、中間圏、成層圏、対流圏の特徴を説明できる。 6. 地球温暖化について説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	地球の質量、体積、重力等、地球の概要を表す物理量を算出でき、算出に用いる式の意味が説明できる。			地球の質量、体積、重力等、地球の概要を表す物理量を算出できる。		地球の質量、体積、重力等、地球の概要を表す物理量を算出することができない。	
評価項目2	地球の内部構造、放射性年代測定の仕組み、地磁気の成因について説明でき、これらと関連する数式を扱うことができる。			地球の内部構造、放射性年代測定の仕組み、地磁気の成因について説明できる。		地球の内部構造、放射性年代測定の仕組み、地磁気の成因について説明できない。	
評価項目3	太陽放射のエネルギーについて理解し、太陽定数を用いた太陽放射の計算ができ、シュテファン・ボルツマンの法則を説明できる。			太陽放射のエネルギーについて理解し、太陽定数を用いた太陽放射の計算ができる。		太陽放射のエネルギーについて理解し、太陽定数を用いた太陽放射の計算ができない。	
評価項目4	地球磁気圏、電離圏の成因、構造について説明でき、スケールハイトの計算ができる。			地球磁気圏、電離圏の成因、構造について説明できる。		地球磁気圏、電離圏の成因、構造について説明できない。	
評価項目5	地球の熱圏、中間圏、成層圏、対流圏の特徴を説明でき、これらの領域の成因について数式、化学式等を用いて説明できる。			地球の熱圏、中間圏、成層圏、対流圏の特徴を説明できる。		地球の熱圏、中間圏、成層圏、対流圏の特徴を説明できない。	
評価項目6	地球温暖化について、アルベドを用いた計算から説明できる。			地球温暖化について説明できる。		地球温暖化について説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	あらゆる人間活動の基盤である地球の過去と現状について、科学的に理解するための基礎的事項を学習する。本科で学習した物理や微積分の基本事項は一通り理解できていることを前提に、地球を対象とする諸現象に対し、これらを応用する。						
授業の進め方・方法	講義形式で進める。						
注意点	教材として資料を適宜配布し、毎回小テスト、またはレポート提出を実施する。必要に応じ、ビデオ映像の視聴を行う						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	地球の大きさと形		地球の質量、体積などを算出できる。		
		2週	回転楕円体地球		重力と遠心力について説明できる。		
		3週	走時曲線		走時曲線を説明できる。		
		4週	地球の内部構造		地球の内部構造を説明できる。		
		5週	地球の年齢		地球の年齢の推定方法を説明できる。		
		6週	プレートテクトニクス		アイソスタシー、プレートテクトニクスを説明できる。		
		7週	地磁気		地磁気の成因を説明できる。		
		8週	太陽活動と地球		太陽の構造、放射、活動について説明できる。		
	4thQ	9週	磁気圏		地球磁気圏の構造を説明できる。		
		10週	電離圏		電離圏の成因を説明できる。		
		11週	地球大気		地球大気の構造を説明できる。		
		12週	地球温暖化		地球の温暖化の仕組みを説明できる。		
		13週	地球環境		地球の環境破壊について説明できる。		
		14週	磁気嵐		磁気嵐について説明できる。		
		15週	試験				
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	20	0	0	0	0	15	35
専門的能力	35	0	0	0	0	15	50
分野横断的能力	15	0	0	0	0	0	15

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	ディジタル信号概論	
科目基礎情報							
科目番号	0021			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	自作教材						
担当教員	河野 良弘						
到達目標							
ディジタル信号の基礎的知識を修得させ、各種ディジタル機器の設計・製造および取扱い等に応用できる能力を養う。 1. コンピュータの記憶と相対演算精度について理解し、基本的な説明ができる。 2. デジタル信号の基本的な知識、（アナログとディジタル・波形の合成と近似・サンプリングとエリアシング）を理解し、基本的な問題に対応することができる。 3. データ処理（A/D変換・USB・イーサネット）などを理解し、基本的な問題に対応することができる。 4. デジタル信号の応用例として、パルス分配の概念を理解すると共に、BRM・DDA・計算式による補間方式などの各輪郭制御について、基本的な問題に対応することができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	コンピュータの記憶と相対演算精度について理解し、応用的な問題に対応することができる。			コンピュータの記憶と相対演算精度について理解し、基本的な問題に対応することができる。		コンピュータの記憶と相対演算精度について理解していない。	
評価項目2	ディジタル信号の基本的な知識、（アナログとディジタル・波形の合成と近似・サンプリングとエリアシング）を理解し、応用的な問題に対応することができる。			ディジタル信号の基本的な知識、（アナログとディジタル・波形の合成と近似・サンプリングとエリアシング）を理解し、基本的な問題に対応することができる。		ディジタル信号の基本的な知識、（アナログとディジタル・波形の合成と近似・サンプリングとエリアシング）を理解できない。	
評価項目3	データ処理（A/D変換・USB・イーサネット）などを理解し、応用的な問題に対応することができる。			データ処理（A/D変換・USB・イーサネット）などを理解し、基本的な問題に対応することができる。		データ処理（A/D変換・USB・イーサネット）などを理解し、基本的な問題に対応することができない。	
評価項目4	ディジタル信号の応用例として、パルス分配の概念を理解すると共に、BRM、DDAなどの補間方式における輪郭制御について、実際の応用的な問題に対応することができる。			ディジタル信号の応用例として、パルス分配の概念を理解すると共に、BRM、DDAなどの補間方式における輪郭制御について、基本的な問題に対応することができる。		ディジタル信号の応用例として、パルス分配の概念を理解できない。またBRM、DDAなどの補間方式における輪郭制御について、基本的な問題に対応することができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	数値制御、信号処理工学等を基礎知識として発展的に学習する。また生産現場で活用されているディジタル信号処理について学習する。将来生産現場での生産技術能力が養成される。						
授業の進め方・方法	配布資料等を基に、システムの計測・制御におけるディジタル信号の基本的な知識を理解させ、ディジタル信号処理の応用例を中心に総合的な視野の元で、これからのF A化に応用できるようにする。適時、演習問題や小テストを行い、学生の理解度を把握しながら授業を進める。						
注意点	割り当てられた課題を調べ、適宜配布するプリントを参考に、ノートに講義内容を整理しておくことが必要である。最後にディジタル信号処理に関する論文等を調べ、その論文等の内容をレポートで提出し発表する。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	コンピュータの記憶		・2進数とデータ型の記憶形態（整数型）を説明できる。		
		2週	コンピュータの記憶		・データ型の記憶形態（実数型）を説明できる。		
		3週	コンピュータの記憶		・データ型の記憶形態（倍精度実数型）を説明できる。		
		4週	コンピュータの記憶		・コンピュータの計算誤差を説明できる。		
		5週	コンピュータの記憶		・相対演算精度を説明できる。		
		6週	ディジタル信号とは		次の細目を説明できる。 (1) アナログとディジタル (2) 波形の合成と近似 (3) サンプリングとエリアシング		
		7週	データ処理等		次の細目を説明できる。 (1) A／D変換 (2) R S 2 3 2 C (3) G P I B (4) U S B (5) H D M I (6) D 4 映像 (7) イーサネット		
		8週	パルス分配による数値制御		パルス分配の概念を説明できる。 B R M補間方式における輪郭制御を説明できる。		
	4thQ	9週	パルス分配による数値制御		パルス分配の概念を説明できる。 DDA補間方式における輪郭制御を説明できる。（直線補間）		
		10週	パルス分配による数値制御		パルス分配の概念を説明できる。 D D Aにおける輪郭制御を説明できる。（円弧補間）		
		11週	パルス分配による数値制御		パルス分配の概念を説明できる。 計算式による補間方式における輪郭制御を説明できる。		

		12週	パルス分配による数値制御	パルス分配による送り速度調整の概念を説明できる。
		13週	課題発表	ディジタル信号関係の論文のレジメを作成して発表し、ディジタル信号の応用例を説明できる。
		14週	課題発表	ディジタル信号関係の論文のレジメを作成して発表し、ディジタル信号の応用例を説明できる。
		15週	定期試験	授業項目 1～5 に対して達成度を確認する。
		16週	試験答案の返却・解説	試験において間違った部分を自分の課題として把握する。（非評価項目）

評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	レポート	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	70	0	0	0	0	30	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	応用電子計測
科目基礎情報						
科目番号	0022		科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専1		
開設期	後期		週時間数	2		
教科書/教材	計測システム工学の基礎（第3版） 西原／山藤／松田 森北出版/確率統計（大日本図書）等の統計関係の教科書類、「トランジスタ技術」「インターフェース」（CQ出版）などの技術雑誌の記事等。					
担当教員	寺師 裕人					
到達目標						
1. データの統計的処理の方法 2. データを可視可と予測 3. データのセンシングと処理						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	記述統計とその発展形である推測統計を理解し計算機で解析できる。		データを用いて統計処理やt、F検定を用いその評価ができる。		データを用いて統計処理やt、F検定を用いその評価ができない。	
評価項目2	データを可視可する原理を理解し計算機で描画できる。		データを最小2乗法や補間法を用い可視化できその結果データの予測が可能になる。		データを最小2乗法や補間法を用い可視化できずその結果データの予測ができない。	
評価項目3	1ケでもよいからセンサを用いた応用回路を構築できる。		色々なセンサの信号検出原理が理解できその応用としてのアナログ処理の回路等の説明ができる。		色々なセンサの信号検出原理が理解できずその応用としてのアナログ処理の回路等の説明ができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	本講義は、3つの部分からなり、それぞれについての修得目標を以下のように設定する。 1. 計測の基本とデータ処理：誤差（ばらつき）の統計的な意味を理解し、差の有意性の判定（t検定）ができる。最小二乗法、補間法等の原理を理解し、実際の計測へ応用できる。 2. センサと信号計測：計測系を等価回路として解析し、インピーダンスや雑音についての問題点を理解できること。 3. 計測技術各論：半導体pHセンサやDNAセンサ等の最新のセンシング素子や、原子間力顕微鏡などの極微小計測システムの原理を理解する。					
授業の進め方・方法	データの統計的性質をもとに誤差の考え方やそのデータの推定を行う検定や分散分析の方法を学びデータを最小2乗法や色々な補間法で可視可する方法を、計算機を用いて学習する。そして信号データを検出する方法と検出した信号の処理方法も学ぶ。信号センサは多岐にわたるため色々な文献を参照されたい。					
注意点	データや誤差についての統計的理解のためには、実際に計算を行うことが必要である。データ処理の学習では実際にパソコンで表計算ソフト等を用いる演習課題を行う。このデータ処理に関する課題のほかに、授業内容に関する課題を提示するので、これらについては必ず自学自習によりレポートを作成して提出すること。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	1. 計測の基本とデータ処理 1.1 計測の基本量と単位系		□ 物理量と工業量の関係、SI単位系の基本量と基準、組立て単位と基本単位の間接関係を理解し、単位間の換算ができる。	
		2週	1.2 計測器の精度と誤差		□ 誤差の種類、感度、分解能、確度、公差、許容差などの意味を理解し、誤差を予測できる。	
		3週	1.3 誤差と統計処理		□ 偶然誤差が正規分布に従う事を理解する。母集団と標本集団の関係を理解し、標本平均、不偏分散、標本標準偏差を計算できる。測定回数と誤差、ばらつきの関係を説明できる。	
		4週	1.4 検定と分散分析		□ 検定の意味、帰無仮説、棄却域等を理解し、標本の検定、t検定を実行できる。分散分析の概要を理解し、回帰直線・相関係数を計算できる。	
		5週	1.4 検定と分散分析		□ 検定の意味、帰無仮説、棄却域等を理解し、標本の検定、t検定を実行できる。分散分析の概要を理解し、回帰直線・相関係数を計算できる。	
		6週	1.5 最小二乗法と補間法		□ 最小二乗法の原理と解析的に適用できる理論式の範囲を解釈できる。ラグランジュの補間法、スプライン補間法の原理を説明できる。最小二乗法によるデータ処理を計算ソフトで利用できる。	
		7週	1.5 最小二乗法と補間法		□ 最小二乗法の原理と解析的に適用できる理論式の範囲を解釈できる。ラグランジュの補間法、スプライン補間法の原理を説明できる。最小二乗法によるデータ処理を計算ソフトで利用できる。	
		8週	2. センサと信号計測 2.1 各種センサの原理と特性		□ 長さ、速度、圧力等の代表的センサ、トランスデューサの原理を説明できる。熱電対、サーミスタ等の温度センサの原理とそれぞれの特徴を説明できる。半導体光センサの種類と特徴、応用分野を説明できる。	
	4thQ	9週	2.2 計測系の等価回路		□ センサ（信号源）と測定器（増幅器）の等価回路とインピーダンスによる誤差、変動信号を扱う場合の周波数特性について説明できる。	
		10週	2.3 アナログ信号処理と計測用増幅器		□ 電気信号増幅の原理と等価回路、電圧フォロフ回路、sa差動増幅器の原理と必要性、CMRRについて説明できる。	
		11週	2.4 雑音		□ 誘導雑音、熱雑音の意味と特徴について説明できる。配線による雑音と、基本的な雑音対策について説明できる。	

		12週	2.5 デジタル計測の概要	☐ 量子化と標本化、標本化定理、エイリアシング、フィルタの必要性を説明できる。
		13週	3. 計測技術各論 3.1 半導体pHセンサ、味センサ、酵素センサ、DNAセンサ等	☐ AD/DA変換器の種類と特徴について説明できる。 ☐ ISFETの原理とその応用、ならびに味センサの原理と概要について説明できる。
		14週	3.2 原子間力顕微鏡 (AFM)	☐ 原子レベルの形状測定を可能としている原理と技術について説明できる。
		15週	試験答案の返却・解説	試験において間違った部分を自分の課題として把握する（非評価項目）。
		16週		

評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	60	0	0	0	0	40	100
基礎的能力	60	0	0	0	0	40	100
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)	授業科目	技術と社会のかかわり
科目基礎情報					
科目番号	0023		科目区分	専門 / 選択	
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専1	
開設期	前期		週時間数	2	
教科書/教材					
担当教員	須田 隆夫,保坂 直之,坂元 真理子,栢 健一,玉利 陽三				
到達目標					
科学技術の歴史と地理的な広がり理解を基礎として、現代社会と科学技術の相互作用に対する理解を深め、技術者に求められる倫理感と使命感を身に付けることを目標とする。以下の到達目標が評価項目となる。 1. 電磁気学の歴史とその現代社会での応用についての学習を通して、新しい技術が社会に与える影響について議論できる。 2. EMCの歴史と理論について学習し、現代社会においてその必要性を議論できる。 3. グローバル化が企業や技術者にもたらす影響と、技術者の社会的責任について意見をまとめ発表・議論することができる。 4. 電気電子産業を例にとり、グローバル化とイノベーションの意味を学習する。さらに「破壊的イノベーション」等のイノベーション理論の学習も通して、社会とのかかわりから工学技術におけるイノベーションについて考察できるようになる。 5. 日本と欧州の価値観の違いを理解し、それを踏まえて社会的圧力の中で技術者の良心をどのように守ることができるかを議論できる。					
ルーブリック					
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安
評価項目1	標準的な到達レベルに加え、独自に調査した事例等から新たな視点を見出し、意見を纏めることができる。		電磁気学の法則の発見からコンピュータならびにインターネットの誕生までの歴史について学習し、それらの発見、発明ならびに新しい技術が社会に与える影響について議論できる。		電磁気学の法則とコンピュータやインターネット等の技術との関連性を説明できない。
評価項目2	標準的な到達レベルに加え、独自に調査した事例等から新たな視点を見出し、意見を纏めることができる。		EMCの概要を学習し、その歴史と技術革新が進む中で社会的になぜ必要な技術なのか議論できる。		EMCを説明できない。またEMC技術と社会との関連性を説明できない。
評価項目3	標準的な到達レベルに加え、独自に調査した事例等から新たな視点を見出し、意見を纏めることができる。		グローバル化による社会の変化が日本の企業や技術者にもたらす影響とその功罪について地球的及び地域的視点から意見をまとめ、論じることができる。技術者が担っている社会的責任の問題について自分の問題として捉え、意見をまとめ発表・議論することができる。		グローバル化が日本の企業や技術者にもたらす影響について、意見をまとめることができない。また、技術者が担っている社会的責任を自らの問題として十分にとらえることができない。
評価項目4	標準的な到達レベルに加え、独自に調査した事例等から新たな視点を見出し、意見を纏めることができる。		1970年代から現在までの日本の電子産業の推移について学習し、繁栄・衰退の原因について、地球的規模での社会との関連性の視点をもって分析・考察ができる。イノベーション理論の概要を学習し、「破壊的イノベーション」の考え方で、電子産業等の変化を分析し、これからのものづくり産業のあり方を議論できる。		日本の電子産業の繁栄・衰退の状況を分析し、説明することができない。また、イノベーションが単なる技術革新ではないことを、説明できない。
評価項目5	標準的な到達レベルに加え、独自に調査した事例等から新たな視点を見出し、意見を纏めることができる。		福島第一原発事故の国内での報道と欧州メディアからの情報を見比べ、日本と欧州の価値観の違いが何に根ざすかを理解して説明できる。その理解を踏まえて、社会的圧力の中で技術者の良心をどのように守ることができるかを議論できる。		日本と欧州の価値観の違いが何に根ざすかを説明できない
学科の到達目標項目との関係					
教育方法等					
概要	技術者において社会との関係性の把握は非常に重要であり、技術者倫理、環境への影響や持続的発展性など社会に対して負う責任への理解に欠かせない。また、現代の世界的な技術革新の流れの中で「技術と社会との関係性」は、創造や開発の方向性の指標であり、新たなイノベーションの源でもある。このようなことから、本科目では「科学」の成立より先立って人類の成立とともにある「技術」の意味と歴史について学び、技術者としての使命や社会的責任について深く考察するとともに、世界的な水平分業と垂直統合の現状、イノベーション理論等についても学習し、これからのものづくりのあり方について考える。				
授業の進め方・方法	数の教員によるオムニバス形式の講義となる。担当教員ごとに課される課題の実施、授業中での意見発表や議論が重視される。また、レポートについては出題した教員への提出を間違いなく行うこと。				
注意点	定期試験は実施しない。最終評価は5名の教員のそれぞれの評価を平均したものとする。 以下の評価割合は、各教員の評価割合の平均を丸めたものであり、あくまで目安である。教員ごとに発表・相互評価・授業への参加状況・レポート/ポートフォリオ の評価割合は異なっている。各教員からの説明を良く聞いて、評価基準について理解しておくこと。				
授業計画					
		週	授業内容	週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	本講義の目指すもの	本講義の目標・位置付について理解し、学習へ参加（議論・発表）のできるよう、学習計画を立てることができる。	
		2週	電磁気学の歴史とその現代社会での応用	電磁気学の法則の発見からコンピュータならびにインターネットの誕生までの歴史について学習し、それらの発見、発明ならびに新しい技術が社会に与える影響について議論できる。	

		3週	電磁気学の歴史とその現代社会での応用	電磁気学の法則の発見からコンピュータならびにインターネットの誕生までの歴史について学習し、それらの発見、発明ならびに新しい技術が社会に与える影響について議論できる。
		4週	電磁気学の歴史とその現代社会での応用	電磁気学の法則の発見からコンピュータならびにインターネットの誕生までの歴史について学習し、それらの発見、発明ならびに新しい技術が社会に与える影響について議論できる。
		5週	EMCの歴史と理論	EMCの概要を学習し、その歴史と技術革新が進む中で社会的になぜ必要な技術なのか議論できる。
		6週	EMCの歴史と理論	EMCの概要を学習し、その歴史と技術革新が進む中で社会的になぜ必要な技術なのか議論できる。
		7週	グローバル化と技術者の社会的責任	グローバル化による社会の変化が日本の企業や技術者にもたらす影響とその功罪について地球的及び地域的視点から意見をまとめ、論じることができる。
		8週	グローバル化と技術者の社会的責任	技術者が担っている社会的責任の問題について自分の問題として捉え、意見をまとめ発表・議論することができる。
	2ndQ	9週	電気電子産業におけるイノベーション（１）日本の電子産業の現状	1970年代から現在までの日本の電子産業の推移について学習し、繁栄・衰退の原因について、地球的規模での社会との関連性の視点をもって分析・考察ができる。
		10週	電気電子産業におけるイノベーション（１）日本の電子産業の現状	1970年代から現在までの日本の電子産業の推移について学習し、繁栄・衰退の原因について、地球的規模での社会との関連性の視点をもって分析・考察ができる。
		11週	電気電子産業におけるイノベーション（２）イノベーション理論と電子産業	イノベーション理論の概要を学習し、「破壊的イノベーション」の考え方で、電子産業等の変化を分析し、これからのものづくり産業のあり方を議論できる。
		12週	電気電子産業におけるイノベーション（２）イノベーション理論と電子産業	イノベーション理論の概要を学習し、「破壊的イノベーション」の考え方で、電子産業等の変化を分析し、これからのものづくり産業のあり方を議論できる。
		13週	人を助けるということ（１）	倫理学の思考実験「トロロッコ問題」が自動運転技術の制御思想にどのように関わるかを理解して説明できる。「命の価値の差」という矛盾について技術者として議論できる。
		14週	人を助けるということ（２）	「韓国企業に技術を流出させた」と非難されるシャープ元副社長・佐々木正氏の思想を理解して説明できる。「国家」と「グローバリズム」の相反関係について技術者として議論できる。
		15週	まとめ	これまでの授業内容に対して俯瞰的に自分の考えをまとめることができる。
		16週		

評価割合

	試験	発表	相互評価	授業への参加状況（態度）	レポート/ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	0	40	10	10	40	0	100
基礎的能力	0	10	0	0	10	0	20
専門的能力	0	10	0	5	20	0	35
分野横断的能力	0	20	10	5	10	0	45

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	環境創造工学特別講義	
科目基礎情報							
科目番号		0024		科目区分		専門 / 選択	
授業形態		講義		単位の種別と単位数		学修単位: 1	
開設学科		電気情報システム工学専攻		対象学年		専1	
開設期		後期		週時間数		1	
教科書/教材		各技術士により指定					
担当教員		逆瀬川 栄一,吉満 真一,山田 真義					
到達目標							
省エネ・省資源、環境対策、廃棄物処理、環境保護、エネルギー問題等、環境に関連した技術分野について、その最新の動向やタイムリーなトピック、地域の取組について教授できる技術士を招いて講義を行う。環境問題に関する知識と、製品開発や製造現場での環境対策技術等について学習することにより、環境に配慮したもののづくりに実践的に応用できる知識および能力を涵養する。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
1.省エネ・省資源、環境対策、廃棄物処理、環境保護、エネルギー問題等、環境に関連した技術分野について、その最新の動向やタイムリーなトピック、地域の取組について、知識および能力を身に付けることができる。		講義では取り扱わなかった情報なども収集し、省エネ・省資源、環境対策、廃棄物処理、環境保護、エネルギー問題等、環境に関連した技術分野について、その最新の動向やタイムリーなトピック、地域の取組について、知識および能力を身に付けることができる。		省エネ・省資源、環境対策、廃棄物処理、環境保護、エネルギー問題等、環境に関連した技術分野について、その最新の動向やタイムリーなトピック、地域の取組について、知識および能力を身に付けることができる。		省エネ・省資源、環境対策、廃棄物処理、環境保護、エネルギー問題等、環境に関連した技術分野について、その最新の動向やタイムリーなトピック、地域の取組について、知識および能力を身に付けることができない。	
2.環境問題に関する知識と、製品開発や製造現場での環境対策技術等について学習することにより、環境に配慮したもののづくりに実践的に応用できる知識および能力を身に付けることができる。		講義では取り扱わなかった情報なども収集し、環境問題に関する知識と、製品開発や製造現場での環境対策技術等について学習することにより、環境に配慮したもののづくりに実践的に応用できる知識および能力を身に付けることができる。		環境問題に関する知識と、製品開発や製造現場での環境対策技術等について学習することにより、環境に配慮したもののづくりに実践的に応用できる知識および能力を身に付けることができる。		環境問題に関する知識と、製品開発や製造現場での環境対策技術等について学習することにより、環境に配慮したもののづくりに実践的に応用できる知識および能力を身に付けることができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		地球規模での環境対策のため省エネ・省資源技術は、あらゆる産業分野での必須の課題であり、学問分野、専攻の枠を超えた複合的な技術である。特に本科目の位置づけは、①環境に配慮する能力を身につけるため、「環境」に関する共通科目として履修する。②自らの関心または必要性に応じて専攻分野以外の科目を履修する。本科目の位置付けは、これらに力点を置いて聴講生の技術力の伸張と人間性の涵養を目指している。					
授業の進め方・方法		複数の本校連携技術士によるオムニバス方式の講義が中心となるため、その都度報告書を提出し評価を受ける。					
注意点		各自への連絡手段は、掲示板やメールによるので連絡に留意すること。 評価基準は各技術士により指定される。					
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	講義の導入		「環境創造工学特別講義の概要」が説明できる。		
		2週	各技術士の専門分野に関する講義		各技術士の専門分野に係わる講義内容が説明できる。		
		3週	各技術士の専門分野に関する講義		各技術士の専門分野に係わる講義内容が説明できる。		
		4週	各技術士の専門分野に関する講義		各技術士の専門分野に係わる講義内容が説明できる。		
		5週	各技術士の専門分野に関する講義		各技術士の専門分野に係わる講義内容が説明できる。		
		6週	各技術士の専門分野に関する講義		各技術士の専門分野に係わる講義内容が説明できる。		
		7週	各技術士の専門分野に関する講義		各技術士の専門分野に係わる講義内容が説明できる。		
		8週	各技術士の専門分野に関する講義		各技術士の専門分野に係わる講義内容が説明できる。		
	4thQ	9週					
		10週					
		11週					
		12週					
		13週					
		14週					
		15週					
		16週					
評価割合							
		レポート			合計		
総合評価割合		100			100		
基礎的能力		0			0		
専門的能力		100			100		
分野横断的能力		0			0		

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	技術倫理
科目基礎情報						
科目番号	0045		科目区分	一般 / 必修		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専2		
開設期	後期		週時間数	2		
教科書/教材	無し。必要な教材は、授業中に適宜配布する。					
担当教員	町 泰樹					
到達目標						
1. 客観的立場に立ち、各種社会問題についてのサーベイおよび分析をしつつ、分かりやすいレポートが作成できる。 2. さまざまな業界が直面しうる倫理的問題について、前向きな解決法を提示できる。 3. 各種倫理思想に沿いつつ「人間」「社会」というものを多角的に理解・分析できる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	社会問題の実情と背景、各種問題の関連性について因果関係をきちんと分析し、それを分かりやすく示すことができた。		社会問題の実情およびその背景といった関連性・因果関係をきちんと理解することはできた。		社会問題の実情についてサーベイなどが不足し、理解できなかった。	
評価項目2	各分野の技術士の話をきちんと理解し、現代社会における解決の道筋について自分なりの解決策を具体的に提示できた。		各分野の技術士の話をきちんと理解し、おおまかな解決策の道筋を提示できた。		各分野の技術士の話を理解できず、問題の適切な解決へと議論が提示されなかった。	
評価項目3	「人間」についての多角的に理解のもと、その集合体である「社会」の特性を理解し、「より良い社会」についての積極的議論を展開できた。		「人間」を多角的に理解し、その集合体である「社会」の特性について理解することができた。		「人間」を一面的にしか理解できず、それゆえ「社会」の見方も一面的なものとなってしまった。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	科学技術発展の歴史を振り返るとき、科学技術はすべての人間に対して幸福をもたらしてくれたであろうか。あるいは、科学技術は地球環境（自然）との共存を果たしてきたであろうか。すべての科学技術者は、科学技術者である前に一人間としてこの地球上に存在する。人間は、地球という巨大な生命体の一部であるがゆえに、他の生命との共存を考えなければならない。また、人間社会において、ひとりひとりの人間は、他者を思いやる心をもち、相手の立場に立つてもの考え、すべての人類の幸福を追求してゆかなければならない。そこで、本科目は、人間として不可欠な倫理観を身に付けること、すなわち、人間として、自然および社会に対して負う責任を自覚するとともに、科学技術と人間、自然との係わり合いを深く考え、人類の未来と自然との共存をデザインできる能力を身に付けることを主な目標とする。取り扱う事例の中には、地域の現状に関する内容も含まれる。					
授業の進め方・方法	担当教員および鹿児島県技術士会より招聘する各技術士（3名）が配布する資料等に沿って授業が進行する。単元が終わる毎にレポートを提出してもらう。					
注意点	講義内容をよく理解するために、毎回、教科書等を参考に2時間程度の予習をし、授業時間での質問等に対応できるようにしておくこと。また、講義終了後は、復習として2時間程度の演習問題等の課題に取り組むこと。疑問点があれば、その都度質問すること。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	オリエンテーション 技術倫理総論（1）		「技術分野における倫理的判断とはどのようなものであるか」という観点のもと、いくつかの社会問題とその背景について理解できる。	
		2週	技術倫理総論（2）			
		3週	技術倫理総論（3）			
		4週	技術倫理総論（4）			
		5週	技術倫理総論（5）			
		6週	技術倫理各論（1） 社会に対する責任を自覚する技術者（建設土木業務における技術者倫理）		建設土木の実務を通して、技術者が社会に対して負う責任を理解することができる。	
		7週	技術倫理各論（1） 社会に対する責任を自覚する技術者（建設土木業務における技術者倫理）			
		8週	技術倫理各論（1） 社会に対する責任を自覚する技術者（建設土木業務における技術者倫理）			
	4thQ	9週	技術倫理各論（2） 農業土木業務における技術者倫理		農業土木の実務を通して、技術者が社会に対して負う責任を理解することができる。	
		10週	技術倫理各論（2） 農業土木業務における技術者倫理			
		11週	技術倫理各論（2） 農業土木業務における技術者倫理			
		12週	技術倫理各論（3） 森林土木業務における技術者倫理		森林土木の実務を通して、技術者が社会に対して負う責任を理解することができる。	
		13週	技術倫理各論（3） 森林土木業務における技術者倫理			
		14週	技術倫理各論（3） 森林土木業務における技術者倫理			
		15週	試験答案の返却・解説		各試験において間違えた部分を自分の課題として把握する（非評価項目）。	
		16週				

評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	35	20	0	0	0	45	100
基礎的能力	35	0	0	0	0	45	80
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	20	0	0	0	0	20

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	論理的英語コミュニケーション
科目基礎情報						
科目番号	0046		科目区分	一般 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専2		
開設期	前期		週時間数	2		
教科書/教材	なし 英和・和英辞書は既に購入しているものでよい					
担当教員	坂元 真理子					
到達目標						
英語での論理的コミュニケーション能力を、ブックレビューと演習形式のプレゼンテーション練習によって身に付ける。具体的には、読んだ英語の本について紹介するプレゼンテーションを行ったり、それについて英語で自分の意見を書いたり話したり、意見の交換を行ったりできるようにする。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
プレゼンテーションの技法について	自分または他者のプレゼンテーションの内容について理解し、その内容やそこから派生した話題について英語で議論することができる。		自分または他者のプレゼンテーションの内容について理解し、自分の考えをまとめて英語で記述したり発表したりできる。		自分で選択した題材についてのプレゼンテーションを行い、また他者のプレゼンテーションの内容を理解することができていない。	
洞察的思考能力について	講義内容や題材の中での論点について自分の意見や多角的な視点からの考えをまとめて英語で議論することができる。		講義内容や題材の中での論点について自分の意見や多角的な視点からの考えをまとめて英語で書いたり発表したりすることができる。		講義内容や題材についての論点を正しく理解し指摘することができない。	
英語を使った論理的なコミュニケーションについて	プレゼンテーションの技法や英語の論理性について科学技術英語で修得したことをもとに、論旨を論理的に組み立てたうえで発表や議論の中で英語で実践することができる。		プレゼンテーションの技法や英語の論理性について科学技術英語で修得したことを、自分のプレゼンテーションにあてはめ英語で実践することができる。		プレゼンテーションの技法や英語の論理性について科学技術英語で修得したことを、自分のプレゼンテーションにあてはめることができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	「科学技術英語」(1年次後期開講科目)の発展・応用レベル。したがって同科目を予め履修していることが望ましい。					
授業の進め方・方法	自宅で英語の本を1冊読み、授業ではあらかじめ決められた方法に基づいて作成した資料を基にプレゼンテーションを行う。また、発表の内容等に関し互いに質疑応答を行うほか、いくつかの点について議論したり、追加の情報についての説明を受けたりする。					
注意点	毎回提示される課題(予習・復習)に取り組み、学習内容の理解および洞察的思考能力を養うこと。英和・和英辞典持参のこと。与えられた課題に対し、自発的な姿勢で取り組むこと。物事について真面目に考えることが嫌いな学生や、人前で意見を述べたり他者と意見交換をしたりする活動が嫌いな学生の受講は勧めない。ディスカッション、プレゼンテーション等、人前で英語で自分の意見を述べる活動が多い。多量の英語教材を読む活動も多く行う。また、基本的に授業中の言語は英語を使用する。					
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	聞く	英語の指示を正しく聞き取ることができる。		
		2週	聞く	英語のプレゼンテーションを聞いて内容を正しく理解することができる。		
		3週	読む	英語の本を読み、内容について正しく理解することができる。		
		4週	読む	英語の資料を読み、内容を正しく理解することができる。		
		5週	読む	教材や資料の中から論旨や中心的となるテーマについて考えながら能動的な読みを行う事ができる。		
		6週	話す	与えられた課題の中から自ら選択した題材について口頭でプレゼンテーションを行うことができる。		
		7週	話す	題材について自分の考えを口頭で発表することができる。		
		8週	話す	他者の発表についての疑問点や自分の意見について英語で相手に伝えることができる。		
	2ndQ	9週	書く	与えられた課題の中から自ら選択した題材について簡潔にまとめて記述することができる。		
		10週	書く	題材についての事実や考えを英語で書くことができる。		
		11週	発表する	上記で培われた能力を総合的に使用し、事実やそれについての自分の考えを英語的な論理構成にしたがって展開し、発表することができる。		
		12週	発表する	発表を聞く人の立場に立ち、内容や論点が明解な発表を行う事ができる。		
		13週	議論する	教材の中で中心的となる問題やテーマについて考察し、問題を設定して発表することができる。		
		14週	議論する	上記で培われた能力を総合的に使用し、論旨を論理的に組み立て意見を交換することができる。		
		15週	期末試験	上記項目について達成度を評価する。		
		16週	試験答案の返却・解説	試験において間違った部分を自分の課題として把握する。(非評価項目)		

評価割合

	試験	発表	レポート等	態度	合計
総合評価割合	50	40	10	0	100
目標到達度	50	40	10	0	100

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	特別研究Ⅱ
科目基礎情報						
科目番号	0029		科目区分	専門 / 必修		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	履修単位: 10		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専2		
開設期	通年		週時間数	前期:15 後期:15		
教科書/教材						
担当教員	須田 隆夫,逆瀬川 栄一,樫根 健史,中村 格,前園 正宜,井手 輝二,玉利 陽三,豊平 隆之,武田 和大,原 崇					
到達目標						
1. 技術者としての社会への貢献と責任 2. 自主的に計画・立案し継続的に学習する能力 3. 文献等(外国語文献を含む)を調査・読解する能力 4. 論文内容を要約して報告するプレゼンテーション能力 5. 研究成果を論文としてまとめ記述する能力 6. 研究に必要な情報機器を利用できる能力						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
到達目標1	研究内容に関する社会の動向やニーズを把握し、自らの研究内容を社会へ発信する必要があることを理解の上、研究活動に活かしており、研究記録や引用した参考文献が正しく管理されている。		研究内容に関する社会の動向やニーズを把握し、自らの研究内容を社会へ発信する必要があることを理解の上、研究活動に活かすことができる。		研究内容に関する社会の動向やニーズを把握し、自らの研究内容を社会へ発信する必要があることを理解していない。	
到達目標2	問題解決に必要なことを自ら調べ、さらに、指導教員などと議論しながら、自らの意見も踏まえ研究計画を検討し、継続的に研究を遂行できる。		研究計画について、指導教員などと議論しながら、自らの意見も踏まえ検討し、研究を遂行できる。		研究計画について、指導教員からの指示がなければ立てられず、自主的に研究を遂行できない。	
到達目標3	対象とする研究課題に関する文献等について外国語文献を含め広く探索・抽出し、その内容を十分に理解した上で、自らの研究に活かすことができる。		対象とする研究課題に関する文献等を探索・抽出し、その内容を理解した上で、自らの研究に活かすことができる。		対象とする研究課題に関する文献等を十分に探索・抽出できず、自らの研究に活かすことができない。	
到達目標4	研究内容が論理的な整合性を保ちつつ要約され、口頭発表等において、他者の認知度に合わせて分かり易く伝えることで十分な理解を得られ、質問にも的確に答えることができる。		研究内容を要約し、口頭発表等において、他者に分かり易く伝えることで理解を得られ、質問にも答えることができる。		研究内容を十分に要約できず、口頭発表等において、他者への十分な理解を得られず、質問にも的確に答えることができない。	
到達目標5	研究内容を論文として体裁を守り、適切な参考文献を引用しつつまとめられ、その内容に論理的整合性があり、的確な表現で記述することができる。		研究内容を論文として体裁を守りつつ論理的にまとめ、正しい表現で記述することができる。		研究内容を論文として論理的にまとめて記述することができない。	
到達目標6	必要な情報機器について、その利用方法を熟知しつつ適切に使用し、研究活動に十分に活かすことができる。		必要な情報機器を適切に使用し、研究活動に活かすことができる。		必要な情報機器を十分に利用できず、研究活動に活かすことができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	電気電子工学・情報工学に関する研究題目について実験・研究を行い、その成果を学協会で発表するとともに、特別研究発表会で発表し、特別研究論文にまとめる。一連の研究過程を実際に経験し、諸問題を解決する能力や電気電子工学及び情報工学に関する技術者となるための能力を養う。これらを通じて以下の項目を習得する。					
授業の進め方・方法	特別研究に関連する内容について学習する。学習題目により重点的に必要となる科目は異なるが、本科および専攻科の全授業科目が関連する。 下記の各専門分野について、担当指導教員のもと研究を行う。 ・無線通信送受信機におけるアナログ電子回路の影響に対するデジタル信号処理による補償に関する研究 ・細胞及び生体物質の電磁気的特性を応用した分析用バイオマイクロデバイスの開発 ・電力設備に係る絶縁診断及びオンライン測定システム ・地球環境に適応可能な次世代エネルギーとその応用に関する研究 ・インバータ駆動モータ制御技術に関する研究 ・分散並列計算と情報処理に関する研究 ・生体磁気刺激の性能向上と生体情報の活用 ・組込みマイクロプロセッサの応用に関する研究 ・分散並列処理とその応用に関する研究					
注意点	各研究題目は原則として1年次のものを継続して行う。担当教員の指示を待つのではなく、各自積極的に取り組み、特別研究を計画的に進める事。正課の時間外に行う事もあるので、実施報告書の作成が必要である。大学評価・学位授与機構へのレポート提出、論文、学協会での発表等のスケジュールは各自確認しておく事。 評価の基準は別途定める。ただし、前刷原稿の提出、特別研究論文の提出および研究発表の何れかが欠けた場合、成績評価は60点未満とする。また、専攻科在学中に各種学協会等が主催あるいは後援する学術講演会等において、特別研究に関する研究発表を必ず行う事とし、学外発表を行わない場合の成績評価は60点未満とする。ただし、本科における卒業研究指導教員と専攻科における特別研究指導教員が同じで、研究内容が類似である場合に限り、専攻科生が5年次に学協会発表を実施したものであれば、専攻科在学中における研究発表は免除できる。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	指導教員の指導のもと、研究に取り組む。		担当教員指導下で自主的に研究背景の調査・実験・解析等を行い、解析結果の検討および考察ができる。	
		2週	指導教員の指導のもと、研究に取り組む。		担当教員指導下で自主的に研究背景の調査・実験・解析等を行い、解析結果の検討および考察ができる。	

[illegible]

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)	授業科目	集積回路製造技術
科目基礎情報					
科目番号	0030		科目区分	専門 / 選択	
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専2	
開設期	前期		週時間数	2	
教科書/教材					
担当教員	須田 隆夫				
到達目標					
集積回路は既に人類に不可欠な要素となっている。スマホからIoTまで、その中心となる集積回路の技術について以下の事項を到達目標として学習する。それぞれの到達目標がルーブリックの評価項目となる。 1. 半導体製造技術の進歩と社会との関係の変遷を通して、技術と社会との関係をグローバルな視点から分析できること。 2. 半導体キャリア統計とpn接合の理論から拡散電流や空乏層幅等の導出と与えられた物性条件からの数値計算ができること。 3. 集積回路の中心デバイスであるMOSFETについて構造・動作原理と特性を理解し、所望の閾値を持つMOSFETの設計ができること、またそれを実現するためのプロセスについて説明できること。 4. CMOS構造とその集積回路の設計・開発の手法について学習し、実際の構造、製造プロセスの関係を説明できること。					
ルーブリック					
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安
評価項目1	標準的な到達レベルに加え、以下が達成できる。 □ 半導体材料の基本的性質を理解し、半導体デバイスの発展の要因と今後の方向性について議論できる □ 集積回路製造技術（微細化）の最新の動向、さらには、現在の集積回路設計・開発、製造の世界的な動向を学調査し、これからの方向性について意見を整理できる。		□ 集積回路技術の歴史的変遷を学習し、微細化の持つ意味を理解し説明できる。 □ プレーナ構造、バイポーラ、MOSデバイス、CMOSの構造と製造プロセスの変遷、素子間分離技術について理解し、説明できる。 □ 集積回路の構造と製造プロセスの関係および、各要素技術（熱酸化、成膜技術（各種CVD、蒸着、スパッタ）、フォトリソグラフィ、イオン打込み、ドライエッチング等）の基本原理解・装置概要を説明できる。		□ プレーナ構造が集積回路の基本として重要であることや、バイポーラ、MOSデバイス、CMOSの構造と製造プロセスの関係を説明できない。
評価項目2	標準的な到達レベルに加え、以下が達成できる。 □ バイポーラトランジスタの動作を説明できる。		□ 運動量-エネルギーのバンド構造、有効質量について説明できる。 □ 有効状態密度の導出ができる。 □ 不純物密度とフェルミレベルの関係、キャリア密度の計算ができる。 □ 少数キャリアの意味を理解し、pn接合のI-V特性を導くことができる。 □ 階段接合における空乏層の電界、障壁電位差、空乏層幅を求めることができる。		□ 運動量-エネルギーのバンド構造と情愛密度の関係が説明できない。また、有効状態密度とキャリア密度の関係を応用して、pn接合の障壁電位差を計算できない。
評価項目3	標準的な到達レベルに加え、以下が達成できる。 □ サブスレッショルド領域特性とスイッチング特性の関係、及び短チャネル効果について説明できる □ ホットエレクトロンとその影響について説明できる。 □ 短チャネル効果対策、LDD、改良LDD構造を説明できる。		□ MOSTランジスタの構造と動作原理、動作タイプを説明できる。 □ MOS構造のバンドモデルから、反転層が形成される条件が$\psi_S=2\psi_B$であることを説明できる。 □ ゲート金属の仕事関数、界面電荷密度がバンドプロファイルへ及ぼす影響を説明し、閾値電圧の理論値を導出できる。 □ 反転層電荷密度Q_nから、linear, saturation 領域のIDを求めるモデルを理解し、チャネル・相互コンダクタンスが導出できる。		□ MOSTランジスタの構造と動作原理を十分に説明できない。また、MOS構造のバンドモデルにおいて、ゲート電圧が印可された場合の電荷分布や電界、ポテンシャルの様子を描くことができない。
評価項目4	標準的な到達レベルに加え、以下が達成できる。 □ 最新のCMOSの素子構造やLSI製造プロセスについて調査説明ができる。		□ CMOSの動作原理と基本構造を説明できる。 □ 閾値電圧や、ゲート長／ゲート幅 等からDC特性を導くことができる。 □ 回路設計用等価回路と素子の構造との関係を理解し、SPICEパラメータについて説明できる。 □ EDAツールによる回路設計の概要と製造までの流れを理解し、回路と最終的なレイアウトとの関係を説明できる。		□ CMOSの動作原理と基本構造、閾値電圧や、ゲート長／ゲート幅 等からDC特性について説明することができない。
学科の到達目標項目との関係					
教育方法等					
概要	技術は常に社会の動きや経済活動と結びついている。単に技術的な知識を学習するだけでは新たな技術を生み出すことはできない。本講義では、現代社会に不可欠となっている半導体集積回路の発展の歴史について学習し、社会と技術との関係性について理解を深める。また、本科で学習した半導体素子の基本原理から発展して素子の構造と製造方法の関係を学習し、集積回路について基本原理から設計、製造までの全体像を把握する。				
授業の進め方・方法	単なる講義ではなく、様々な問題について意見を求める形態の授業を目指している。また、半導体工学の基礎理論については英文参考書のプリントを配布するので、必ず事前に読んで、本科の教科書等を利用して学習すること。				

注意点	特定の教科書は用いない。適宜、以下の参考書からの抜粋、資料等を配布する。 【参考書】 Physics of semiconductor devices; S.M.Sze, McGraw-Hill, ULSI Technology; C.Y.Chang, S.M.Sze, McGraw-Hill 「MOS集積回路設計・製造と信頼性技術」大山英典他、森北出版 「新版ULSIデバイス・プロセス技術」菅野卓雄監、電子情報通信学会 「日本型モノづくりの敗北」湯之上隆著、文春文庫
-----	---

授業計画

		週	授業内容	週ごとの到達目標
前期	1stQ	1週	1. 半導体集積回路と社会の関係 1.1 半導体工学および集積回路技術の発展	☐ 半導体材料の基本的性質を理解し集積回路技術の歴史の変遷から、微細化の持つ意味を理解し説明できる。 ☐ 半導体デバイスの発展の要因と今後の方向性について議論できる
		2週	1. 半導体集積回路と社会の関係 1.1 半導体工学および集積回路技術の発展	☐ プレーナ構造、バイポーラ、MOSデバイス、CMOSの構造と製造プロセスの変遷、素子間分離技術について理解し、説明できる。
		3週	1. 半導体集積回路と社会の関係 1.2 半導体プロセス技術の概要	集積回路の構造と製造プロセスの関係および、各要素技術（熱酸化、成膜技術（各種CVD、蒸着、スパッタ）、フォトリソグラフィ、イオン打込み、ドライエッチング等）の基本原則・装置概要について学習し、製造方法を説明できる。
		4週	1. 半導体集積回路と社会の関係 1.2 半導体プロセス技術の概要	集積回路製造技術（微細化）の最新の動向、さらには、現在の集積回路設計・開発、製造の世界的な動向を学調査し、これからの方向性について意見を整理できる。
		5週	2. 半導体素子の物理 2.1 キャリア統計	☐ 運動量・エネルギーのバンド構造、有効質量について説明できる。 ☐ 半導体における有効状態密度の導出ができる。 ☐ 不純物密度とフェルミレベルの関係、キャリア密度の計算ができる。
		6週	2. 半導体素子の物理 2.2 pn接合の理論	少数キャリアの意味を理解し、過剰少数化キャリアが従う拡散方程式から、I-V特性を導くことができる。
		7週	2. 半導体素子の物理 2.2 pn接合の理論	☐ 階段接合における空乏層の電界、障壁電位差、空乏層幅を求めることができる。 ☐ バイポーラトランジスタの動作原理を理解し、少数キャリアの様子から動作を説明できる。
		8週	2. 半導体素子の物理 2.3 MOSトランジスタの構造と理論	☐ MOSTランジスタの構造と動作原理を理解し、動作タイプを説明できる。 ☐ MOS構造のバンドモデルから、反転層が形成される条件が $\psi_s = 2\psi_B$ であることを説明できる。
	2ndQ	9週	2. 半導体素子の物理 2.3 MOSトランジスタの構造と理論	☐ ゲート金属の仕事関数、界面電荷密度がバンドプロファイルへ及ぼす影響を説明し、閾値電圧の理論値を導出できる。 ☐ 反転層電荷密度 Q_n から、linear, saturation 領域のIDを求めるモデルを理解し、チャネル・相互コンダクタンスが導出できる。
		10週	2. 半導体素子の物理 2.3 MOSトランジスタの構造と理論	☐ サブスレッショルド領域特性とスイッチング特性の関係、及び短チャネル効果について説明できる。 ☐ ホットエレクトロンとその影響について説明できる。 ☐ 短チャネル効果対策、LDD、改良LDD構造を説明できる。
		11週	3. LSI設計の概要 3.1 CMOSトランジスタの設計	☐ CMOSの動作原理と基本構造を説明できる。 ☐ 閾値電圧や、ゲート長/ゲート幅 等からDC特性を導くことができる。
		12週	3. LSI設計の概要 3.1 CMOSトランジスタの設計	CMOSの動作原理と基本構造を説明できる。インバータの形状等、各種パラメータと特性の関係を説明できる。
		13週	3. LSI設計の概要 3.2 CMOS集積回路の設計の概要	☐ 回路設計用等価回路と素子の構造との関係を理解し、SPICEパラメータについて説明できる。
		14週	3. LSI設計の概要 3.2 CMOS集積回路の設計の概要	☐ EDAツールによる回路設計の概要と製造までの流れを理解し、回路と最終的なレイアウトとの関係を説明できる。
		15週	定期試験	授業項目1.1～3.2に対して達成度を確認する。
		16週		

評価割合

	試験	レポート	演習	発表	合計
総合評価割合	60	20	10	10	100
基礎的能力	0	0	0	0	0
専門的能力	60	20	10	0	90
分野横断的能力	0	0	0	10	10

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	音響システム工学	
科目基礎情報							
科目番号	0031			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専2		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	音響・音声工学入門 幸田 斯文堂						
担当教員	幸田 晃						
到達目標							
構造物（部屋）を1つの音響システムと考え、このシステムの伝達関数を身近な測定機器で測定し、音響信号の分析の基礎を説明できるようにする。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
1. FFT（2の16乗）	FFT（2の16乗）を応用的に使いこなせることができる。			FFT（2の16乗）を基本的に使いこなせることができる。		FFT（2の16乗）を基本的に使いこなせることができない。	
2. 残響測定法	各種残響測定法をプログラミングできる。			各種残響測定法を理解できる。		各種残響測定法を理解できない。	
3. 残響時間の測定	残響時間を指導なしで実測し、理論値との検討までできる。			残響時間を実測できる。		残響時間を実測できない	
4. 伝達関数	パソコン上で、各種入力に対応して、入力と出力から伝達関数を推定し、問題点をクローズアップさせることができる			パソコン上で、特定入力に対応して、入力と出力から伝達関数を推定することができる。		パソコン上で、特定入力に対応して、入力と出力から伝達関数を推定することができない	
5. 部屋の伝達関数の測定	雑音状況下において、実際の部屋の音と入力音から、部屋の伝達関数を測定し、検討することができる			実際の部屋の音と入力音から、部屋の伝達関数を測定することができる。		実際の部屋の音と入力音から、部屋の伝達関数を測定することができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	構造物（部屋）を1つの音響システムと考え、このシステムの伝達関数を身近な測定機器で測定し、音響信号の分析の基礎を説明できるようにする。						
授業の進め方・方法	10秒程度の音響信号に対し一度にFFT（IFFT）処理でき、その結果を複素数上で計算できることを前提とする。本科目を修得した場合、音響信号に対し基本的な信号処理技術の基礎となる						
注意点	FFTのプログラミングの基礎学力を前提に、毎回の講義で出題される内容をよく理解し、次回内容との関連性について把握しておくこと。このためには講義終了後のレポート、演習問題の復習、宿題等2時間程度取組み、次回のところを2時間程度予習しておくこと。また疑問点があれば、その都度質問すること						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	学生自ら用意したFFT・IFFTが正しく使用可能かどうかコンピュータ上で実験を行い、レポートにまとめ、2の16乗まで正しく計算ができる。その1		2の16乗のFFTを各種矩形波、各種インパルスに実行し、理論値と合うこと。		
		2週	学生自ら用意したFFT・IFFTが正しく使用可能かどうかコンピュータ上で実験を行い、レポートにまとめ、2の16乗まで正しく計算ができる。その2		2の16乗のIFFTを実行し、矩形波、インパルスを再現できること。		
		3週	学生自ら用意したFFT・IFFTが正しく使用可能かどうかコンピュータ上で実験を行い、レポートにまとめ、2の16乗まで正しく計算ができる。その3		窓関数処理後の2の16乗のIFFTを各種矩形波、各種インパルスに実行し、理論値と合うこと。		
		4週	学生自ら用意したFFT・IFFTが正しく使用可能かどうかコンピュータ上で実験を行い、レポートにまとめ、2の16乗まで正しく計算ができる。その4		2の16乗のIFFTを実行し、窓関数処理後の矩形波、インパルスを再現できること。		
		5週	アイリングの公式、空間容積、吸音率、残響時間のパラメータを用いての残響時間		アイリングの公式、空間容積、吸音率、残響時間のパラメータを用いての残響時間を計算できる。		
		6週	残響時間の測定 その1		測定計画の策定とレポート形式での提出ができる。（場所及び使用機器、予測値等）		
		7週	残響時間の測定 その2		実測し、レポート提出ができる。		
		8週	残響時間の測定 その3		実測結果より、予測値と離れすぎなところを検討し、再実測でき、レポート提出できる。		
	4thQ	9週	残響時間の測定 その4		その4の実測データの補備修正ができる。		
		10週	シミュレーションにより、インパルス、部屋の伝達関数、出力の各周波数領域での複素数計算 その1		複素数のコンボリューション計算ができる。		
		11週	パルス、部屋の伝達関数、出力の各周波数領域での複素数計算 その2		複素数のデコンボリューション計算ができる。		
		12週	部屋の伝達関数の測定 その1		実測データから部屋の伝達関数導出できる。		
		13週	部屋の伝達関数の測定 その2		伝達関数から部屋の残響時間を導出できる。		
		14週	部屋の伝達関数の測定 その3		その1, 2の補備修正ご、レポート提出できる。		
		15週	一定期試験ー				
		16週	各試験において間違った部分を自分の課題として把握する。				
評価割合							
	定期試験			小テスト・レポート		合計	

総合評価割合	40	60	100
	40	60	100
	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	回路工学特論
科目基礎情報						
科目番号	0032		科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専2		
開設期	前期		週時間数	2		
教科書/教材	VHDLで学ぶデジタル回路設計, 吉田たけお・尾知博共著, CQ出版株式会社					
担当教員	芝 浩二郎					
到達目標						
・ゲート回路、基本的な組み合わせ回路の機能を説明できる。 ・VHDLの基本的な文法を説明できる。 ・基本的な組み合わせ回路（マルチプレクサ、デコーダ等）をVHDLで設計できる。 ・基本的な順序回路（レジスタ、カウンタ、シフター等）をVHDLで設計できる。 ・与えられた課題の回路（ストップウォッチ回路）の回路構成を説明できる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	ゲート回路、基本的な組み合わせ回路の機能を説明できる。基本的な順序回路の機能を説明できる。応用的な順序回路の機能を説明できる。		ゲート回路、基本的な組み合わせ回路の機能を説明できる。基本的な順序回路の機能を説明できる。		ゲート回路、基本的な組み合わせ回路の機能を説明できない。	
評価項目2	VHDLの基本的な文法を説明できる。基本的な回路の記述文法を説明できる。コンポーネント化の記述文法を説明できる。		VHDLの基本的な文法を説明できる。基本的な回路の記述文法を説明できる。		VHDLの基本的な文法を説明できない。	
評価項目3	基本的な組み合わせ回路（マルチプレクサ、デコーダ等）をVHDLで設計できる。基本的な組み合わせ回路をコンポーネント化できる。		基本的な組み合わせ回路（マルチプレクサ、デコーダ等）をVHDLで設計できる。		基本的な組み合わせ回路（マルチプレクサ、デコーダ等）をVHDLで設計できない。	
評価項目4	基本的な順序回路（レジスタ、カウンタ、シフター等）をVHDLで設計できる。複数の順序回路を組み合わせた回路をVHDLで設計できる。		基本的な順序回路（レジスタ、カウンタ、シフター等）をVHDLで設計できる。		基本的な順序回路（レジスタ、カウンタ、シフター等）をVHDLで設計できない。	
評価項目5	与えられた課題の回路（ストップウォッチ回路）の回路構成を説明できる。回路構成をVHDLで設計できる。回路をコンポーネント化により簡潔にVHDLで設計できる。		与えられた課題の回路（ストップウォッチ回路）の回路構成を説明できる。回路構成をVHDLで設計できる。		与えられた課題の回路（ストップウォッチ回路）の回路構成を説明できない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	現在、デジタル回路設計などのハードウェア設計は、ハードウェア記述言語を利用することが多い。したがって、論理回路、電子計算機の基礎知識を基に、基本的なデジタル回路をハードウェア記述言語で設計できる力を修得する。					
授業の進め方・方法	デジタル回路をハードウェア記述言語（VHDL）で設計できる力を修得するために、デジタル回路の理論・機能に基づきVHDLを用いた設計方法を演習形式で学ぶ。 ・デジタル回路における組合せ回路と順序回路の理論・機能を講義形式で教示し理解する ・組合せ回路と順序回路の理論に基づき、演習形式で基本的な組合せ回路と順序回路をVHDLで設計し理解する。 ・組合せ回路と順序回路の理論に基づき、演習形式で応用的な組合せ回路と順序回路をVHDLで設計し理解する。 ・講義形式の理論・機能は試験で理解度を確認する。 ・演習形式のVHDLによる設計はレポートで理解度を確認する。					
注意点	論理回路、電子計算機の基礎知識が必要である。また、ハードウェア記述言語（VHDL）の修得のためには、プログラミング（C言語など）の基礎知識が必要である。なお、本科目は、指示内容について210分程度の自学自習（予習・復習）が必要である。					
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	1. 論理回路とデジタルIC	☐ ゲート回路の使い方を説明できる。 ☐ デジタルICの使い方を説明できる。		
		2週	1. 論理回路とデジタルIC	☐ ゲート回路の使い方を説明できる。 ☐ デジタルICの使い方を説明できる。		
		3週	2. ハードウェア記述言語	☐ ハードウェア記述言語（VHDL）の概要を説明できる。 ☐ 基本論理回路をVHDLで記述できる。 ☐ 論理合成を実行できる。		
		4週	2. ハードウェア記述言語	☐ ハードウェア記述言語（VHDL）の概要を説明できる。 ☐ 基本論理回路をVHDLで記述できる。 ☐ 論理合成を実行できる。		
		5週	2. ハードウェア記述言語	☐ ハードウェア記述言語（VHDL）の概要を説明できる。 ☐ 基本論理回路をVHDLで記述できる。 ☐ 論理合成を実行できる。		
		6週	3. 組み合わせ回路の設計	☐ 選択回路, デコーダ, エンコーダ, 比較回路をVHDLで記述できる。		
		7週	3. 組み合わせ回路の設計	☐ 選択回路, デコーダ, エンコーダ, 比較回路をVHDLで記述できる。		
		8週	3. 組み合わせ回路の設計	☐ 選択回路, デコーダ, エンコーダ, 比較回路をVHDLで記述できる。		

	2ndQ	9週	4．フリップフロップとレジスタ	☐ D-FF, RS-FF, JK-FF, T-FFの動作を説明できる. ☐ レジスタをVHDLで記述できる.
		10週	4．フリップフロップとレジスタ	☐ D-FF, RS-FF, JK-FF, T-FFの動作を説明できる. ☐ レジスタをVHDLで記述できる.
		11週	4．フリップフロップとレジスタ	☐ D-FF, RS-FF, JK-FF, T-FFの動作を説明できる. ☐ レジスタをVHDLで記述できる.
		12週	5．順序回路の設計	☐ 演算回路のVHDLによる設計, シミュレーション, および動作検証を行える.
		13週	5．順序回路の設計	☐ 演算回路のVHDLによる設計, シミュレーション, および動作検証を行える.
		14週	5．順序回路の設計	☐ 演算回路のVHDLによる設計, シミュレーション, および動作検証を行える.
		15週	試験答案の返却・解説	試験において間違えた部分を自分の課題として把握する。(非評価項目)
		16週		

評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	60	0	0	0	0	40	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	60	0	0	(-20)	0	40	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	ネットワークアーキテクチャ
科目基礎情報						
科目番号	0033		科目区分		専門 / 選択	
授業形態	講義		単位の種別と単位数		学修単位: 2	
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年		専2	
開設期	前期		週時間数		2	
教科書/教材	〔教科書〕「ネットワーク工学第2版」, 村上泰司著, 森北出版					
担当教員	入江 智和					
到達目標						
ネットワークプロトコルのデファクトスタンダードであるTCP/IPを実例に、各種ネットワーク技術に関する知識を深め、最終的には、机上で外部接続を伴う基本的なLAN設計ができるようになること。 1. デジタル伝送技術について説明できる 2. イーサネットについて説明できる 3. IPの通信モデルを説明できる 4. 外部接続を伴うLAN設計ができる						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	デジタル伝送技術のほとんどの要素について詳細に説明できる。		デジタル伝送技術のいくつかの要素について説明できる。		デジタル伝送技術について何も説明できない。	
評価項目2	イーサネットの主要な要素について詳細に説明でき、その活用シーンを想定できる。		イーサネットの主要な要素について説明できる。		イーサネットについて何も説明できない。	
評価項目3	IPの通信モデルについて詳細に説明できる。経路制御表を集約できる。IPv4とIPv6の相違点を詳細に説明できる。		IPの通信モデルについて説明できる。経路制御表を作成できる。IPv4とIPv6の相違点を説明できる。		IPの通信モデルについて何も説明できない。	
評価項目4	サブネットワーク毎の収容機器の特性を踏まえた外部接続を伴うLAN設計ができる。		外部接続を伴う基本的なLAN設計ができる。		LAN設計ができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	コンピュータネットワークと親和性の高いデジタル通信方式／サービスの普及により、ネットワーク技術、とりわけTCP/IPに関する技術の重要性はますます高まっている。本科目ではTCP/IPを中心に、その周辺技術についての理解を深めることで、情報系専攻修了者に対して一般社会が求める知識の定着を図る。					
授業の進め方・方法						
注意点	コンピュータネットワークに関する基礎知識（EthernetやTCP/IPに関するもの）を有していること（情報工学科5年次「情報工学特論I」修得相当）を前提に授業を進める。当該基礎知識を有さない場合は、本科目が想定する自学自習内容に加え、当該基礎知識の十分な自学自習も求めるので留意すること。自学自習において教科書を精読し、予習すること。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	1. ガイダンス 2. ネットワークの進展		回線交換とパケット交換を説明できる。 アクセス回線について説明できる。	
		2週	2. ネットワークの進展			
		3週	3. デジタル伝送技術の基礎		アナログ信号のデジタル化について説明できる。 並列伝送と直列伝送について説明できる。 全二重伝送と半二重伝送について説明できる。 ベースバンド伝送とブロードバンド伝送について説明できる。 同期と非同期について説明できる。 伝送媒体について説明できる。	
		4週	3. デジタル伝送技術の基礎			
		5週	3. デジタル伝送技術の基礎			
		6週	4. ネットワークアーキテクチャ		OSI参照モデルについて説明できる。	
		7週	5. ローカルエリアネットワーク		MACアドレスを説明できる。 CSMA/CDを説明できる。 各IEEE802.11無線LAN方式の特徴を説明できる。 インフラストラクチャモードとアドホックモードの違いを説明できる。	
		8週	6. イーサネットの発展		各方式の特徴を説明できる。 各中継器の特徴を説明できる。 VLANを説明できる。	
	2ndQ	9週	7. IPネットワーク		IPv4の通信のモデルを説明できる。 IPv6のIPアドレスを説明できる。 IPv6のアドレス体系を説明できる。	
		10週	7. IPネットワーク			
		11週	7. IPネットワーク			
		12週	7. IPネットワーク			
		13週	8. ドメインネームシステム		DNSを説明できる。 nslookupコマンドを用いてFQDNからIPアドレスを調べることができる。	
		14週	9. LAN設計演習		外部接続を伴う基本的なLAN設計ができる。	
		15週	一定期試験―		授業項目2～9に対して達成度を確認する。	
		16週				

評価割合			
	試験	その他	合計
総合評価割合	60	40	100
基礎的能力	0	0	0
専門的能力	60	40	100
分野横断的能力	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	電気情報システム工学特別講義Ⅱ
科目基礎情報						
科目番号	0034			科目区分	専門 / 選択	
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 1	
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専2	
開設期	後期			週時間数	1	
教科書/教材	非常勤講師により指定					
担当教員	逆瀬川 栄一					
到達目標						
1. 電気情報システム工学関連の諸問題に応用できる知識及び能力を理解し説明できる 2. 指定された課題を作成し、講義内容について理解し説明できる						
ルーブリック						
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安
評価項目1		講義では取り扱わなかった電気情報システム工学関連の情報なども収集し、電気情報システム工学の諸問題に応用できる知識及び能力を理解し説明できる。		電気情報システム工学関連の諸問題に応用できる知識及び能力を理解し説明できる。		電気情報システム工学関連の諸問題に応用できる知識及び能力を理解及び説明できない。
評価項目2		指定された課題を講義以外の内容も加えて作成し、講義内容に加えた知識について理解し説明できる。		指定された課題を作成し、講義内容について理解し説明できる。		指定された課題を作成しているが、講義内容について理解できておらず説明できない。
評価項目3						
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要		最新の技術動向等、電気情報システム工学専攻の学生にタイムリーなトピックを含めた最新の知識を教授できる非常勤講師が任用できた場合、夏季休業期間等を利用して集中講義を行う事によって、電気情報システム工学関連の諸問題に応用できる知識及び能力を養う。				
授業の進め方・方法		現在、企業において活躍されている技術者に非常勤講師として講義して貰う事により、企業現場の立場から見た最先端の技術動向を修得させ、専攻科の教育目標にある開発型技術者を育成するための講義である。				
注意点		集中講義によって実施される講義であるため、非常勤講師による講義計画に従って受講する事。 授業項目の他、時間数及び授業項目に対する達成目標等の詳細については、正式に非常勤講師が任用され、授業日程が決定した後にシラバスを作成して配付する。				
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	最新の技術動向等、電気情報システム工学専攻の学生にタイムリーなトピックを含めた講義を行うため、招聘する非常勤講師により授業項目は決定される。			
		2週				
		3週				
		4週				
		5週				
		6週				
		7週				
		8週				
	4thQ	9週				
		10週				
		11週				
		12週				
		13週				
		14週				
		15週				
		16週				
評価割合						
		試験		レポート		合計
総合評価割合		0		0		0
基礎的能力		0		0		0
専門的能力		0		0		0
分野横断的能力		0		0		0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	環境電磁気学
科目基礎情報						
科目番号	0035		科目区分	専門 / 必修		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専2		
開設期	前期		週時間数	2		
教科書/教材						
担当教員	鎌田 清孝					
到達目標						
1. 我々周辺の電磁界発生源の測定や解析, および電気機器や生体に及ぼす影響や環境電磁界への対策方法について説明できる. 2. 身の周りの環境磁場を正確に測定出来, 現象と原因をレポートにまとめ, わかりやすいプレゼンテーションができる.						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	我々周辺の電磁界発生源の測定や解析, および電気機器や生体に及ぼす影響や環境電磁界への対策方法について詳しく説明でき, さらに, 講義外での詳しい内容を自分で調べて, 理解し説明できる.		我々周辺の電磁界発生源の測定や解析, および電気機器や生体に及ぼす影響や環境電磁界への対策方法について詳しく説明できる.		我々周辺の電磁界発生源の測定や解析, および電気機器や生体に及ぼす影響や環境電磁界への対策方法について説明できない.	
評価項目2	身の周りの環境磁場を測定でき, 測定値はすべて信頼できる値であったことに加えて, 測定結果に基づいて自ら仮説を立てて検証を試みる等の, 当初の指示にない取り組みが見られた.		身の周りの環境磁場を測定でき, 測定値はすべて信頼できる値であった.		身の周りの環境磁場を全く測定できなかった. あるいは, すべての測定値が信頼できない値であった.	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	我々周辺の電磁界発生源の測定や解析, および電気機器や生体に及ぼす影響や環境電磁界への対策方法について説明できる. また, 身の回りの家電製品の電磁界, 電磁波を測定でき, それについて考察し, 報告書としてまとめることができ, 発表できる.					
授業の進め方・方法	<授業の進め方> 教員が, その日に学ぶテーマの背景と目的、概要を説明する 学生が、グループワークをおこなう 学生が、その日のテーマに関する振り返りテストを受ける <授業内容> 1. 電磁気学 2. 電磁環境 3. 電磁環境の測定原理や測定方法 4. 電磁環境の低減技術 5. 国際ガイドラインと各国のガイドライン 6. 電磁環境の測定方法及び解析方法及び予測手法 7. 電磁環境の測定 (課題作成) 8. プレゼンテーション <方法> 各自、教員の説明および板書内容の中から必要と思う部分を加筆する.					
注意点	原則として環境電磁気学に必要な基礎的技術に関する講義を進めていくが、これらに必要な法則・手法に関する基礎工学についても述べる. その他、環境に関する理解を深めるため、資料 (プリント)、OHP等を用い説明を行う. また、期末試験以外に小テストを行い、レポート等の提出も課する.					
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	電磁気学	☐ 電磁界に関する単位について説明できる. ☐ 電磁現象について説明できる.		
		2週	電磁環境	☐ 電磁環境の歴史を説明できる. ☐ 電磁波, 電磁界, 電離作用, イミュニティの性質を説明できる. ☐ 自然界に生ずる電磁界について説明できる. ☐ 人工的に生ずる電磁界について説明できる ☐ 電磁環境によって生ずる生体や機器の影響を説明できる.		
		3週	電磁環境	☐ 電磁環境の歴史を説明できる. ☐ 電磁波, 電磁界, 電離作用, イミュニティの性質を説明できる. ☐ 自然界に生ずる電磁界について説明できる. ☐ 人工的に生ずる電磁界について説明できる ☐ 電磁環境によって生ずる生体や機器の影響を説明できる.		
		4週	電磁環境	☐ 電磁環境の歴史を説明できる. ☐ 電磁波, 電磁界, 電離作用, イミュニティの性質を説明できる. ☐ 自然界に生ずる電磁界について説明できる. ☐ 人工的に生ずる電磁界について説明できる ☐ 電磁環境によって生ずる生体や機器の影響を説明できる.		
		5週	電磁環境の測定原理や測定方法	☐ 電磁界の測定原理や測定方法を説明できる.		
		6週	電磁環境の測定原理や測定方法	☐ 電磁界の測定原理や測定方法を説明できる.		
		7週	電磁環境の低減技術	☐ 電磁環境の特性から低減技術を説明できる. ☐ シールド等の機器および加算平均等のソフトによる低減技術を説明できる.		

		8週	国際ガイドラインと各国のガイドライン	□ 低周波，高周波領域における電磁界の国際ガイドラインの基準値の決め方および各国のガイドラインとの違いを説明できる。
	2ndQ	9週	電磁環境の測定方法と解析方法及び予測手法	□ 電磁環境の測定方法と解析方法および予測手法（電車の送・帰電流や自動車エレベータ等の磁性体の移動に起因する電磁気計測と解析方法，火山活動に起因する電磁気計測と解析方法，電化製品からの漏れ磁界による人体への影響，MRIからの漏れ磁界の低減方法，環境電磁界への対策方法）を説明できる。
		10週	電磁環境の測定方法と解析方法及び予測手法	□ 電磁環境の測定方法と解析方法および予測手法（電車の送・帰電流や自動車エレベータ等の磁性体の移動に起因する電磁気計測と解析方法，火山活動に起因する電磁気計測と解析方法，電化製品からの漏れ磁界による人体への影響，MRIからの漏れ磁界の低減方法，環境電磁界への対策方法）を説明できる。
		11週	電磁環境の測定（課題作成）	□ 身の回りの家電製品の電磁界，電磁波を測定でき，それについて考察し，報告書としてまとめることができ，発表できる。
		12週	電磁環境の測定（課題作成）	□ 身の回りの家電製品の電磁界，電磁波を測定でき，それについて考察し，報告書としてまとめることができ，発表できる。
		13週	プレゼンテーション	□ 測定した家電製品の電磁界，電磁波の結果を考察し発表できる。
		14週	プレゼンテーション	□ 測定した家電製品の電磁界，電磁波の結果を考察し発表できる。
		15週	期末テスト	授業項目1～7について達成度を確認する。
		16週		

評価割合

	試験	小テスト	レポート	態度	合計
総合評価割合	70	10	20	0	100
基礎的能力	0	0	0	0	0
専門的能力	70	10	20	0	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	応用代数学	
科目基礎情報							
科目番号	0037		科目区分		専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数		学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年		専2		
開設期	後期		週時間数		2		
教科書/教材	〔教科書〕 なし／〔参考書・補助教材〕 図書館の参考書類（整数論，暗号で検索），配布するプリント類						
担当教員	白坂 繁						
到達目標							
(1) 代数的な考え方・論理的な思考を修得すること。 (2) 具体的な計算処理に習熟すること。 (3) 抽象的な概念を理解し，応用できること。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1. 互除法を使用して、最大公約数を求めることができる。		互除法により、最大公約数を求め、更に一次不定方程式の一般解を求めることができる。		最大公約数・最小公倍数を理解し、互除法により、最大公約数を求めることができる。		互除法により、最大公約数を求めることができない。	
評価項目2. オイラー関数の値を求め、合同式が解ける。		合同式とオイラーの関数の値より、オイラーの定理の計算ができる。		合同式が解け、オイラーの関数の値を求めることができる。		合同式が解け、オイラーの関数の値を求めることができない。	
評価項目3. R S A暗号の基本的仕組みを理解できる。		R S A暗号の仕組みを理解し、暗号化・復号化の計算ができ、解読が困難なことを説明できる。		合同式を利用して、R S A暗号の仕組みを理解し、暗号化・復号化の計算ができる。		R S A暗号の暗号化・復号化の計算ができない。	
評価項目4. 群論の初歩と抽象的数学の考え方を理解できる。		群論を理解し、実際の問題に応用・適用できる。抽象的な記述・証明を理解できる。		群論の計算と、構造を理解し、簡単な群の説明ができる。		群の計算ができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		(1) 本科までの論理的な考え方を前提とする。 (2) 本科目は，専門科目や将来の職業のための基礎科目として位置付けられる。					
授業の進め方・方法		講義・演習方式で行う					
注意点		(1) 集中すべきときに集中して要点をつかみ，理解すべきことを確実に理解すること。 (2) 講義内容をよりよく理解するために，毎回，教科書等を参考に2時間程度の予習をしておくこと。 (3) 課題等の演習問題で，2時間以上の反復練習をし，抽象的な思考に慣れること。 (4) 疑問点は，その都度，質問すること。					
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	1. 初等整数論		☐ ①最大公約数と最小公倍数との関係を理解できる。		
		2週	1. 初等整数論		☐ ②互除法により最大公約数 を求めることができる。		
		3週	1. 初等整数論		☐ ③互除法により，一次不定方程式 が解ける。		
		4週	2. 合同式		☐ ①合同式とその性質 を理解 できる。		
		5週	2. 合同式		☐ ②連立一次合同式 が解ける。		
		6週	2. 合同式		☐ ③オイラーの関数の値 を求めることができる。		
		7週	2. 合同式		☐ ③オイラーの関数の値 を求めることができる。		
		8週	2. 合同式		☐ ④オイラーの (小) 定理 の計算ができる。		
	4thQ	9週	3. R S A暗号		☐ ①公開鍵暗号の仕組み を理解できる。		
		10週	3. R S A暗号		☐ ②暗号化・復号化のアルゴリズム を理解できる。		
		11週	4. 群論		☐ ①群の定義とその例 を理解できる。 ☐ ②部分群の性質 を定義に基づいて理解できる。		
		12週	4. 群論		☐ ③正規部分群の性質 を定義に基づいて理解できる。		
		13週	4. 群論		☐ ④群の準同形定理 を理解できる。		
		14週	4. 群論		☐ ⑤群論を実際の問題 に応用できる。		
		15週	試験答案返却・解説		試験において、間違えた部分を自分の課題として把握する（非評価項目）。		
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	75	0	0	0	0	25	100
基礎的能力	75	0	0	0	0	25	100
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	解析力学	
科目基礎情報							
科目番号	0038		科目区分		専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数		学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年		専2		
開設期	前期		週時間数		2		
教科書/教材	なし						
担当教員	篠原 学						
到達目標							
1. 仮想仕事の原理を用いて、釣り合いの問題について説明できる。 2. ラグランジアンを導き、ハミルトンの原理について説明できる。 3. 一般化運動量を用い、ハミルトニアン、ハミルトンの正準方程式について説明できる。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1		仮想仕事の原理にラグランジュの未定乗数方を用いて、釣り合いの問題を求めることができる。		仮想仕事の原理を説明し、釣り合いの問題を考えることができる。		仮想仕事の原理を説明することができない。	
評価項目2		ラグランジアンを求め、ハミルトンの原理を用いて運動の問題を求めることができる。		ラグランジアンを導き、ハミルトンの原理について説明できる。		ラグランジアン、ハミルトンの原理について説明できない。	
評価項目3		ハミルトニアン、ハミルトンの正準方程式を用いて運動の問題を求めることができる。		一般化運動量を用いた、ハミルトニアン、ハミルトンの正準方程式について説明できる。		ハミルトニアン、ハミルトンの正準方程式について説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		「一般物理」あるいは「応用物理」で学んだNewton力学は、巨視的な世界における物体の振る舞いを記述するのに役立つ。一方、微視的な世界を理解するには量子力学を用いなければならない。これらの中間に位置する解析的な力学の取り扱いに慣れる。					
授業の進め方・方法		講義形式で行い、演習を行って学習内容を確認する。					
注意点		物体(質点)の運動を調べるのに、Newton力学ではベクトル量である【力】に注目したのに対し、解析力学ではスカラー量である【エネルギー】に注目する。					
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	物体の運動		Newtonの運動方程式、そして束縛運動について説明できる。		
		2週	物体の運動		「仕事とエネルギーの関係」「エネルギー保存則」「保存力とポテンシャルとの関連」について説明できる。		
		3週	物体の運動		「仕事とエネルギーの関係」「エネルギー保存則」「保存力とポテンシャルとの関連」について説明できる。		
		4週	物体の運動		直交座標を含めた一般化座標について説明できる。		
		5週	仮想仕事の原理		仮想仕事の原理を用いて、「釣り合いの問題」について説明できる。		
		6週	仮想仕事の原理		仮想仕事の原理を用いて、「釣り合いの問題」について説明できる。		
		7週	ダランベールの原理		「慣性抵抗」は「加えられた力」の中間に入れられることについて説明できる。		
		8週	ダランベールの原理		「慣性抵抗」は「加えられた力」の中間に入れられることについて説明できる。		
	2ndQ	9週	ハミルトンの原理		ラグランジアンを導き、物体の運動を「ハミルトンの原理」で説明できる。		
		10週	ハミルトンの原理		ラグランジアンを導き、物体の運動を「ハミルトンの原理」で説明できる。		
		11週	ラグランジュの運動方程式		一般化座標を用いてラグランジアンを導き、ラグランジュの運動方程式を立てることができる。		
		12週	ラグランジュの運動方程式		一般化座標を用いてラグランジアンを導き、ラグランジュの運動方程式を立てることができる。		
		13週	ハミルトンの正準運動方程式		一般化運動量を用いてハミルトンの正準運動方程式を立てることができる。		
		14週	ハミルトンの正準運動方程式		一般化運動量を用いてハミルトンの正準運動方程式を立てることができる。		
		15週	定期試験				
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	70	0	0	0	0	30	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	量子力学	
科目基礎情報							
科目番号	0039			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専2		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	なし						
担当教員	野澤 宏大						
到達目標							
1. 前期量子論を理解できる。 2. シュレーディンガー方程式を適用することができる。 3. 不確定性原理と交換関係を理解できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	量子条件・振動数条件を理解できる。			水素原子モデルを理解できる。 古典力学的な軌道運動との違いを理解できる。		水素のスペクトルをリュードベリ定数を用いて説明できない。	
評価項目2	ポテンシャル問題を解くためにシュレーディンガー方程式を適用できる。			時間を含まないシュレーディンガー方程式、時間を含むシュレーディンガー方程式を立てることができる。		運動量、エネルギー、ハミルトニアンを演算子表記することができない。	
評価項目3	位置と運動量、時間とエネルギーを同時に正確に求めることはできないことを説明できる。			交換子の演算から、交換可能であるか否かを判断できる。		交換子の計算ができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	電子、原子レベルの現象解明に対する量子力学の必要性を理解する。そして、「シュレーディンガー方程式」の量子井戸への適応と、「不確定性原理」と「交換関係」の取り扱いについて学習する。量子力学の入門程度の内容であるが、本科で学習した応用物理・微積分の基礎的事項は一通り理解していることを前提とする。						
授業の進め方・方法	講義形式で進める。						
注意点	講義で展開される数式は自ら確認する必要がある。また学習内容を定着させるために、例題や練習問題を数多く解く。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	前期量子論		原子スペクトルの「離散性」や「光電効果」と「Compton効果」から、『光の粒子性』を説明できる。		
		2週	前期量子論		原子スペクトルの「離散性」や「光電効果」と「Compton効果」から、『光の粒子性』を説明できる。		
		3週	前期量子論		電子線回折を通して『電子の波動性』を説明できる。		
		4週	前期量子論		水素原子のエネルギー準位について説明できる。		
		5週	シュレーディンガー方程式		古典力学における弦の固有振動との対応から、物質波をもつ粒子の運動に伴う固有値と固有関数を説明できる。		
		6週	シュレーディンガー方程式		運動量を演算子化することにより、その固有値と固有関数を説明できる。		
		7週	シュレーディンガー方程式		エネルギーを固有値とするハミルトニアン(演算子)に対する固有値方程式シュレーディンガー方程式を、無限深さの1次元井戸型ポテンシャルに適応し、波動関数を求めることができる。さらに、この波動関数の規格直交化を説明できる。		
		8週	シュレーディンガー方程式		エネルギーを固有値とするハミルトニアン(演算子)に対する固有値方程式シュレーディンガー方程式を、無限深さの1次元井戸型ポテンシャルに適応し、波動関数を求めることができる。さらに、この波動関数の規格直交化を説明できる。		
	4thQ	9週	シュレーディンガー方程式		エネルギーを固有値とするハミルトニアン(演算子)に対する固有値方程式シュレーディンガー方程式を、無限深さの1次元井戸型ポテンシャルに適応し、波動関数を求めることができる。さらに、この波動関数の規格直交化を説明できる。		
		10週	シュレーディンガー方程式		有限深さの量子井戸では、波動関数の浸み出し効果(トンネル効果)があることが説明できる。		
		11週	不確定原理と交換関係		電子の「位置」と「運動量」を同時に定められないことを説明できる。		
		12週	不確定原理と交換関係		交換関係が『0』でない2つの演算子(例えば「位置」と「運動量」あるいは「時間」と「エネルギー」)の間には、不確定原理が成立することが説明できる。		
		13週	不確定原理と交換関係		交換関係が『0』でない2つの演算子(例えば「位置」と「運動量」あるいは「時間」と「エネルギー」)の間には、不確定原理が成立することが説明できる。		
		14週	まとめ				
		15週	期末試験				
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計

総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	35	0	0	0	0	20	55
専門的能力	25	0	0	0	0	5	30
分野横断的能力	10	0	0	0	0	5	15

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	知的生産システム	
科目基礎情報							
科目番号	0040			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専2		
開設期	後期			週時間数	後期:2		
教科書/教材	配布資料						
担当教員	塚本 公秀						
到達目標							
実際の生産現場では生産技術者は製造工程全体での工程と製品の流れを把握しておくことが要求される。本授業では生産とは何かということを生産システムの歴史と比較しながら、現在主流の多品種少量生産のための設備形態とそれを支える様々な技術ができる。近年コンピュータ援用設計・加工技術の進歩が非常に進んでおり、開発・設計・生産の全てに渡ってどのように関わっているか説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	モノづくりが効率と品質を求めてシステム化されていった歴史的な流れと背景や特徴を説明できる			モノづくりが効率と品質を求めてシステム化されていった歴史的な流れを説明できる。		生産システムの歴史的流れが説明できない。	
評価項目2	CAD,CAE/CAMと設計から生産までの多品種少量生産を考慮したフレキシブル生産システムについて説明できる。			フレキシブル生産システムの概略について説明できる。		フレキシブル生産システムの構成要素と必要性について説明できない。	
評価項目3	ガントチャートが作成でき、ボトルネックとその対策に気づくことができる。			代表的なスケジューリングについて読むことができる。		スケジューリングについて必要性など説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	工業製品の生産工程におけるコンピュータの活用例を学ぶ。情報科学、設計、工作機械を軸として講義する。						
授業の進め方・方法	実際のものの流れを想定した生産現場での工程管理表を作成することでより実際の知識を見いだす。教科書は英文のテキストで受講者に配布する(約50ページ)各自での和訳を予習とする。						
注意点	講義時間のなるべく多くの時間を英語を用いて行う。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	History of Production System		生産システムの変換点と支えた技術を説明できる。		
		2週	Automation		生産の自動化の歴史と範囲を説明できる。		
		3週	Numarical Control		数値制御の工作機械の原理について説明できる。		
		4週	Material Handling and Movement		流れ形生産方式の形態と製品の搬送方法について説明する。		
		5週	Industrial Robot		産業用ロボットやマテハンについて説明できる。		
		6週	Design for Assembly, Disassembly, and Service		製品の搬送, 組立方法について説明できる。		
		7週	Optimization & Trade off		最適化の手法を知り、トレードオフの概念を説明できる。簡単な配合問題が解ける。		
		8週	Manufacturing System		コンピューター統合生産システムについて説明できる。		
	4thQ	9週	CAD/CAM		CAD/CAMを用いた開発形態の現状を説明できる。		
		10週	CAE		製品設計・工程設計・作業設計への情報技術の利用の現状を説明できる。製品設計・工程設計・作業設計への情報技術の利用の現状を説明できる。 □ 数値解析によるCAEの現状を説明できる。		
		11週	Group technology		グループテクノロジーについて説明できる。		
		12週	FMS		フレキシブル生産システムの要素を説明できる。 □ FMSの長所・短所を説明できる。		
		13週	JIT		トヨタ生産方式の長所・短所を説明できる。		
		14週	Scheduling		スケジューリングの種類を説明できる。 □ ガントチャートを書くことができる。		
		15週	定期試験		授業項目について達成度を確認する。		
		16週	試験答案の返却・解説		試験において間違えた部分を自分の課題として把握する(非評価項目)		
評価割合							
	試験	課題	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	30	0	0	0	0	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	70	30	0	0	0	0	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)	授業科目	安全衛生工学
科目基礎情報					
科目番号	0042		科目区分	専門 / 選択	
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専2	
開設期	前期		週時間数	2	
教科書/教材	プリントを適宜配布する。/衛生管理－第1種用－上 中央労働災害防止協会編, 衛生管理－第1種用－下 中央労働災害防止協会編,				
担当教員	寄村 和広				
到達目標					
1. 労働安全衛生法等で、事業者が行う安全配慮義務とは何かを説明できる。又、不安全行動・不安全状態及びフールプルーフ及びフェールセーフの意味を理解し、説明できる。 2. ハインリッヒの法則を説明できる。そして、ヒヤリハット活動との関係を説明できる。 3. リスクアセスメントの意義・進め方を説明できる。 4. 危険予知訓練の意義・進め方を説明できる。 5. 労働安全衛生法、労働安全衛生規則、労働基準法の目的及びその概要を説明できる。又、労働安全衛生マネジメントシステムの概要を説明できる。 6. 労働安全衛生法の安全衛生管理体制の内容を説明できる。又、作業環境管理と職業性疾病との関係を説明できる。 7. 製造物責任法(PL法)の説明ができる。					
ルーブリック					
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安
評価項目1	標準的な到達レベルに加えて、以下のことができる。 1) 安全配慮義務と事業者責任の関係を具体的な例で説明できる。 2) 不安全行動と不安全状態を無くするための対策が説明できる。 3) フールプルーフとフェールセーフの具体的な事例を示し説明できる。		1) 労働安全衛生法で要求している安全配慮義務とは、どんなものか概要を説明できる。 2) 不安全行動とは、どんな行動を意味するのか説明できる。 3) 不安全状態とは、どんな状態を意味するものか説明できる。 4) フールプルーフの意味を理解し、説明できる。 5) フェールセーフの意味を理解し、説明できる。		労働安全衛生法の目的が理解できていない。又、不安全行動、不安全状態、フールプルーフ、フェールセーフの意味が理解できていない。
評価項目2	標準的な到達レベルに加えて、以下のことができる。 1) ハインリッヒの法則を応用した安全活動が説明できる。 2) ヒヤリハット活動が事業活動以外で活用されている事例を説明できる。		1) ハインリッヒの1：29：300法則が説明できる。 2) ヒヤリハットとは、どんな状態のものであるか説明できる。 3) ヒヤリハット活動がハインリッヒの法則と関連していることが説明できる。又、ヒヤリハット活動の目的が説明できる。		ハインリッヒの法則が、「重傷災害1件の背後に29件の軽傷、300件のヒヤリハットが起きていた。」とする内容であることを理解できていない。
評価項目3	標準的な到達レベルに加えて、以下のことができる。 1) リスクアセスメントの「危険性又は有害性」の意味を具体的に説明できる。 2) リスクアセスメントを進めるための基本的な手順を説明できる。		1) リスクアセスメントが法の要求事項（努力義務）であることが説明できる。 2) リスクアセスメントが何故必要なのかを説明できる。又、リスクアセスメントの進め方を説明できる。		リスクアセスメントが安全衛生活動に必要な経緯が説明できない。又、リスクアセスメントの進め方が説明できない。
評価項目4	標準的な到達レベルに加えて、以下のことができる。 1) 危険予知活動の手法で、「基礎4ラウンド法」を説明できる。 2) 危険予知訓練が目指すものが説明できる。		1) 危険予知訓練が、リスクアセスメントと関連した活動であることが説明できる。 2) 危険予知訓練の進め方が説明できる。		危険予知訓練の為のイラストを見て、考えられる危険がどんどん出てこない。又、リスクアセスメントとの関連を説明できない。
評価項目5	標準的な到達レベルに加えて、以下のことができる。 1) 労働安全衛生法と労働基準法の関連を説明できる。 2) 労働安全衛生規則は、新たに発生した労働災害に対応した追加の法が制定されていることを説明できる。 3) 労働基準法は、労働に関する規制等を定める日本の法律、労働組合法、労働関係調整法と共に、いわゆる労働三法の一つであることを説明できる。 4) 労働安全衛生マネジメントシステムの「点検と改善等」項目があり、改善活動のステップを説明できる。		1) 労働安全衛生法の目的及び概要が説明できる。 2) 労働安全衛生規則が、労働安全衛生法及び労働安全衛生法施行令の規定に基づき、並びに同法を実施するため、労働安全衛生規則が定めてあることが説明できる。 3) 労働基準法が賃金、労働契約、労働時間、休憩、休日及び年次有給休暇などの最低基準を定めた法であることを説明できる。 4) 労働安全衛生マネジメントシステムについて、システムの概要を説明できる。		安全衛生の安全とは、許容できないリスクがないこと。衛生とは、健康をまもる。を意味することが理解できない。又、労働基準法が労働者のための法律であることが理解できない。 労働安全衛生マネジメントシステムが、労働（職業）上の衛生（健康）の確保と安全の確保のための人・物・金・情報などの経営資源をやり繰り(manage)して、PDCAサイクルを回し効率的に効果を上げる仕組みであることを理解していない。

評価項目6	標準的な到達レベルに加えて、以下のことができる。 1) 衛生委員会、安全委員会の概要が説明できる。 2) 有害作業環境と健康障害の関係を説明できる。 3) 職業性疾病の予防の手段として「化管法SDS(安全データシート)」があるが、その概要を説明できる。 4) 作業環境管理の「管理」で、使われる「PDCAサイクル」の意味を説明できる。 5) 「熱中症」とは、暑い環境で生じる障害の総称で、熱失神・熱疲労・熱射病・熱けいれん・熱射病の病型ごとの症状を説明できる。	1) 衛生管理体制の役割が説明でき、同じような安全管理体制の役割についても説明ができる。 2) 作業環境要素の意味と有害作業環境要素にどんなものがあるかを説明できる。 3) 職業性疾病とは、どんな疾病かを説明できる。又、職業性疾病の原因を説明できる。 4) 作業環境管理とはどんな管理を行うことであるかを説明できる。 5) 労働安全衛生規則の「第9章 救急用具」の事業者が最低限備えなければならない救急用具及び材料を説明できる。	事業活動では、労働者の安全衛生を管理するための体制を定め、災害や職業性疾病が発生しないように、定期的に衛生委員会、安全委員会を定期的に開催して、規則や各種対策を決定し、社員教育等で周知していくことなどが、労働安全衛生法及び関連規則で決められているが、このような内容を理解していない。又、緊急時を想定しての訓練の実施や救急用具の備え付けが義務付けられていることが分からない。
評価項目7	標準的な到達レベルに加えて、以下のことができる。 製造物責任法（PL法）に関する報道がされているが、身近にある事例として、その内容を説明できる。	製造物責任法（PL法）の概要を説明できる。又、法にある「欠陥」について説明ができる。	物作り側にも問題が発生した場合には、損害賠償責任があることを認識していない。

学科の到達目標項目との関係

教育方法等

概要	技術者に必要な安全衛生について、安全衛生の目的・目標は何かを認識し、安全衛生の必要性、関連する法規制、作業環境及び食の安全を含む製品の安全性に関する諸問題等について理解する。各項目の目標を以下に示す。 1. 労働安全衛生法等で、事業者が行う安全配慮義務とは何かを説明できる。又、不安全行動・不安全状態及びフールプルーフ及びフェールセーフの意味を理解し、説明できる。 2. ハインリッヒの法則を説明できる。そして、ヒヤリハット活動との関係を説明できる。 3. リスクアセスメントの意義・進め方を説明できる。 4. 危険予知訓練の意義・進め方を説明できる。 5. 労働安全衛生法、労働安全衛生規則、労働基準法の目的及びその概要を説明できる。又、労働安全衛生マネジメントシステムの概要を説明できる。 6. 労働安全衛生法の安全衛生管理体制の内容を説明できる。又、作業環境管理と職業性疾病との関係を説明できる。 7. 製造物責任法(PL法)の説明ができる。
授業の進め方・方法	法の順守には、該当する法の内容を理解することがまず大事である。労働安全衛生法及び関連する法規制内容を理解し、事業者・労働者としてなすべきことを理解することが重要である。又、労働災害の発生を防止するためには、リスクアセスメント等の理解が重要である。授業ごとに必ず予習を行い、授業内容を確実に理解すること。
注意点	将来、衛生管理者1種および2種をはじめとする、労働安全コンサルタントや衛生コンサルタント等の資格試験に合格するために、参考書等で予習をし、授業時間での質問等に対応できるようにしていること。又、講義終了後は、復習として演習課題等の課題に取り組むこと。そして、労働災害に関する事故や商品・製造物に関する事故に関する記事について自分の考えをまとめておくこと。疑問点があれば、きちんと質問すること。

授業計画

		週	授業内容	週ごとの到達目標
前期	1stQ	1週	1. 安全衛生の基礎	☐ (1) 安全配慮義務について説明できる。 ☐ (2) 不安全な行動について説明できる。 ☐ (3) 不安全な状態について説明できる。 ☐ (4) フールプルーフについて説明できる。 ☐ (5) フェールセーフについて説明できる。
		2週	2. ヒヤリハット	☐ (1) ハインリッヒの法則について説明できる。 ☐ (2) ヒヤリハットの意義について説明できる。 ☐ (3) ヒヤリハットの進め方について説明できる。
		3週	3. リスクアセスメント	☐ (1) リスクアセスメントの意義について説明できる。 ☐ (2) リスクアセスメントの進め方について説明できる。
		4週	3. リスクアセスメント	☐ (1) リスクアセスメントの意義について説明できる。 ☐ (2) リスクアセスメントの進め方について説明できる。
		5週	4. 危険予知訓練（KYT）	☐ (1) 危険予知訓練（KYT）の意義について説明できる。 ☐ (2) 危険予知訓練（KYT）の進め方について説明できる。
		6週	4. 危険予知訓練（KYT）	☐ (1) 危険予知訓練（KYT）の意義について説明できる。 ☐ (2) 危険予知訓練（KYT）の進め方について説明できる。
		7週	5. 関係法令、労働安全衛生マネジメントシステム	☐ (1) 労働安全衛生法について説明できる。 ☐ (2) 労働安全衛生規則について説明できる。 ☐ (3) 労働基準法について説明できる。 ☐ (4) 労働安全衛生マネジメントシステムについて説明できる。

		8週	5. 関係法令、労働安全衛生マネジメントシステム	☐ (1) 労働安全衛生法について説明できる。 ☐ (2) 労働安全衛生規則について説明できる。 ☐ (3) 労働基準法について説明できる。 ☐ (4) 労働安全衛生マネジメントシステムについて説明できる。
	2ndQ	9週	5. 関係法令、労働安全衛生マネジメントシステム	☐ (1) 労働安全衛生法について説明できる。 ☐ (2) 労働安全衛生規則について説明できる。 ☐ (3) 労働基準法について説明できる。 ☐ (4) 労働安全衛生マネジメントシステムについて説明できる。
		10週	5. 関係法令、労働安全衛生マネジメントシステム	☐ (1) 労働安全衛生法について説明できる。 ☐ (2) 労働安全衛生規則について説明できる。 ☐ (3) 労働基準法について説明できる。 ☐ (4) 労働安全衛生マネジメントシステムについて説明できる。
		11週	6. 労働衛生	☐ (1) 衛生管理体制について説明できる。 ☐ (2) 作業環境要素について説明できる。 ☐ (3) 職業性疾病について説明できる。 ☐ (4) 作業環境管理について説明できる。 ☐ (5) 救急処置について説明できる。
		12週	6. 労働衛生	☐ (1) 衛生管理体制について説明できる。 ☐ (2) 作業環境要素について説明できる。 ☐ (3) 職業性疾病について説明できる。 ☐ (4) 作業環境管理について説明できる。 ☐ (5) 救急処置について説明できる。
		13週	6. 労働衛生	☐ (1) 衛生管理体制について説明できる。 ☐ (2) 作業環境要素について説明できる。 ☐ (3) 職業性疾病について説明できる。 ☐ (4) 作業環境管理について説明できる。 ☐ (5) 救急処置について説明できる。
		14週	7. 製造物責任法（PL法）	☐ 製造物責任法（P L 法）について説明できる。
		15週	試験答案の返却・解説	授業項目1～7に対して達成度を確認する。 試験において間違えた部分を自分の課題として把握する。
		16週		

評価割合

	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	70	0	0	0	0	30	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	超伝導工学	
科目基礎情報							
科目番号	0043		科目区分		専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数		学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年		専2		
開設期	後期		週時間数		2		
教科書/教材	なし（必要に応じて、プリントを配布）						
担当教員	奥 高洋						
到達目標							
先端技術の一つである超伝導を例に、その基本から応用まで幅広く学ぶ。機能/材料開発における基礎の重要性を理解した上で、応用に際してのユニークな発想力を養うことを目指す。具体的には、以下に掲げる4つを目標とする。 1. 超伝導現象について、各々説明できる。 2. 代表的な超伝導材料について分類でき、それらの特徴等を説明できる。 3. 強電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる。 4. 弱電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
評価項目1	設定なし		超伝導の特徴的な現象について、各々説明できる。		超伝導の特徴的な現象について、各々説明できない。		
評価項目2	超伝導の特徴的な値（ λ , ξ , κ ほか）について説明でき、数式を用いた理論的取扱いができる。		代表的な超伝導材料について分類できる。また、第1種超伝導体と第2種超伝導体についても説明できる。		代表的な超伝導材料について分類できない。また、第1種超伝導体と第2種超伝導体についても説明できない。		
評価項目3	強電分野での応用例において、実状・問題点等を踏まえて、何らかの解決案を提示できる。		強電分野における応用例を挙げて、その動作原理について説明できる。		強電分野における応用例を挙げて、その動作原理について説明できない。		
評価項目4	弱電分野での応用例において、実状・問題点等を踏まえて、何らかの解決案を提示できる。		弱電分野における応用例を挙げて、その動作原理について説明できる。		強電分野における応用例を挙げて、その動作原理について説明できない。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	様々な専門分野の境界に位置する超伝導を例に学ぶことで、各専攻科生の専門分野と先端技術の関わりを認識するとともに、創造力に富んだ技術者としての素養を養う。						
授業の進め方・方法	講義形式を基本とする。全専攻共通科目ではあるが、数学、電磁気学、物性学等の基礎学力を必要とする。						
注意点	授業項目に関連する内容については予習 / 復習が必要である。加えて適宜レポート等を課すので、毎回210分以上の自学自習を行わなければならない。						
授業計画							
		週	授業内容			週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	超伝導現象①			超伝導の特徴的な現象について、各々説明できる。	
		2週	超伝導現象②			超伝導の特徴的な現象について、各々説明できる。	
		3週	超伝導現象③			超伝導の特徴的な現象について、各々説明できる。	
		4週	超伝導材料①			代表的な超伝導材料について分類でき、それらの特徴等を説明できる。	
		5週	超伝導材料②			第1種超伝導体と第2種超伝導体について理解し、混合状態や渦糸および磁束フローについて説明できる。	
		6週	超伝導材料③			超伝導現象利用時における冷却技術について説明できる	
		7週	強電分野への応用①			強電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる。	
		8週	強電分野への応用②			強電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる。	
	4thQ	9週	強電分野への応用③			強電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる。	
		10週	強電分野への応用④			強電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる。	
		11週	弱電分野への応用①			弱電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる	
		12週	弱電分野への応用②			弱電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる	
		13週	弱電分野への応用③			弱電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる	
		14週	弱電分野への応用④			弱電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる	
		15週	定期試験 試験答案の返却・解説			授業内容に対して達成度を確認する。試験において間違った部分を自分の課題として把握する（非評価項目）。	
		16週					
評価割合							
		試験		レポート		合計	
総合評価割合		60		40		100	
基礎的能力		0		0		0	
専門的能力		60		40		100	

分野横断的能力

0

0

0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	ヒューマンインターフェース	
科目基礎情報							
科目番号		0044		科目区分	専門 / 選択		
授業形態		講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科		電気情報システム工学専攻		対象学年	専2		
開設期		前期		週時間数	2		
教科書/教材		なし					
担当教員		新徳 健					
到達目標							
ヒューマンインタフェースの考え方の基礎について理解する。ヒューマンインタフェースは人と機器、あるいは情報機器を介した人と人との関わりを支援する技術に関する学問である。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1		ヒューマンインタフェースの主要な目的と定義について説明できる。		ヒューマンインタフェースの定義を説明できる。		ヒューマンインタフェースの定義を説明できない。	
評価項目2		人間特性である身体特性、生理特性、認知特性、感性について説明できる。		人間特性4つのうち、少なくとも2つについて説明できる。		人間特性4つのうち、少なくとも2つについて説明できない。	
評価項目3		ヒューマンエラーの発生要因と防止対策について説明できる。		ヒューマンエラーの定義を説明できる。		ヒューマンエラーの定義を説明できない。	
評価項目4		入出力インタフェースとインタラクションスタイルについて説明できる。		入出力インタフェースについて説明できる。		入出力インタフェースについて説明できない。	
評価項目5		ユーザビリティ、HIの原理とデザイン原則、ガイドライン、デザインプロセスと評価方法について説明できる。		ユーザビリティ、HIの原理とデザイン原則、ガイドラインについて説明できる。		ユーザビリティ、HIの原理とデザイン原則、ガイドラインについて説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		ヒューマンインタフェースは工学だけでなく、その他の広い分野に関連のある学問である。柔軟な発想力を持って臨むことが必要とされる。					
授業の進め方・方法		講義の内容をよく理解するために、毎回、配布プリント等を参考に、60分以上の自学自習が必要である。					
注意点		疑問点があれば、その都度質問すること。					
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	ヒューマンインタフェースの概要		ヒューマンインタフェースの原理と定義について説明できる。		
		2週	人間の特性とヒューマンインタフェース		人の身体特性、生理特性、認知特性と感性について説明できる。		
		3週	人間の特性とヒューマンインタフェース				
		4週	人間の特性とヒューマンインタフェース				
		5週	人間の特性とヒューマンインタフェース				
		6週	インタフェースの認知システム		ヒューマンモデル、ヒューマンエラーの分類とエラー解析について説明できる。		
		7週	入出力インタフェース		入出力機器とのインタラクションについて説明できる。		
		8週	入出力インタフェース				
	2ndQ	9週	入出力インタフェース				
		10週	インタフェース行動の心理・生理		人の心理行動に関わる生理学的知識について説明できる。		
		11週	インタフェース行動の心理・生理				
		12週	インタフェースのデザインと評価		インタフェースデザインの指針、デザイン手法、評価手法について説明できる。		
		13週	インタフェースのデザインと評価				
		14週	インタフェースのデザインと評価				
		15週	定期試験		授業項目について達成度を確認する。		
		16週					
評価割合							
		試験		発表等		合計	
総合評価割合		80		20		100	
専門的能力		80		20		100	

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成30年度 (2018年度)		授業科目	溶接・接合工学	
科目基礎情報							
科目番号	0047			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専2		
開設期	後期			週時間数	後期:2		
教科書/教材	溶接技術の基礎 溶接学会編 産報出版／異種接合材の材料力学と応力集中 野田尚昭他 3 名著 コロナ社						
担当教員	東 雄一						
到達目標							
・溶接・接合法とその種類，溶接継手の強さ，溶接設計について理解し，説明できる。 ・鋼の熱影響部の材質と機械的特性の変化について理解し，説明できる。 ・溶接欠陥と対策について理解し，説明できる。 ・複合則と異種接合材の弾性係数について理解し，計算できる。 ・最新の溶接・接合研究動向を調査し，プレゼンテーションできる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	溶接・接合法とその種類，溶接継手の強さ，溶接設計について理解し，説明できる。			溶接・接合法とその種類，溶接継手の強さ，溶接設計について理解できる。		溶接・接合法とその種類，溶接継手の強さ，溶接設計について理解できない。	
評価項目2	各非鉄金属材料の熱影響部の材質と機械的特性の変化について理解し，説明できる。			鋼の熱影響部の材質と機械的特性の変化について理解し，説明できる。		鋼の熱影響部の材質と機械的特性の変化について理解できない。	
評価項目3	溶接欠陥と対策について理解し，説明できる。			溶接欠陥と対策について理解できる。		溶接欠陥と対策について理解できない。	
評価項目4	複合則と異種接合材の弾性係数について理解し，計算できる。			複合則と異種接合材の弾性係数について理解できる。		複合則と異種接合材の弾性係数について理解できない。	
評価項目5	まとめたプレゼン資料を分かりやすく簡潔に発表することができる。			溶接接合に関する研究論文を探し，その中から一つの文献を読み，内容を理解し，プレゼン資料を作成することができる。		溶接接合に関する研究論文を探し，その中から一つの文献を読み，内容を理解し，プレゼン資料を作成することができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	溶接・接合技術は分野問わずものづくりの基盤となる加工技術であり，あらゆる産業分野における溶接・接合技術の重要性はしだいに高まっている．本科目では溶接・接合技術の基礎について学び，最新の溶接・接合技術の研究動向を調査することにより学術的な溶接・接合技術の意義についても理解を深める．						
授業の進め方・方法	パワーポイントによる講義形式とする．復習として，後から読み返す際に分かり易いノートを各自作成すること．適宜，課題レポートを課すが，納期遵守を心がけて提出遅れのないようにすること．						
注意点							
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	溶接・接合法とその種類		溶接の歴史について理解し，説明できる．溶接の一般的な利点と欠点を理解し，説明できる．溶接・接合法の分類について理解し，説明できる．		
		2週	溶接・接合法とその種類		代表的な溶接法（被覆アーク溶接，マグ溶接，イナートガスアーク溶接，サブマージアーク溶接，抵抗溶接）の概略や特徴を理解し，説明できる．代表的な固相接合法（摩擦圧接，摩擦攪拌接合，超音波接合）の概略や特徴を理解し，説明できる		
		3週	溶接継手の強さ		継手の静的強さについて理解し，説明できる．継手の疲れ強度について理解し，説明できる．		
		4週	溶接継手の強さ		継手の残留応力と溶接変形について理解し，説明できる．		
		5週	溶接設計		溶接継手の種類について理解し，説明できる．溶接継手の記号について理解し，説明できる．		
		6週	溶接設計		溶接継手の強度計算について理解し，計算できる．		
		7週	熱影響部の材質と機械的特性の変化		鋼の熱処理による材質と機械的特性の関係について理解し，説明できる．		
		8週	熱影響部の材質と機械的特性の変化		鋼の溶接熱影響部の組織と硬さの関係について理解し説明できる．		
	4thQ	9週	溶接欠陥と対策		溶接の欠陥とその対策について理解し，説明できる．		
		10週	異種接合材料の材料力学		複合則と異種接合材の弾性係数について理解し，計算できる．		
		11週	最新の溶接・接合研究動向調査		最新の溶接・接合の研究動向を調査し，複数の論文等の文献（英文）から興味のある文献を1つ選ぶことができる．		
		12週	最新の溶接・接合研究動向調査内容のプレゼン資料作成		各自選んだ文献を読み，内容を理解し，プレゼン資料を作成することができる．		
		13週	最新の溶接・接合研究動向調査内容のプレゼン資料作成		各自選んだ文献を読み，内容を理解し，プレゼン資料を作成することができる．		
		14週	最新の溶接・接合研究動向調査内容の発表		各自まとめた文献のプレゼンテーションをすることができる．		
		15週	期末試験				
		16週					

評価割合				
	試験	レポート	プレゼン評価	合計
総合評価割合	50	20	30	100
基礎的能力	50	20	30	100
専門的能力	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0